

長崎県文化財調査報告書 第160集

平野遺跡

—液化石油ガス国家備蓄福島基地建設事業に伴う緊急発掘調査—

2001

長崎県教育委員会



平野遺跡全望（上空から）

〈福島町より提供〉



A地点出土の石槍

発刊にあたって

本書は、福島町LPG基地建設に伴って実施した平野遺跡の発掘調査報告書です。

福島町は長崎県の北部に位置し、佐賀県との県境にある人口約3500人の町で、LPG基地の島としてその名を知られています。

LPG建設予定地内に所在する平野遺跡は、縄文時代から弥生時代を主体とする遺跡として周知されていましたが、今回の調査では特に石器製作に伴う剥片・石核が多数出土したこと、その状況から縄文時代における石器製作に関わった遺跡であったことが判明しました。石器製作遺跡は県下でも類例が少なく、石器製作の技術的な解明の上で貴重な資料を提供したことになります。

最後に今回の調査は福島町にとって始めての発掘調査ではありましたが、ご協力いただいた関係者の皆様にお礼を申し上げるとともに、今回の平野遺跡で行われた発掘調査成果が学術資料として活用され、文化財の愛護に役立つことを念じて発刊のあいさつといたします。

平成13年3月30日

長崎県教育委員会教育長 木村道夫

例　　言

1. 本書は、液化石油ガス国家備蓄福島基地建設事業に伴う長崎県北松浦郡福島町所在の平野遺跡緊急発掘調査の結果報告書である。
2. 調査は、長崎県土地開発公社を事業主体とし、長崎県教育庁文化課が発掘調査を担当した。平成8年11月27日から12月18日に遺跡の範囲確認調査を実施し、その結果をもとに平成11年4月12日から12月27日まで本調査を行った。
3. 調査担当者は、以下のとおりである。

試掘調査	長崎県教育庁文化課	文化財保護主事	村川 逸朗（現原の辻遺跡調査事務所職員）
	同	文化財保護主事	小松 旭（現県立北陽台高等学校教員）
本調査	同	係長（副参事）	副島 和明
	同	文化財保護主事	福田 一志
	同	文化財保護主事	本田 秀樹
	同	文化財調査員	高原 愛
	同	文化財調査員	尾上 博一（現巣原町教育委員会社会教育 主事）
	同	文化財調査員	田中由美子

4. 土層・遺構の実測は、福田・高原・尾上・田中が行った。
5. 本書の執筆は第3章・第4章を福田、第1章・第2章・第4章を高原が行い、資料計測等は田中が行ったが、放射性炭素年代測定・花粉分析・植物珪酸体分析とその結果の執筆は、株式会社古環境研究所に委託した。
6. 遺物の実測と遺構・遺物のトレースは、
黒川英子・小林利恵子・近藤慶子・斎藤いづみ・中村幸・濱本秀美・松尾美代子・渡辺洋子
(五十音順) の協力を得ることができた。
7. 掲載地図は、国土地理院(平成4年7月1日)発行の2万5千分の1地図を活用した。
8. 遺物のスケールは、図版がすべて3分の2、写真図版は石器が3分の2、土器が2分の1とした。
9. 土器は、県文化課古門雅高・本田の協力を得た。
10. 写真撮影は、調査関係を福田・高原・尾上が、遺物は本田の指導を受け、高原が行った。
11. 本遺跡の遺物および写真・図面等は、現在長崎県教育庁文化課立山分室で保管している。
12. 本書の編集は、高原が行った。

本文目次

第1章 地理的・歴史的環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第1項 周辺の遺跡	2
第2項 福島町の遺跡	10
第2章 調査に至る経緯と方法	13
第3章 調査	16
第1節 A地点の調査	16
第2節 B地点の調査	23
第4章 まとめ	53
付. 長崎県・平野遺跡における自然科学分析	59

挿図目次

第1図 福島町の位置	
第2図 福島町の地形	1
第3図 旧石器時代の遺跡	3
第4図 繩文時代の遺物	4
第5図 繩文時代の遺跡	5
第6図 弥生時代の遺跡	6
第7図 古墳時代の遺跡	7
第8図 中世の遺跡	8
第9図 近世の遺跡	9
第10図 福島町の遺跡位置図 (1/50,000)	11
第11図 試掘擴土層図	13
第12図 平成8年度調査の出土遺物 (2/3)	14
第13図 試掘擴配置図	15

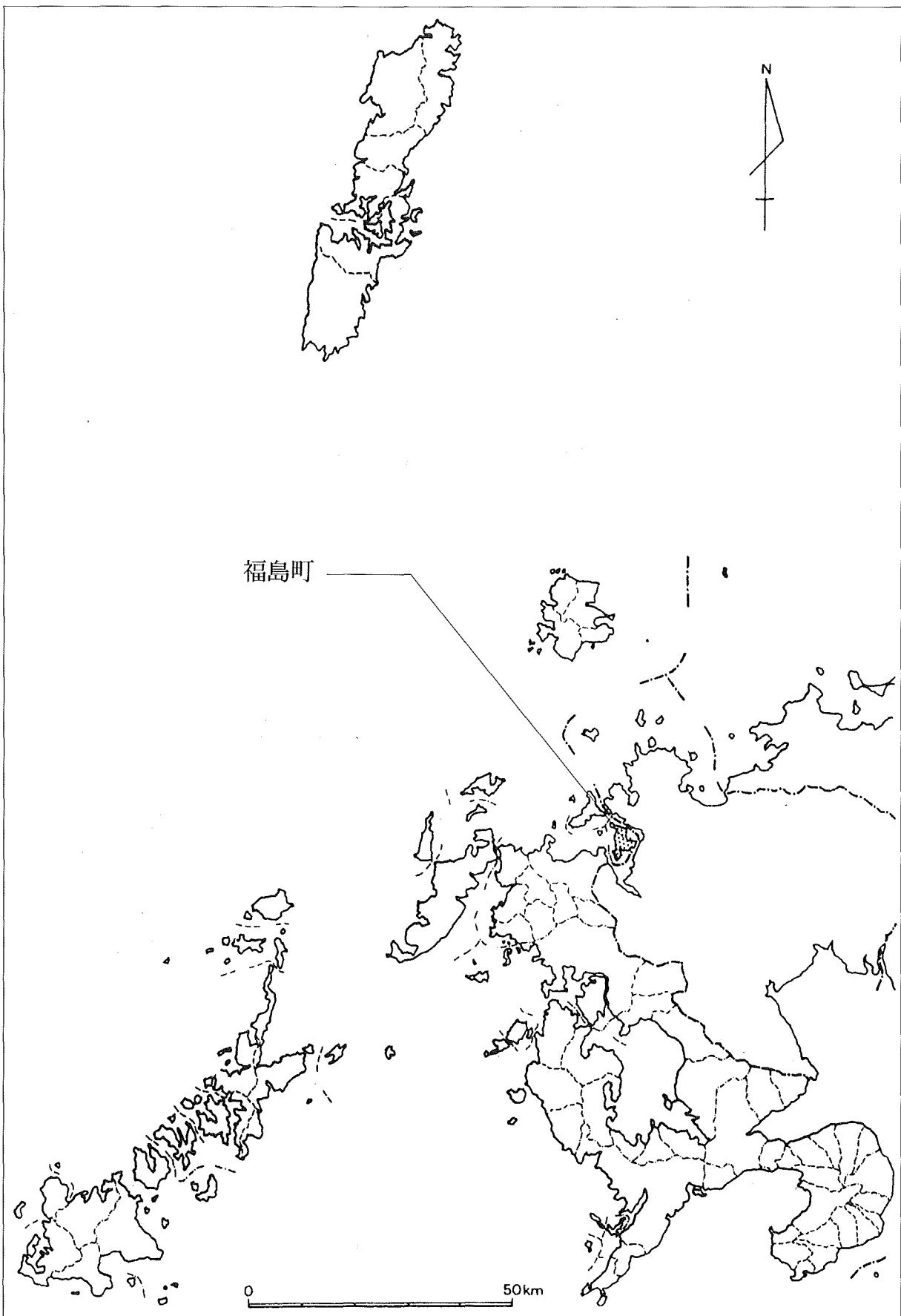
第14図 調査地点配置図	16
第15図 A地点グリッド配置図 (1/1,000)	17
第16図 土層図 (1/100)	18
第17図 A地点の遺物① (2/3)	20
第18図 A地点の遺物② (2/3)	21
第19図 A地点の遺物③ (2/3)	22
第20図 B地点グリッド配置図 (1/1,000)	23
第21図 h—20区遺物出土状況 (1/50)	24
第22図 土層図① (1/50)	25・26
第23図 土層図② (1/50)	27・28
第24図 ピット断面図 (1/20)	29
第25図 4層面ピット検出状況	30
第26図 遺構内出土遺物① (2/3)	31
第27図 遺構内出土遺物② (2/3)	32
第28図 遺構内出土遺物③ (2/3)	33
第29図 B地点の遺物—土器① (2/3)	36
第30図 B地点の遺物—土器② (2/3)	37
第31図 B地点の遺物—土器③ (2/3)	38
第32図 B地点の遺物—石器① (2/3)	40
第33図 B地点の遺物—石器② (2/3)	41
第34図 B地点の遺物—石器③ (2/3)	42
第35図 B地点の遺物—石器④ (2/3)	43
第36図 B地点の遺物—石器⑤ (2/3)	44
第37図 B地点の遺物—石器⑥ (2/3)	45
第38図 B地点の遺物—石器⑦ (2/3)	46
第39図 B地点の遺物—石器⑧ (2/3)	47
第40図 B地点の遺物—石器⑨ (2/3)	49
第41図 B地点の遺物—石器⑩ (2/3)	50
第42図 早期小型石鏃と関連土器 (石器は2/3, 土器は1/3)	54
第43図 古相の刻目突帶文土器 (1/2)	55
第44図 本遺跡出土の石鏃	57
第45図 石核形態	58

表 目 次

表 1	福島町の遺跡一覧	10
表 2	遺構内出土遺物一覧	34
表 3	出土土器観察表	38
表 4	出土石器観察表①	51
表 5	出土石器観察表②	52

図 版 目 次

卷頭カラー (1)	平野遺跡全望 (上空から)	
卷頭カラー (2)	A地点出土の石槍	
図版 1	梶谷城跡より・遺跡遠景・A地点完掘全景 (北から)	67
図版 2	調査風景・A地点 c - 8 区北壁・A地点石槍出土状況	68
図版 3	B地点遠景・B地点 h - 20 区西壁・B地点 3 層遺物出土状況 (北から)	69
図版 4	B地点刻目突帶文土器出土状況・B地点 4 層遺構検出状況 (北から) B 地点ピット35検出状況 (土器・黒曜石片集中)	70
図版 5	B 地点ピット 1 検出状況 (埋甕・石鏸) · B 地点ピット 1 検出状況 (接写) B 地点ピット 82 内出土遺物	71
図版 6	A 地点の遺物①	72
図版 7	遺構内出土遺物	73
図版 8	B 地点の遺物①	74
図版 9	B 地点の遺物②	75
図版 10	B 地点の遺物③	76
図版 11	B 地点の遺物④	77
図版 12	B 地点の遺物⑤	78
図版 13	B 地点の遺物⑥	79
図版 14	A 地点の遺物②と B 地点の遺物⑦	80



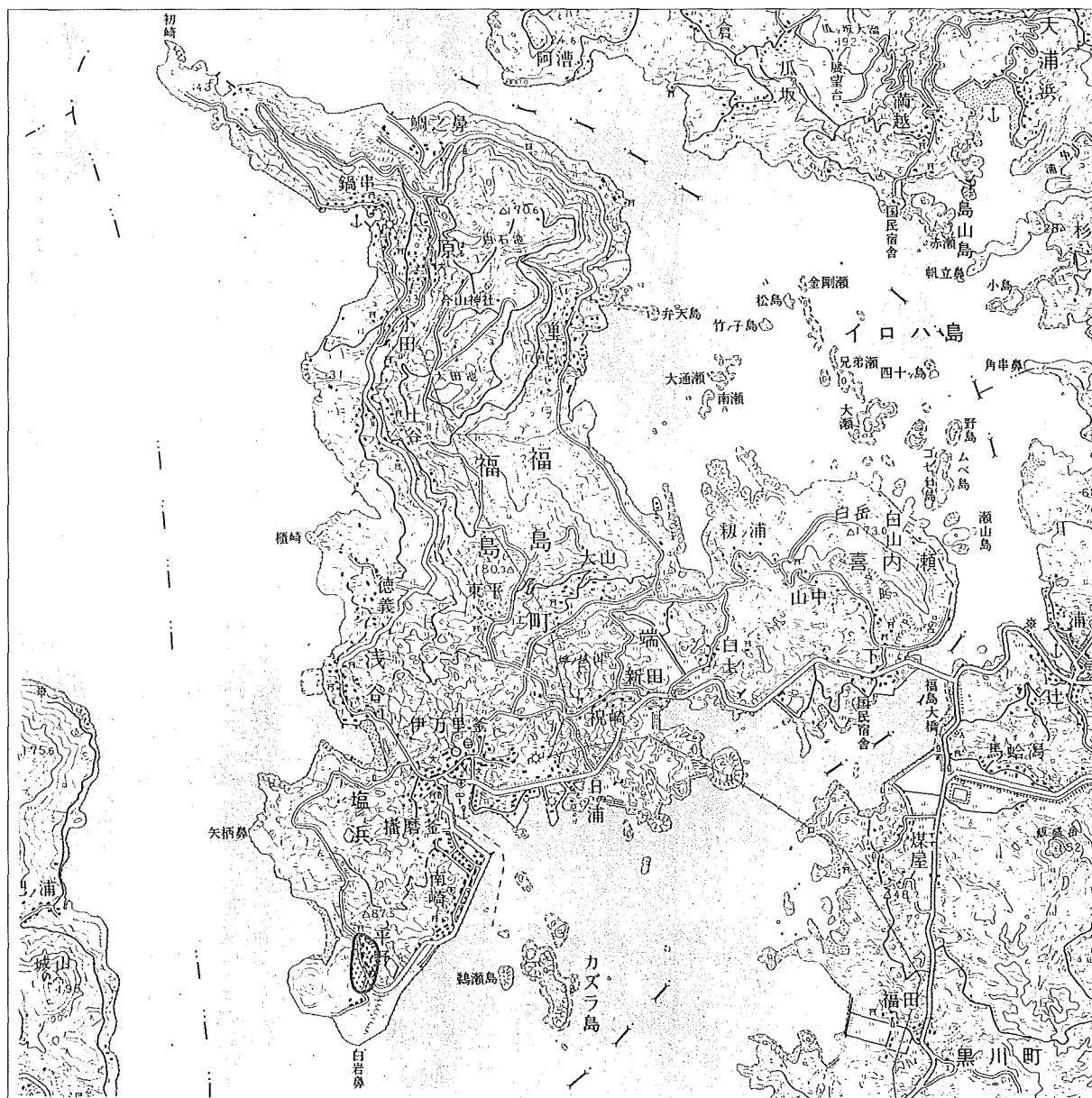
第1図 福島町の位置

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

福島町は、東松浦半島・北松浦半島の内湾である伊万里湾に浮かぶ東西5.92km、南北7.32km、面積17.22 km²の島自体であり、旧来から漁業と炭坑で繁栄した町である。伊万里市の北端波多津町から昭和42年10月に福島大橋が架橋したため、長崎県より佐賀県に近い位置にある。

表層地質は、主に新第三紀堆積岩と玄武岩で構成されている。この地域の基盤層は第三紀堆積岩で、堆積層の砂岩・泥岩で構成されており化石や石炭を含むため、福島町を含む県北地域や佐賀県北西部には炭坑が多い。その上層には流動性溶岩である玄武岩が覆い、溶岩台地を形成している。



第2図 福島町の地形

地形は、起伏が激しく、地面が沈降したリアス式海岸であるため緩斜面がそのまま海に没している。島内は、標高が高い方から台地上平坦面・急斜面・緩斜面・平野・海岸という構造になっている。高原状の平坦な部分は町北部に残っており畑作に利用されているが、保存良好な遺跡を包蔵している可能性がある。平坦面の辺縁は急斜面を形成しているが、これは玄武岩には内部に柱状節理という縦の節理を形成する特徴があり、この節理に沿って地滑りをおこすためである。緩斜面は第三紀堆積層が露出しており、玄武岩層との境界には湧水点が多く、この地域に集落や田畠がつくられている。地滑り防止を兼ねて、棚田を造成している地域もある。平野は近世以降の埋立事業によって得られた新田と呼ばれる地域が多くを占め、河口付近は河川が短いため沖積平野がわずかに形成されている。

さて、平野遺跡は島の南西端の半島に位置し、玄武岩台地がなだらかな傾斜をもって海中に没しようとしている標高10~20m程の丘陵上に立地している。水田や畠地に利用されていたが、特に畠地部分は旧地形を留めているとみられ、また、湧水点も近接していることから、遺跡の存在が期待された。

第2節 歴史的環境

第1項 周辺の遺跡

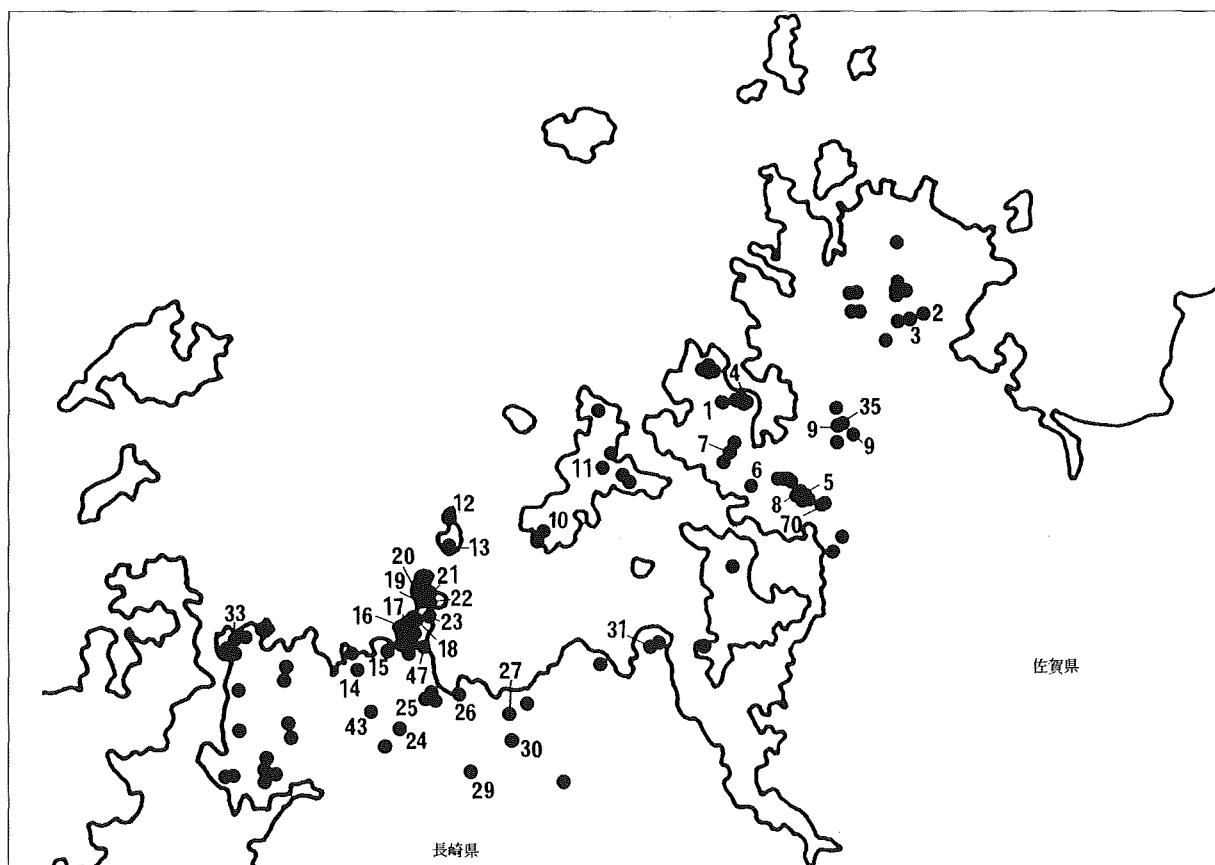
佐賀県東松浦半島から長崎県北松地区にかけて、福島と同様の地理的環境を有しているため、特に旧石器時代末期から縄文時代にかけての遺跡が多く点在する。

福島町内の遺跡との関連から、佐賀県鎮西町から伊万里市までの玄海灘から伊万里湾に面した地域の遺跡と、長崎県松浦市・田平町・鷹島町の伊万里湾圏内の遺跡を抜き出し、各時代で遺跡を振り分け、ポイントを地図上に落とした。佐賀県内の遺跡は佐賀県遺跡地図から引用し、筆者が報告書から検索できた遺跡に番号を付した。また、時代が重複した遺跡は同じ番号で示し、概要を表にまとめた。本遺跡と関係が深い旧石器・縄文時代を中心に福島町とその周辺の歴史的環境を紹介する。

〈旧石器時代〉

佐賀県伊万里市の腰岳、長崎県松浦市の星鹿半島という黒曜石原産地が立地するこの一帯は、石材入手が容易であるため、多くの旧石器時代・縄文時代の遺跡が存在する。特に、東松浦半島（いわゆる上場台地）や星鹿半島の台地や、台地から海岸へのびる丘陵上に遺跡が集中してみられる。

33の日ノ岳遺跡は、台形石器の型式名になっている遺跡である。平戸瀬戸に面した標高6~7mの微高地の鞍部に位置している。層位からナイフ形石器・台形石器の変遷を追える良好な資料や、剥片石器の接合資料等を確認した。包含層3層中3種の黒曜石石材が確認され、使用頻度が多かったものは牟田産黒曜石であるが、淀姫産黒曜石（ハリ質安山岩）製石器も遺跡上層より下層から多く出土している。淀姫産の使用頻度が低下したのは、ナイフ形石器製作において大型で幅広の剥片が不要になった結果であるという。腰岳産はわずかであった。24の田川遺跡は、河川によって刻まれた浅い谷あいの標高80m前後の台地上に立地する。出土したナイフ形石器・台形石器は1点を除き黒曜石製で、台形石器では日ノ岳型・原の辻型・枝去木型を確認しており、石器製作の変換点の



番号	遺跡名	市町名	立地	出土遺物	番号	遺跡名	市町名	立地	出土遺物
1	山中遺跡	肥前町	丘陵	ナイフ形石器・細石刃ほか	19	大石A遺跡	松浦市	丘陵	ナイフ形石器
2	原遺跡	鎮西町	丘陵	ナイフ形石器・細石刃	20	津崎遺跡	松浦市	丘陵	台形石器
3	中川原西遺跡	鎮西町	台地	ナイフ形石器・細石刃	21	大石B遺跡	松浦市	丘陵	
4	山頭I遺跡	肥前町	台地	黒曜石片	22	大石C遺跡	松浦市	丘陵	
5	甚手田II遺跡	肥前町	丘陵		23	下田遺跡	松浦市	丘陵	ナイフ形石器・石核
6	新木場東遺跡	肥前町	丘陵	ナイフ形石器	24	田川遺跡	松浦市	台地	ナイフ形石器・台形石器
7	殿木場遺跡	肥前町	丘陵	ナイフ形石器・台形石器 細石刃ほか	25	寺ノ尾C遺跡	松浦市	台地	ナイフ形石器
8	川原田遺跡	肥前町	丘陵	ナイフ形石器・細石刃ほか	26	樺町田遺跡	松浦市	丘陵	剥片尖頭器・ナイフ形石器 台形石器ほか
9	牧ノ地I・II遺跡	玄海町	丘陵	ナイフ形石器	27	辻ノ尾遺跡	松浦市	台地	ナイフ形石器・三稜尖頭器
10	開田遺跡	鷹島町	台地	ナイフ形石器・台形石器	29	明賀谷遺跡	松浦市	台地	ナイフ形石器ほか
11	長畑遺跡	鷹島町	台地	ナイフ形石器・細石核 細石刃ほか	30	宮ノ下り遺跡	松浦市	沖積平野	ナイフ形石器・台形石器
12	段ノ上遺跡	松浦市	丘陵	黒曜石製剥片	31	溝場遺跡	松浦市	台地	ナイフ形石器・台形石器
13	青島遺跡	松浦市	丘陵	ナイフ形石器・台形石器	33	日ノ岳遺跡	田平町	台地	ナイフ形石器・台形石器
14	田口高野遺跡	松浦市	丘陵	ナイフ形石器・台形石器	35	稗田II遺跡	玄海町	丘陵	ナイフ形石器
15	水尻B遺跡	松浦市	丘陵	ナイフ形石器	43	小船遺跡	松浦市	丘陵	ナイフ形石器・台形石器
16	佐世保崎遺跡	松浦市	台地	ナイフ形石器・台形石器	47	姫神社遺跡	松浦市	台地	台形石器
17	牟田A遺跡	松浦市	丘陵		70	生石遺跡	肥前町	台地	ナイフ形石器・細石刃 剥片尖頭器
18	牟田B遺跡	松浦市	丘陵	ナイフ形石器					

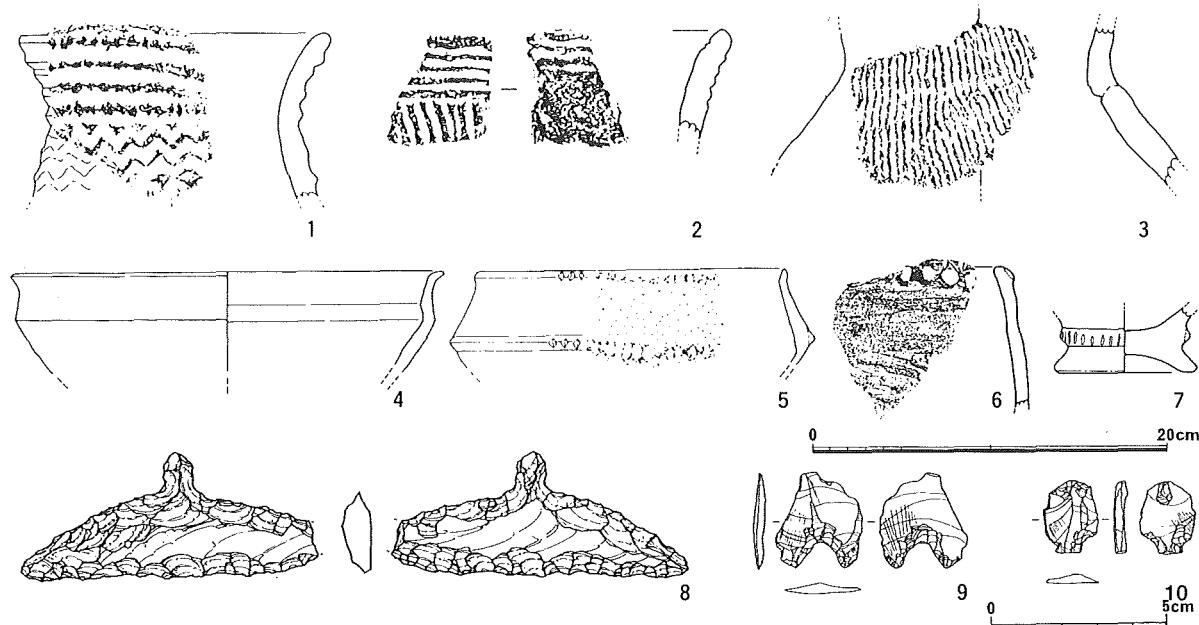
第3図 旧石器時代の遺跡

遺跡と考えられている。地図には掲載できなかったが、伊万里市白蛇山岩陰遺跡は、国見山系の裾野で標高100mの地点に位置する岩陰遺跡である。無土器層からは細石刃と円錐状細石核からなる細石器を主体に出土し、ナイフ形石器・台形石器が出土していないことから、旧石器時代末期から縄文時代にかけての遺跡であることが知られた。

〈縄文時代〉

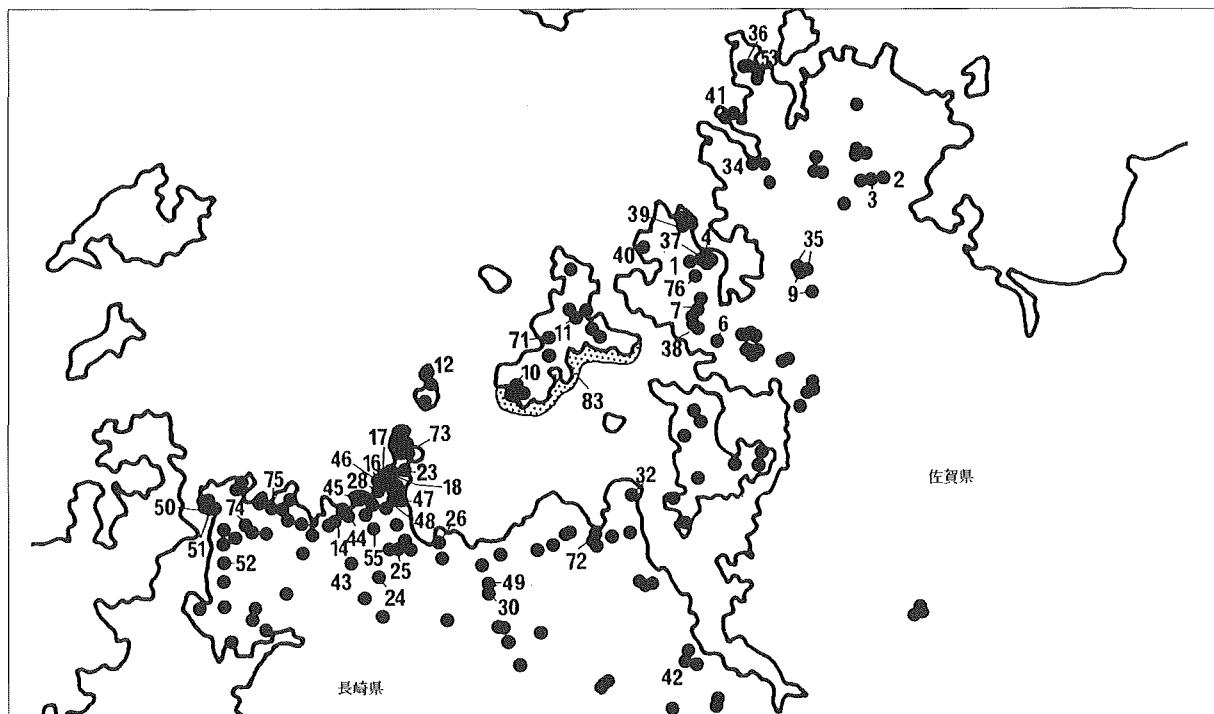
旧石器時代から継続して営まれた遺跡が多い。ほとんどが丘陵あるいは台地上に立地し、湿地や低地に生活空間を求めたのは後期以降である。

早期の遺跡は、38の田尾遺跡である。標高120mの丘陵上に立地し、細片ではあるが押型文土器、石器では剥片鏃・半磨製鏃等の石鏃を中心として出土している。また、83の鷹島海底遺跡も興味深い遺跡である。標高121m前後の調査地点から押型文土器・石器類が出土し、特に壺形押型文土器を確認できたことは、この遺跡や将来の遺跡発掘の重要なテーマの1つとなった。一方、早期の遺物包含層から出土した貝類の炭素年代測定により8,400年B. P. の結果を得たことで、古環境においても一石を投じる成果を上げた。後期の遺跡では、24が挙げられる。谷間に立地しているが、より奥まった比較的標高が高い丘陵地から186点の黒曜石製剥片鏃・62点のつまみ形石器がまとまって出土し、安山岩製鎌崎型スクレイパーも出土している。つまみ形石器は剥片鏃の製作過程で産出する付属物と考えられているが、同じ調査地点から高密度で縦長剥片を出土しており、同場所で製作された可能性が高い。後期の遺跡では地図の範囲外であるが、伊万里港の奥深くに面した丘陵地で、腰岳の北麓で標高100~200mに立地する鈴桶遺跡ははずすことができないであろう。現在でも石核と多量の縦長剥片が地表面に現れているときがあり、当時の盛んな石器製作をかいまみることができる。石器製作・組成等で周辺地域に多大な影響を与えた重要な遺跡である。晩期から弥生時代中期初頭の遺物が出土したのは、76の押川遺跡である。緩やかな起伏の丘陵から張り出した鞍部上に



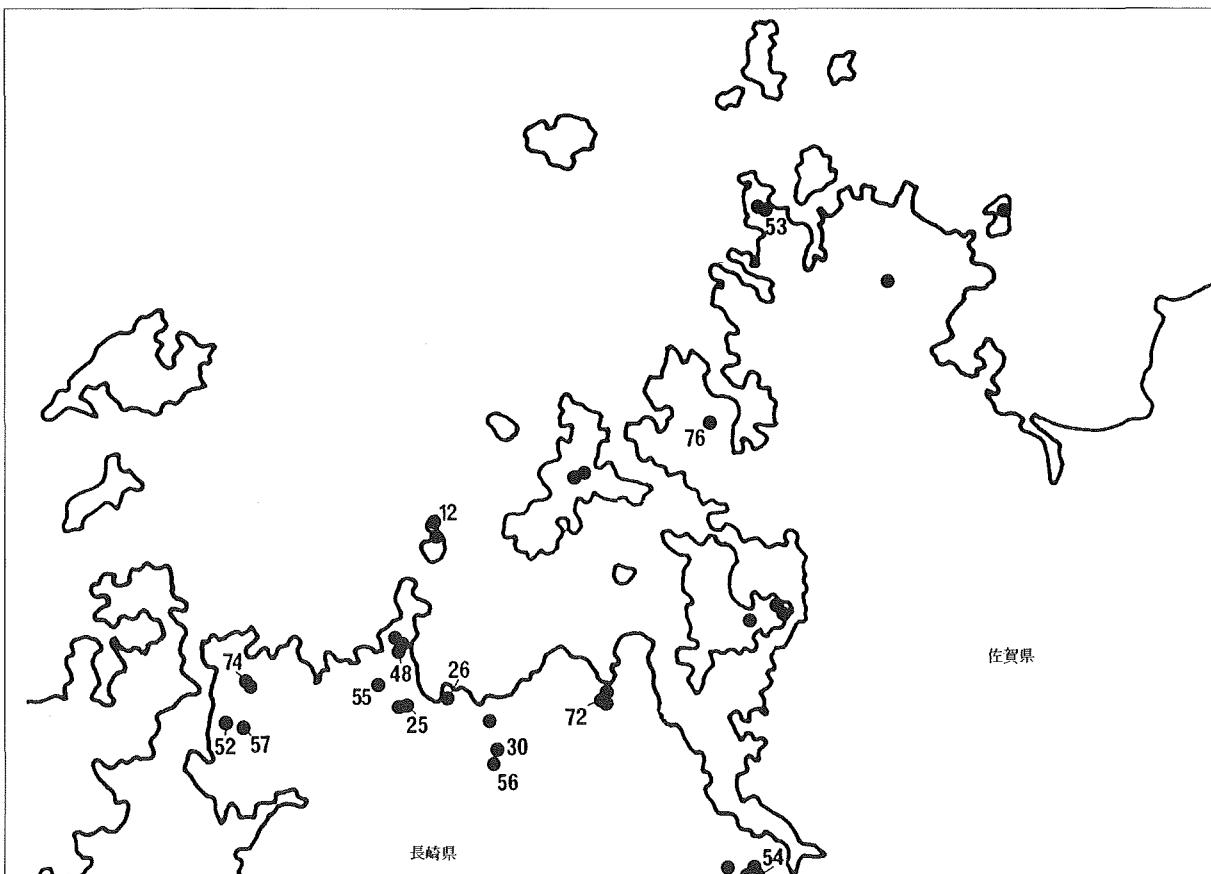
(1~3 鷹島海底遺跡, 4・5 押川遺跡, 6・7 里田原遺跡, 8 鳥ノ巣遺跡, 9・10 田川遺跡)

第4図 縄文時代の遺物



番号	遺跡名	市町名	立地	遺構	出土遺物	番号	遺跡名	市町名	立地	遺構	出土遺物
1	山中遺跡	肥前町	丘陵		石鏃	37	西七ヶ江遺跡	肥前町	丘陵		石鏃
2	原遺跡	鎮西町	丘陵		前期土器・石鏃	38	田尾遺跡	肥前町	丘陵		早期土器・石鏃(半磨製鐵含む)
3	中川原西遺跡	鎮西町	台地	配石遺構ほか	石鏃・早期土器	39	池ノ田I遺跡	肥前町	丘陵	住居跡状堅穴・土壙ほか	石鏃・スクレイパーほか
4	山頭I遺跡	肥前町	台地			40	荒崎遺跡	肥前町	台地		早期土器
6	新木場東遺跡	肥前町	丘陵			41	串崎A・C遺跡	鎮西町	丘陵		黒曜石製剥片
7	殿木場遺跡	肥前町	丘陵		石鏃・土器片	42	狩場遺跡	伊万里市	台地		
9	牧ノ地I・II遺跡	玄海町	丘陵		石鏃	43	小船遺跡	松浦市	丘陵		石鏃
10	開田遺跡	鷹島町	台地		石鏃(腰帯産黒曜石)	44	下谷遺跡	松浦市	平野		石鏃(剥片鏃)後期土器(鎌式)
11	長畠遺跡	鷹島町	台地		石鏃(腰帯産黒曜石)スクレイパーほか	46	牟田池上遺跡	松浦市	丘陵		石鏃ほか
12	段ノ上遺跡	松浦市	丘陵		黒曜石製剥片	47	姫神社遺跡	松浦市	台地		石鏃・石鋸・前期土器ほか
14	田口高野遺跡	松浦市	丘陵		石鏃	48	池田遺跡	松浦市	丘陵		石鏃・晚期土器骨角器
16	佐世保崎遺跡	松浦市	台地		石鏃	49	久保園遺跡	松浦市	河岸段丘		石鏃・石核
17	牟田A遺跡	松浦市	丘陵			50	つぐめのはな遺跡	田平町	海岸		早・前・後期土器石鏃
18	牟田B遺跡	松浦市	丘陵		石鏃・石匙・土器片	51	前目遺跡	田平町	海岸		早・前期土器・石鏃ほか
23	下田遺跡	松浦市	丘陵		石鏃	52	鶴山池遺跡	田平町	台地		
24	田川遺跡	松浦市	台地		石鏃(主に剥片鏃)後期土器	53	鳥ノ巣遺跡	鎮西町	丘陵		石鏃・石匙
25	寺ノ尾C遺跡	松浦市	台地		石鏃・後期土器	55	田原遺跡	松浦市	台地		石鏃・石匙
26	桜井田遺跡	松浦市	丘陵		石鏃・石匙・後期土器ほか	71	三代遺跡	鷹島町	後背湿地		後～晚期の土器
28	戸ノ本崎遺跡	松浦市	丘陵		磨製石斧	72	今福遺跡	松浦市	平野		石鏃・石核・晚期土器
30	宮ノ下り遺跡	松浦市	沖積平野		石鏃・晚期土器ほか	73	大堂遺跡	松浦市	丘陵		細石核
32	北平遺跡	松浦市	台地		石鏃	74	里田原遺跡	田平町	盆地		晚期土器・石鏃
34	大橋遺跡	玄海町	丘陵		晚期土器	75	久次浜遺跡	田平町	海岸		前期土器ほか
35	稗田I・II遺跡	玄海町	丘陵		石鏃・晚期土器	76	押川遺跡	肥前町	丘陵		晚期土器・石鏃
36	永田A・C遺跡	鎮西町	丘陵		石鏃	83	鷹島海底遺跡	鷹島町	海底		早期土器(押型文・条痕文ほか)

第5図 縄文時代の遺跡



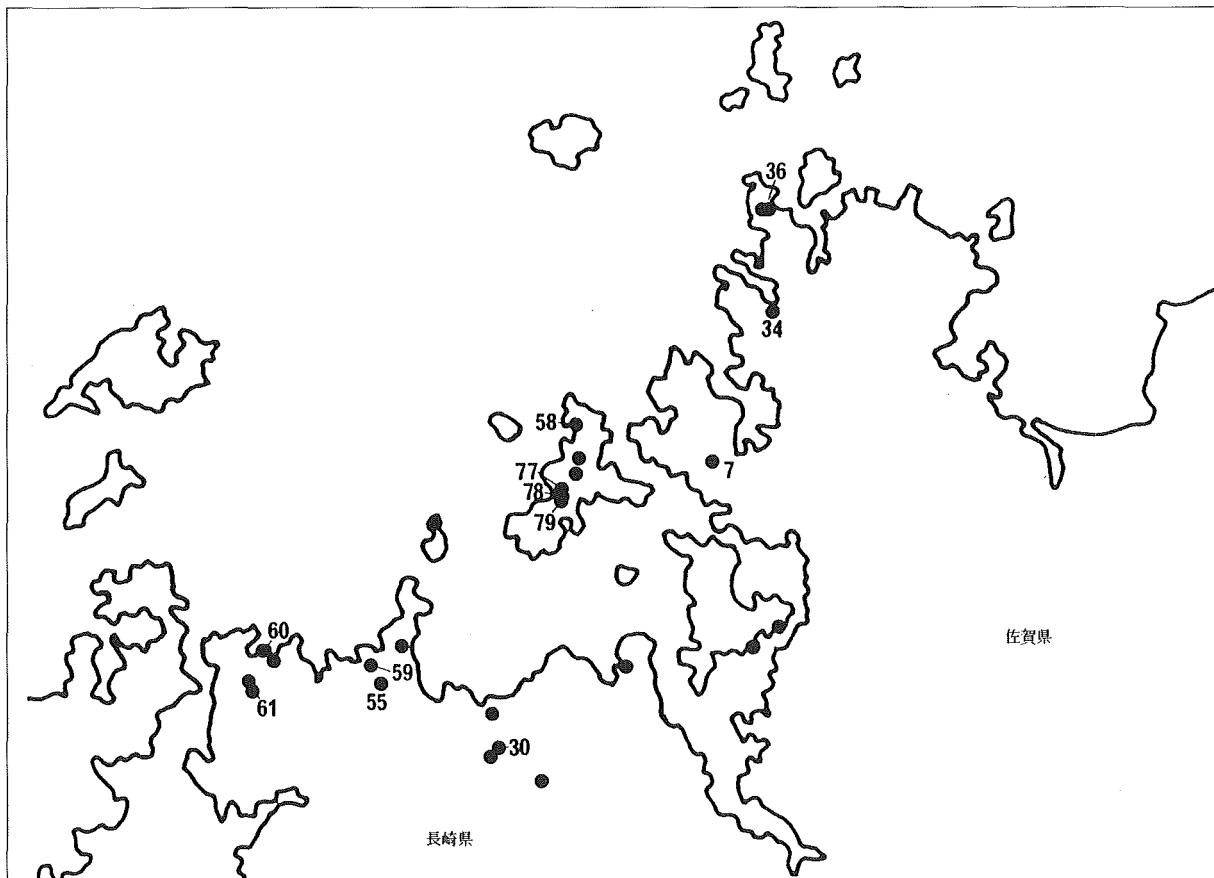
番号	遺跡名	市町名	立地	遺構	出土遺物	番号	遺跡名	市町名	立地	遺構	出土遺物
12	段ノ上遺跡	松浦市	丘陵		土器	54	裏川内東方遺跡	伊万里市	平野		土器
25	寺ノ尾C遺跡	松浦市	台地		土器	55	田原遺跡	松浦市	台地		土器
26	桜井田遺跡	松浦市	丘陵		中期土器	56	柏ノ木遺跡	松浦市	河岸段丘		石鏃・土器片 石庖丁
30	宮ノ下り遺跡	松浦市	沖積平野		土器	57	中野ノ辻遺跡	田平町	丘陵	箱式石棺	ガラス小玉・刀子
48	池田遺跡	松浦市	丘陵	箱式石棺	石鏃・土器ほか	72	今福遺跡	松浦市	平野		土器
52	鳴山池遺跡	田平町	台地			74	里田原遺跡	田平町	盆地	杭列ほか	前・中期土器・木器 ほか
53	島ノ峠遺跡	鎮西町	丘陵	竪穴式住居 土壙墓ほか	土器	76	押川遺跡	肥前町	丘陵	竪穴式住居跡・貯蔵穴	前・中期土器・石器

第6図 弥生時代の遺跡

立地している。円形の竪穴住居跡・貯蔵穴・甕棺墓からなり、平野遺跡と平行する刻目突帯文土器を伴っている。この遺跡は、石庖丁や扁平打製石斧といった農耕具と考えられている遺物は少なく、打製・磨製石鏃等の狩猟具、石皿・磨石等が多量に出土したため、上場台地における晩期末から弥生にかけての生業の一資料となっている。

〈弥生時代〉

この地域では、この時代の遺跡は比較的少数であり、古墳時代と併せて生活跡が希薄であるが、縄文期から継続して営まれた遺跡が多く、前～中期を中心繁栄している。74の里田原遺跡は、縄文時代晩期から弥生時代中期まで継続して営まれた、周囲を丘陵に囲まれた盆地の平坦面に位置する。湧水が激しい低湿地から多量の土器とともに木製品を出土し、北松地区における水稻農耕の開始期に重要な位置を占めており、発掘によるさらなる発見が期待されている。72今福遺跡は、今福



番号	遺跡名	市町名	立地	遺構	出土遺物	番号	遺跡名	市町名	立地	遺構	出土遺物
7	殿木場遺跡	肥前町	丘陵		土器片	77	宝ヶ峯1号墳	鷺島町	丘陵	横穴式石室	
30	宮ノ下り遺跡	松浦市	沖積平野	方形竪穴式住居 箱式石棺	布留式土師器 ガラス小玉ほか	78	宝ヶ峯2号墳	鷺島町	丘陵	横穴式石室	
34	大橋遺跡	玄海町	丘陵	竪穴住居跡		79	宝ヶ峯3号墳	鷺島町	丘陵	横穴式石室	
36	永田A・C遺跡	鏡西町	丘陵		土師器・須恵器	59	小鳩古墳群	松浦市	平野	横穴式石室	須恵器・小玉 勾玉・銀環ほか
55	田原遺跡	松浦市	台地		土師器・須恵器	60	岳崎古墳	田平町	丘陵	前方後円墳 石室?	
58	薦崎鬼塚古墳	鷺島町	台地	円墳 (横穴式石室)	須恵器	61	笠松天神社古墳	田平町	丘陵	前方後円墳 石室?	土師器

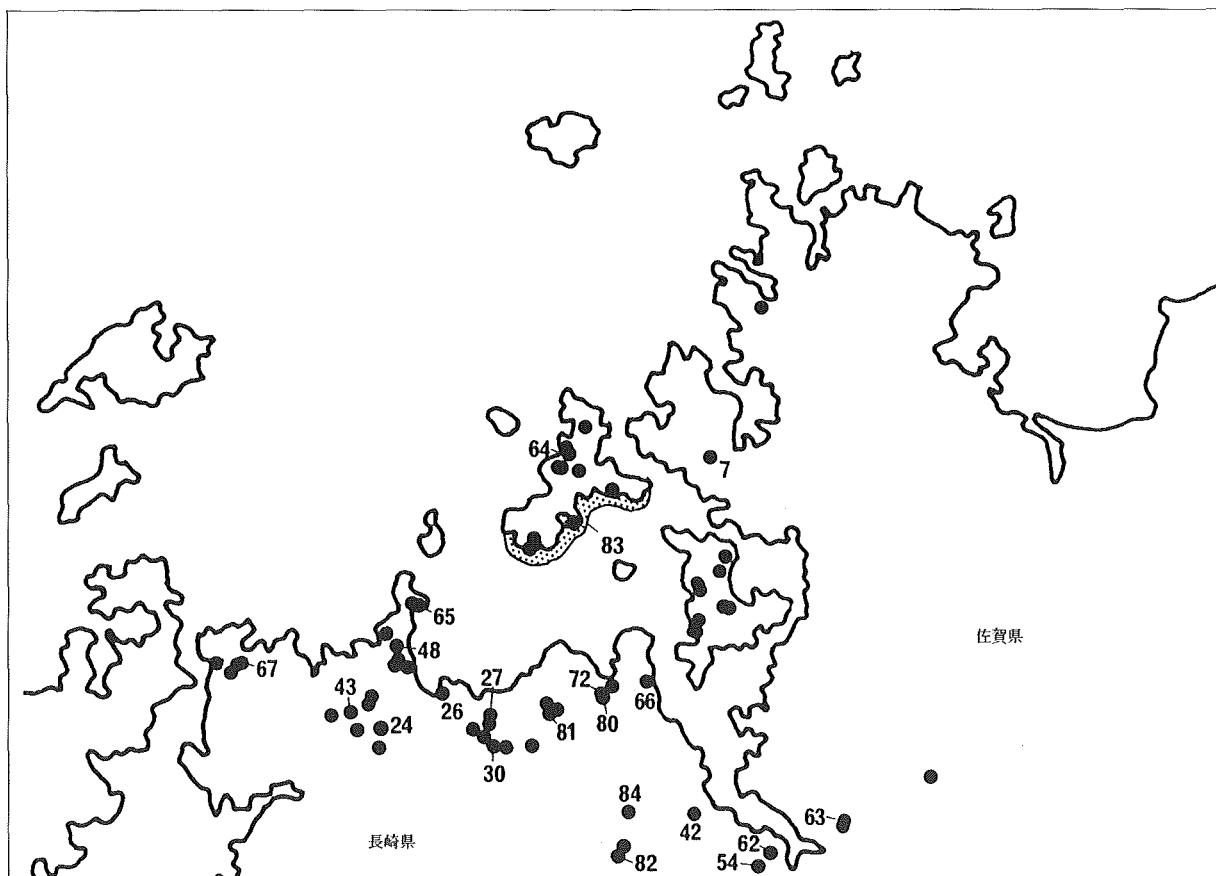
第7図 古墳時代の遺跡

川左岸の河岸段丘上に立地する。時代設定できる遺構の確認は不可能だったが、前～中期の遺物とともに、6点の石庖丁片を出土した。56栢ノ木遺跡では、河岸段丘上に箱式石棺墓・甕棺墓を確認し、石棺内から管玉等を出土している。甕棺から前期末に位置づけられ、この地域の埋葬形態の一端を知るきっかけとなった。53鳥ノ巣遺跡は、波戸岬のくびれ部東側の玄海灘を見下ろす丘陵に立地する。中期中心の土器に円形竪穴式住居跡や甕棺墓等の墓壙を確認しており、遺跡の広がりが期待されている。

〈古墳時代〉

この地域の古墳時代の遺跡は残存状況が悪く、詳細不明なものが多いため、現段階ではこの時期の様子は把握できない。

30の宮ノ下り遺跡は、志佐川右岸の沖積平野上に立地する。古式土師器が竪穴式住居跡からまと

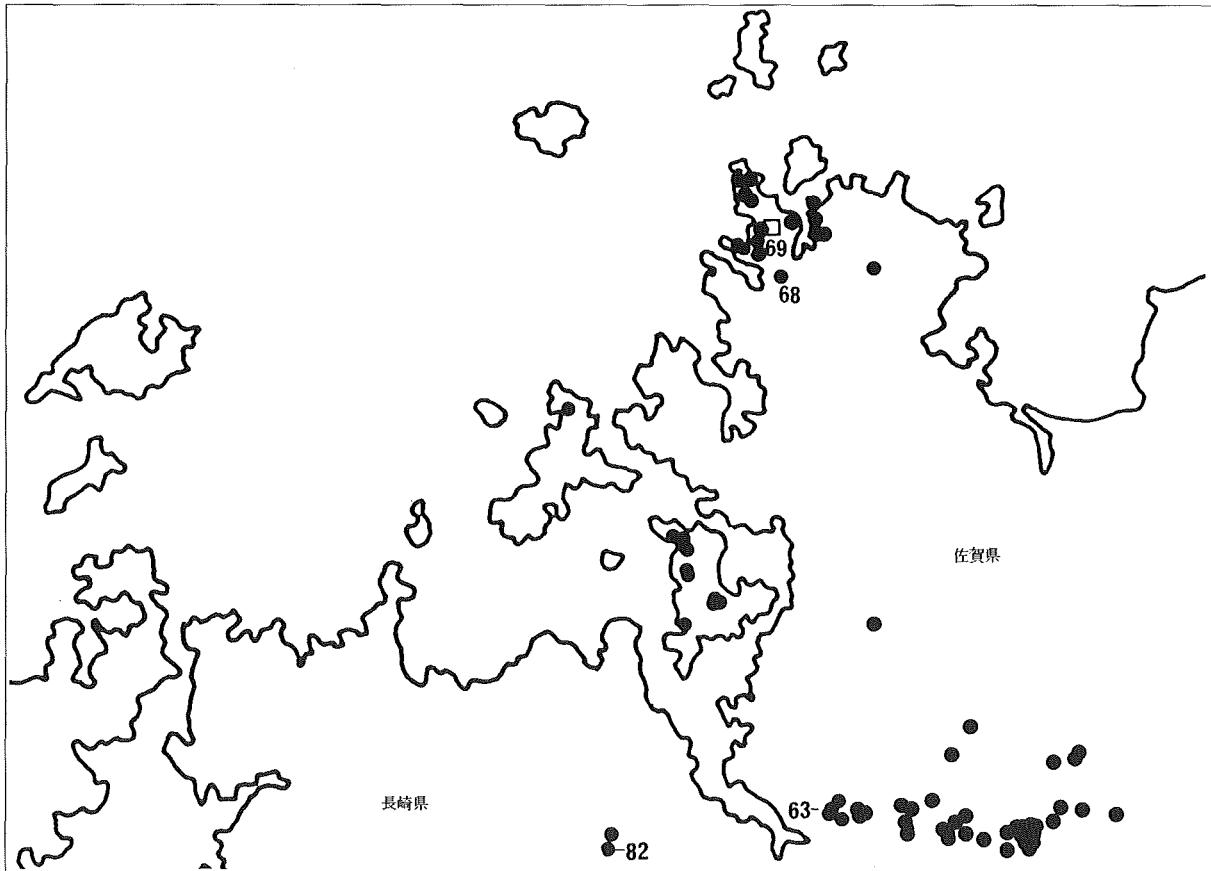


番号	遺跡名	市町名	立地	遺構	出土遺物	番号	遺跡名	市町名	立地	遺構	出土遺物
7	殿木場遺跡	肥前町	丘陵		北宋錢・土器片	64	広久山滴福寺跡	鷹島町	台地		
24	田川遺跡	松浦市	台地	配石遺構ほか	輸入陶磁器 土師器ほか	65	刈萱城跡	松浦市	山頂		瓦質土器
26	櫻掛田遺跡	松浦市	丘陵	石敷道路状遺構	輸入陶磁器・土師器 瓦器ほか	66	梶谷城跡	松浦市	山頂	掘立柱建物	輸入陶磁器
27	辻ノ尾遺跡	松浦市	台地		輸入陶磁器	67	里城跡	田平町	台地	空堀・石塁 掘立柱建物跡	輸入陶磁器
30	宮ノ下り遺跡	松浦市	沖積平野		輸入陶磁器・土師器ほか	72	今福遺跡	松浦市	平野		輸入陶磁器・土師器 須恵器・石鶴
42	狩場遺跡	伊万里市	台地			80	中ノ瀬遺跡	松浦市	河岸段丘		輸入陶磁器・土師器ほか
43	小船遺跡	松浦市	丘陵		輸入陶磁器・土師器	81	松園遺跡	松浦市	丘陵		輸入陶磁器・土師器
48	池田遺跡	松浦市	丘陵		輸入陶磁器	82	川内野遺跡	伊万里市	平野		輸入陶磁器
54	裏川内東方遺跡	伊万里市	平野		土師器・須恵器	83	鷹島海底遺跡	鷹島町	海底		碇石・輸入陶磁器
62	天神壇遺跡	伊万里市	平野	井戸・杭列など	輸入陶磁器・土師器・木製品ほか	84	山寺遺跡	伊万里市	丘陵	列石・土塁 建物敷地跡	輸入陶磁器
63	平山遺跡	伊万里市	平野	石組遺構・柱穴	輸入陶磁器						

第8図 中世の遺跡

まつて出土しており、4世紀後半から5世紀に位置づけされている。59小嶋古墳群は、元来の小島に立地し、封土・天井部を喪失し石室部分が露出した古墳である。3基知られていたが、そのうちの1基の内部構造は単室の両袖型横穴式石室で、銀環・小玉を副葬していた。副葬品の須恵器から、7世紀後半代に比定された。60の岳崎古墳・61の笠松天神社古墳は、前方後円墳である。埋葬主体部の残存状況は悪く、それに伴う遺物も皆無であるため、築造年代は不明である。

〈中世〉



番号	遺跡名	市町名	立地	遺構	出土遺物	番号	遺跡名	市町名	立地	遺構	出土遺物
63	平山遺跡	伊万里市	平野	石組遺構・柱穴 土壙	輸入陶磁器 肥前陶磁器	69	豊臣秀保陣屋跡	鎮西町	丘陵		土師器・青磁片
68	木下利房陣屋跡	玄海町	丘陵	石垣	陶器・土師器 捕鉢ほか	82	川内野遺跡	伊万里市	平野	土壙・柱穴ほか	肥前陶磁器片

第9図 近世の遺跡

この地域は、文献で知るのみであるが、『延喜式』『青方文書』等によると、古代から中世にかけて宇野御厨と呼ばれ、範囲は現在の伊万里市から平戸市を経て、北松浦郡宇久・小值賀町まで広範囲に及ぶ荘園であった。古代から中世にかけては、源久が下向土着し宇野御厨検校として梶谷城に入城したといわれる松浦党と切り離して考えることはできない。

66梶谷城跡は、城山と呼ばれる標高170m程の平坦な山頂に築城した山城で、福島の南西側を一望できる位置にある。遺跡の保存整備事業で調査を行った結果、主郭部にピット群・建物造成跡を確認し、13世紀後半から14世紀前半の輸入陶磁器を出土した。近世の遺構・遺物も確認しており、今後のさらなる調査が期待される。26の樓階田遺跡は、後背の丘陵から伸びた微高地上で海岸に面した部分に立地する。石敷道路状遺構や集石土壙等が発見され、中国産白磁・青磁類や土師器・瓦器等が共伴した。石敷道路状遺構は発掘調査区内で全長130mあり、海岸から山側の発掘調査区外へ伸びる様相を呈した。13世紀が最盛期とみられることから、松浦党との関連が予想される。30や72は越州窯系青磁を含めた青磁類や白磁を多量に出土している。30は12世紀から13世紀前半を中心とし、72は「て」の字状口縁をもつ京都系土師器皿片と縦長の瘤状把手がつく石鍋片を考慮して、10世紀

末から13世紀初頭まで継続した遺跡である。82川内野遺跡・84山ノ寺遺跡は、中世から近世にかけての遺跡である。82では被熱した陶磁器の出土、84では石垣遺構や集石遺構を確認し、今後の新たな発見に期待がかかる。

〈近世〉

上場台地では文禄・慶長の役（1592年と1597年）により、鎮西町名護屋城（図中□）を中心に陣屋を築造しており、発掘調査でも土壘・石壠跡や建物跡等が確認されている。また、この役のため捕虜となった朝鮮半島の陶工達や陶石の発見による陶磁器製造によって、有田地区同様伊万里市内では陶磁器窯が盛んに造成されるようになり、唐津や有田といった焼き物で名声を得るようになった。

第2項 福島町の遺跡

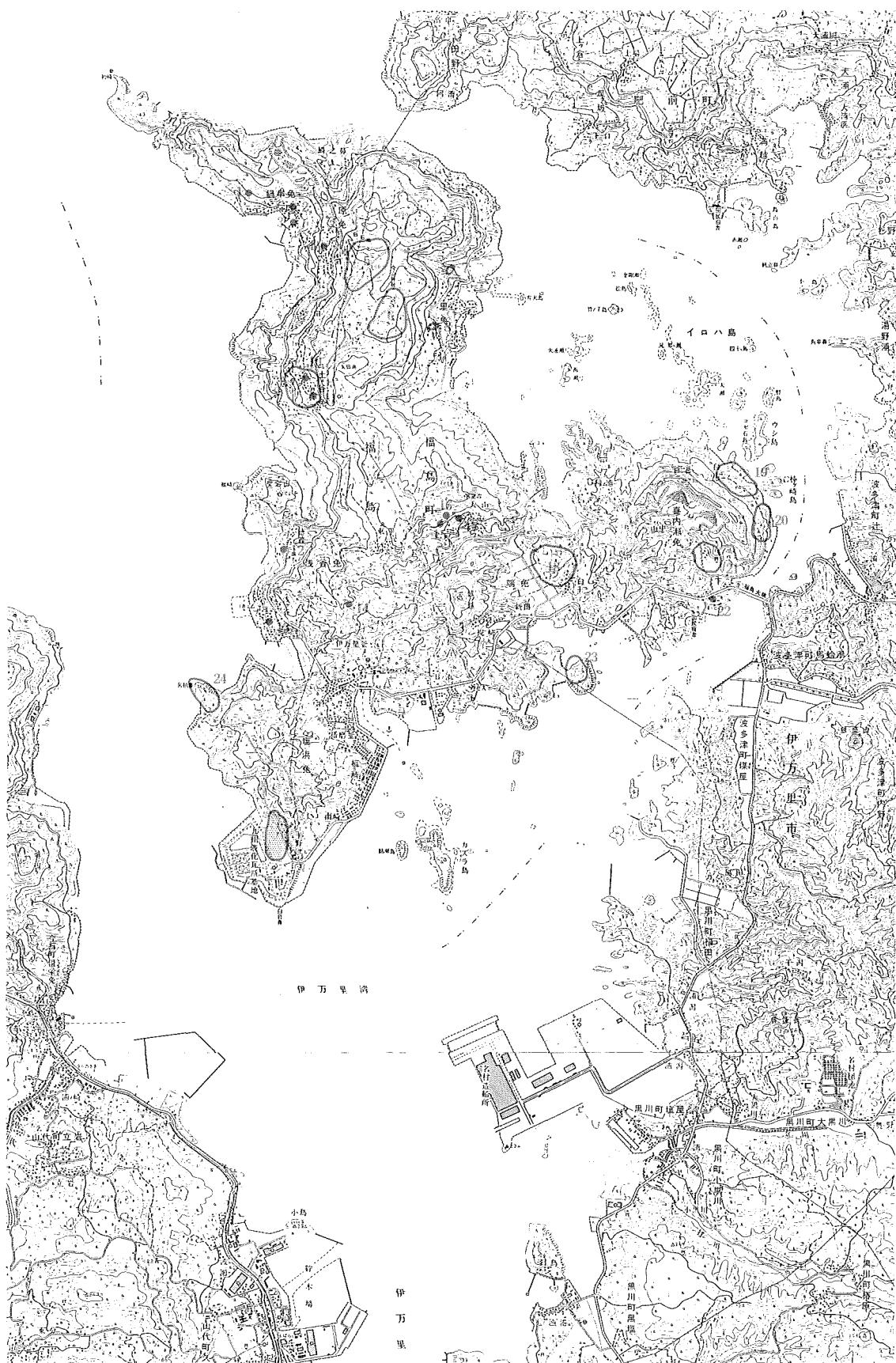
周辺の地域同様、福島町には第三紀堆積岩と玄武岩台地上に旧石器・縄文時代の遺跡が多く点在する。黒曜石原産地が伊万里・松浦両市に所在し、黒曜石原石を石材とした遺物が多数表採されているため、遺跡は表採資料を基本資料として周知されている。

旧石器時代は、黒曜石製ナイフ形石器が表採された6の神ノ前遺跡や24の矢柄遺跡がある。また、現在は採石場になっているが、20の横田遺跡周辺でナイフ形石器・台形石器が表採されている。特に6は台地の平坦面に立地し、良好な遺物包含層が期待できる。町内の台地平坦面は島北部内陸を中心広がっていて、遺跡が良好に残存しているようであり、将来の調査によって新たな遺跡を確認できる可能性がある。

縄文時代は、島中央部を除くほぼ全域から黒曜石製石鏃や磨製石斧が発見されている。特に6では、縄文時代各時期にわたる黒曜石製石鏃が多数採集されており、旧石器時代からの生業について注目に値する遺跡である。24では黒曜石製縦長剥片が採集されており、石器製作の良好な資料とな

番号	名称	時代	種別	立地	所在地
1	寺山团助妻女の墓	近世	石造物	台地	鍋串免字坪川
2	寺山团助の墓	近世	石造物	平地	鍋串免字鍋串
3	御道具山古墳	近世	墳墓	台地	鍋串免字川地
4	原五輪塔	近世	石造物	丘陵	鍋串免字原
5	夫婦石遺跡	縄文	遺物包含地	台地	鍋串免字夫婦石
6	神ノ前遺跡	旧石器・縄文	遺物包含地	台地	里免字神ノ前・神ノ脇・大谷
7	引地五輪塔群	中世	石造物	台地	里免字田里
8	三十三観音石幢	中世	石造物	台地	里免字神ノ上（福寿寺）
9	土谷遺跡	縄文	遺物包含地	台地	土谷免字土谷・舞タリ・西ノ園
10	土谷百人塚石塔群	中世・近世	石造物	台地	土谷免字清水
11	土谷石塔群	中世・近世	石造物	台地	土谷免字土谷
12	皿浦五輪塔	中世	石造物	台地	浅谷免字皿浦
13	浅谷六地蔵	中世・近世	石造物	台地	浅谷免字浅谷
14	狸岩岩陰遺跡	縄文	岩陰遺跡	岩陰	塩浜免字狸岩
15	大山六地蔵	近世	石造物	台地	端免字荒平
16	大山百人塚石塔群	中世・近世	石造物	台地	端免字荒平
17	文珠院館跡	中世・近世	館跡	台地	端免字荒平
18	白土遺跡	縄文・弥生	遺物包含地	台地	端免字白土・抜ヶ・又抜ヶ
19	白山遺跡	縄文・弥生	遺物包含地	台地	喜内瀬免字白山
20	横田遺跡	弥生	遺物包含地	台地	喜内瀬免字横田
21	須口遺跡	縄文	遺物包含地	台地	喜内瀬免字須口
22	横島古墳	古墳	古墳	台地	喜内瀬免字新田
23	小島古墳	古墳	古墳	岬	端免字小島
24	矢柄遺跡	旧石器・縄文	遺物包含地	台地	塩浜免字矢柄・中網代・フウゾウ
25	平野遺跡	縄文	遺物包含地	台地	塩浜免字平野・松原谷

表1 福島町の遺跡一覧



第10図 福島町の遺跡位置図 (1/50,000)

り得る。また、25の平野遺跡と距離的に近いため、将来的に調査を行い遺物包含層が確認された場合は、相互関係も視野に入れる必要がある。

弥生時代は、19の白山遺跡・20で中期の土器片を確認している。

横穴式石室を持つ22の横島古墳は保存状態が悪く、両袖式の玄室のみ残る。弥生・古墳時代の遺跡は低地に立地し地滑り地帯のため、良好な状態で残っていないようである。

中・近世は五輪塔・墓石等が多く、現在のところ館跡は安土・桃山時代の僧侶大山金蔵坊の館と伝承されている17の文珠院館跡のみであり、松浦党一派の状況を知る考古資料が少ない。今後の調査に期待するところである。

福島町では本格的な調査は始まったばかりで、島内の歴史は解明されないまま破壊されたものが多いようである。福島の南端にどのような歴史があったのか、調査結果を報告していく。

【参考文献】

- 安楽 勉・藤田和裕編1975『里田原遺跡』長崎県文化財調査報告書第21集
安楽 勉・中田敦之編1985『樓楷田遺跡』長崎県文化財調査報告書第76集
佐賀県教育委員会編1981『佐賀県遺跡地図(杵西地区)』
佐賀県教育委員会編1982『佐賀県遺跡地図(東松浦地区)』
佐賀県総務部土地対策課編1975『土地分類基本調査 伊万里』
桜井 潮編1966『長崎県遺跡地名表 埋蔵文化財包蔵地一覧』長崎県文化財調査報告書第1集
下川達彌ほか1981『日ノ岳遺跡』長崎県立美術博物館
正林 護・村川逸朗編1988『里田原』田平町文化財調査報告書第3集
外山幹夫 1987『松浦氏と平戸貿易』国書刊行会
長崎県教育庁文化課編 1995 『長崎県遺跡地図—佐世保市・平戸市・松浦市・北松浦郡・東彼杵郡地区—』
長崎県文化財調査報告書第119集
中田敦之編1988『小嶋古墳群』松浦市文化財調査報告書第4集
中田敦之1989『宮ノ下り遺跡』松浦市文化財調査報告書第5集
中田敦之編1997『田川遺跡』松浦市文化財調査報告書第12集
中田敦之編1998『松浦市内遺跡確認調査(2)』松浦市文化財調査報告書第13集
中田敦之編1998『松浦・今福遺跡』松浦市文化財調査報告書第14集
福島町郷土誌編纂委員会編 1980『福島町郷土誌』福島町
藤田和裕編1989『笠松天神社古墳』田平町文化財調査報告書第4集
藤田和裕編1999「岳崎遺跡」『県内主要遺跡内容確認調査報告書II』長崎県文化財調査報告書第151集
松尾吉高編 1983『波戸遺跡群』鎮西町文化財調査報告書第1集
宮崎貴夫編1978『里田原遺跡』長崎県文化財調査報告書第38集
森醇一郎編 1974『白蛇山岩陰遺跡』佐賀県立博物館調査研究書第1集
森田孝志1981『押川遺跡』佐賀県文化財調査報告書第60集
森田孝志編1983『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書1』佐賀県文化財調査報告書第69集
盛 峰雄編1983『山ノ寺遺跡』伊万里市文化財調査報告書第15集
盛 峰雄1985『鈴桶遺跡』伊万里市文化財調査報告書第17集
盛 峰雄ほか編1990『川内野遺跡』伊万里市文化財調査報告書第31集

第2章 調査に至る経緯と方法

福島町が、液化石油ガス国家備蓄福島基地を建設する発端になったのは、福島町の主な産業の一つであった石炭採掘の閉業であろう。町では昭和47（1972）年まで操業していたが、炭坑閉山後の昭和58（1983）年に町勢復興のため、旧炭坑跡地（旧福島炭坑。本遺跡に隣接）に民間の液化石油ガス（以下LPG）関連企業の備蓄基地を誘致した。^{註1}

その後、国内で消費されているLPGの約75%はサウジアラビア・クウェート等の西アジア方面から輸入されるようになったが、^{註2} 1991年に湾岸戦争が勃発し、エネルギーの供給に少なからず影響を与えた。そのため国は、^{註3} 国際情勢急変時にエネルギーの安定供給ができるよう、民間備蓄の他に2010年までにLPG 150万トンの備蓄を計画し、国内に4カ所の基地を建設するため、場所の選定にあたることになった。これを受けて、長崎県と町は福島町南西部の塩浜地区を候補地に挙げ、平成3（1991）年度から基地誘致に乗り出し、建設予定地の用地交渉等の調整を始めた。

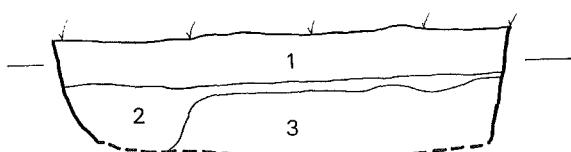
しかし、本遺跡内に造成することになるため、平成5（1993）年8月、財団法人エルピーガス振興センターと県商工課は、基地建設設計画概要調査のため長崎県教育庁文化課と初めての協議を行った。その後、文化課は、長崎県土地開発公社から旧炭坑跡地のボタを保安用地に盛る方法で処理するとの通知を受け、平成8（1996）年11月27日から12月18日に範囲確認調査（176m²）を実施した。

調査方法は、本遺跡ほぼ全域に2m×2mの試掘場を1～44の44カ所を任意に配置し、人力で掘り下げていった。その結果、遺物包含層を二地域で確認し、北側をA地点（試掘場29・31・37の範囲^{註4}）、南側をB地点（試掘場6・7・39・42・43の範囲）とした。この調査地点名は、本調査においても採用した。遺跡範囲は総面積5,100m²となり、平成10年度に北側の1,500m²、次年度に南側の3,600m²を調査することになった。

本遺跡に関連した調査では、平成10（1998）年に行った町主体の事業が挙げられる。6月1日から6月4日にLPG国家備蓄基地建設関連の町営事業として、県文化課は町からオートキャンプ場整備事業に係る範囲確認調査を委託さ

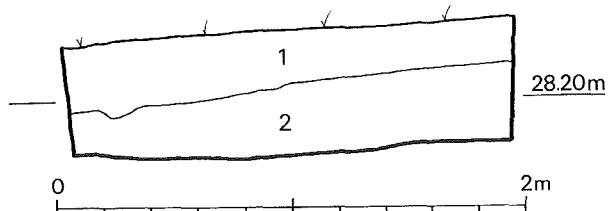


試掘場43 土層堆積状況



平成8年度調査分試掘場42 西壁

- 1 表土（耕作土）
- 2 暗黄褐色弱粘質土層
- 3 暗黄褐色粘質土層



平成10年度調査分試掘場B 北壁

- 1 表土（耕作土）
- 2 赤褐色弱粘質土層（玄武岩風化土層）

第11図 試掘場土層図

れ、発掘調査を実施した。調査地点は、平成8年度に調査したなだらかな丘陵地から東側の急傾斜に変わる傾斜変換点であり、地形的に良好な様相を見せていましたことから、包含層の残存が期待された。2m×2mの試掘場をA～Gの7カ所設定し、遺物包含層の確認に努めた。しかし、遺物は表土に混在して若干確認されたが、包含層・遺構とも皆無であった。^{註5}しかも現代の宅地造成等のため削平され、表土直下地山である玄武岩風化層という試掘場も見受けられた。^{註6}その結果、遺跡は山手まで広がらないことが確認された。

その後、県は、建設予定地の用地交渉や建設資材の海上輸送に伴う地元住民との協議を終え、平成10年10月にLPG国家備蓄基地の誘致のため、石油公団に立地要請した。11月に入り、立地決定されたため、本調査のはこびとなった。

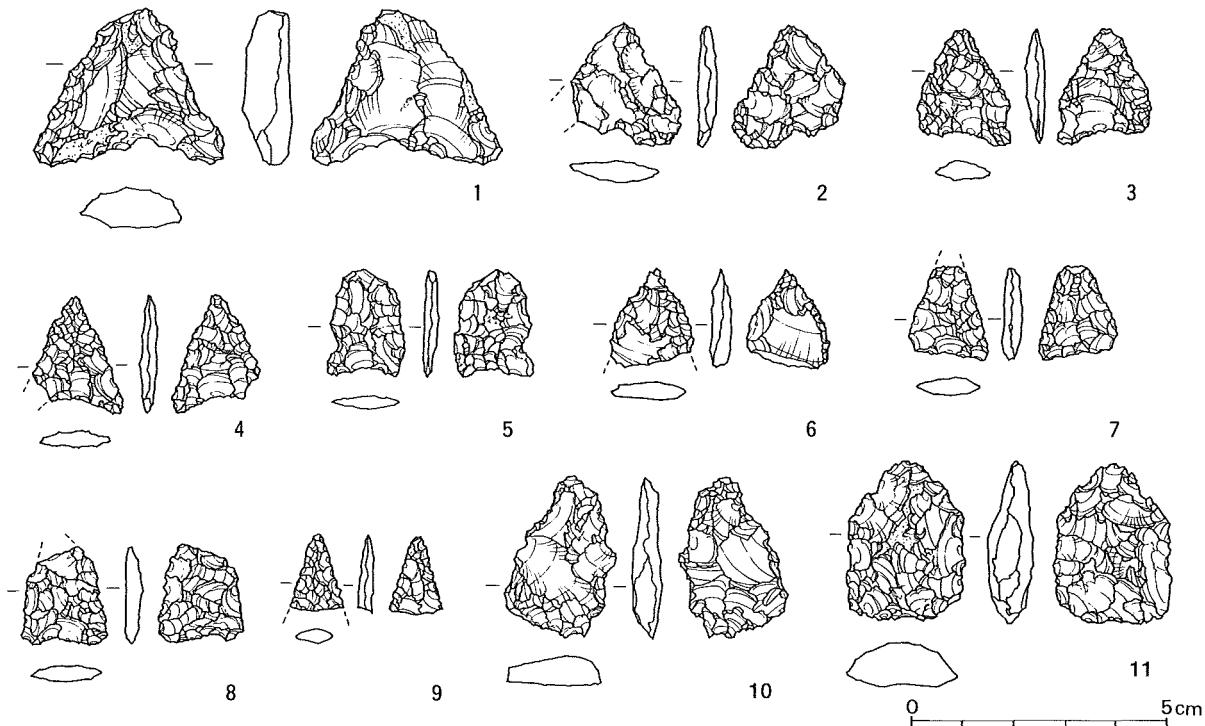
平成11（1999）年に入り、二期に分かれていた調査期間が一期で継続しての調査となり、また、平成11年度内から事業着手ということで、緊急発掘調査となった。事業主体が土地開発公社、調査主体が県教育委員会として協議をすすめた。平成11年4月5日に現地で細部調整を行い、同年4月



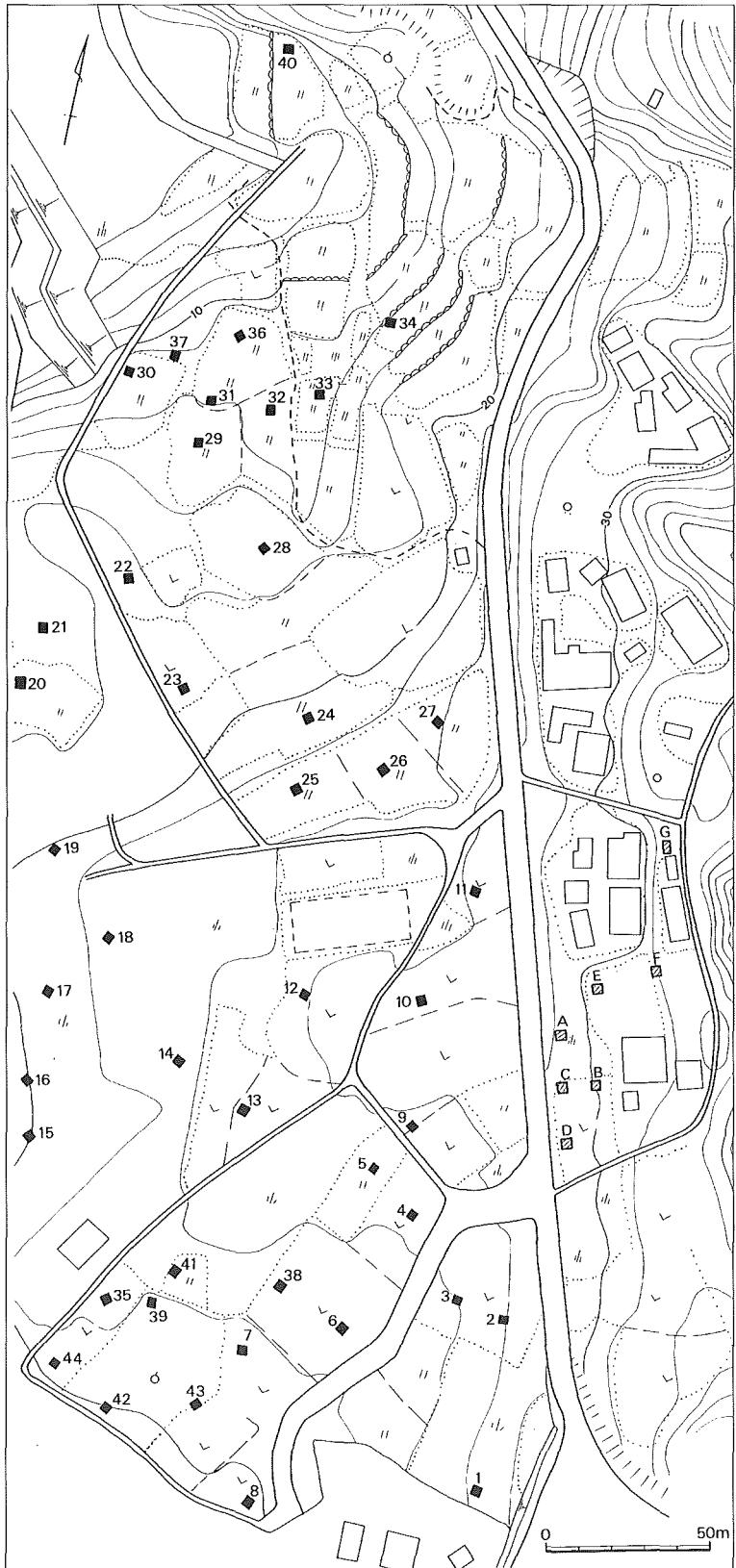
試掘場42 遺物出土状況

12日から12月27日まで発掘調査を実施した。

調査方法は、傾斜方向に沿って5m×5mのグリッドを組み、便宜上西から東へアルファベットで、北から南へギリシャ数字でグリッド番号を付した。A地点は西からa～i、北から1～12とし、B地点は西からe～w、北から3～26と設定した。基本的に両地点とも作業員の人力で調査を進めたが包含層までの深度がある場



第12図 平成8年度調査の出土遺物（2/3）



第13図 試掘場配置図

合は重機を使用した。遺物は原則として層位ごとに取り上げたが、包含層から出土した遺物は平板測量で水平位置と標高を記録し、個別に取り上げた。遺構内出土の遺物は、同じ遺構内遺物とともに一括で取り上げた。調査は耕作地を中心に行い、調査実施面積はA地点約1,100m²、B地点約3,600m²、総面積約4,700m²であった。先に遺跡北側の工事に着手するということで、A地点を4月12日から6月15日まで、B地点は6月10日から12月27日まで調査を実施した。

註1. 福島町郷土誌「産業・経済編」第四章第八節による。

註2. 長崎県土地開発公社発行の『(仮称) 液化石油ガス国家備蓄福島基地建設事業に係る環境影響評価書(案)』による。

註3. 第13図中、黒塗りつぶしの部分。

註4. 調査時の土層状況は第11図左側。

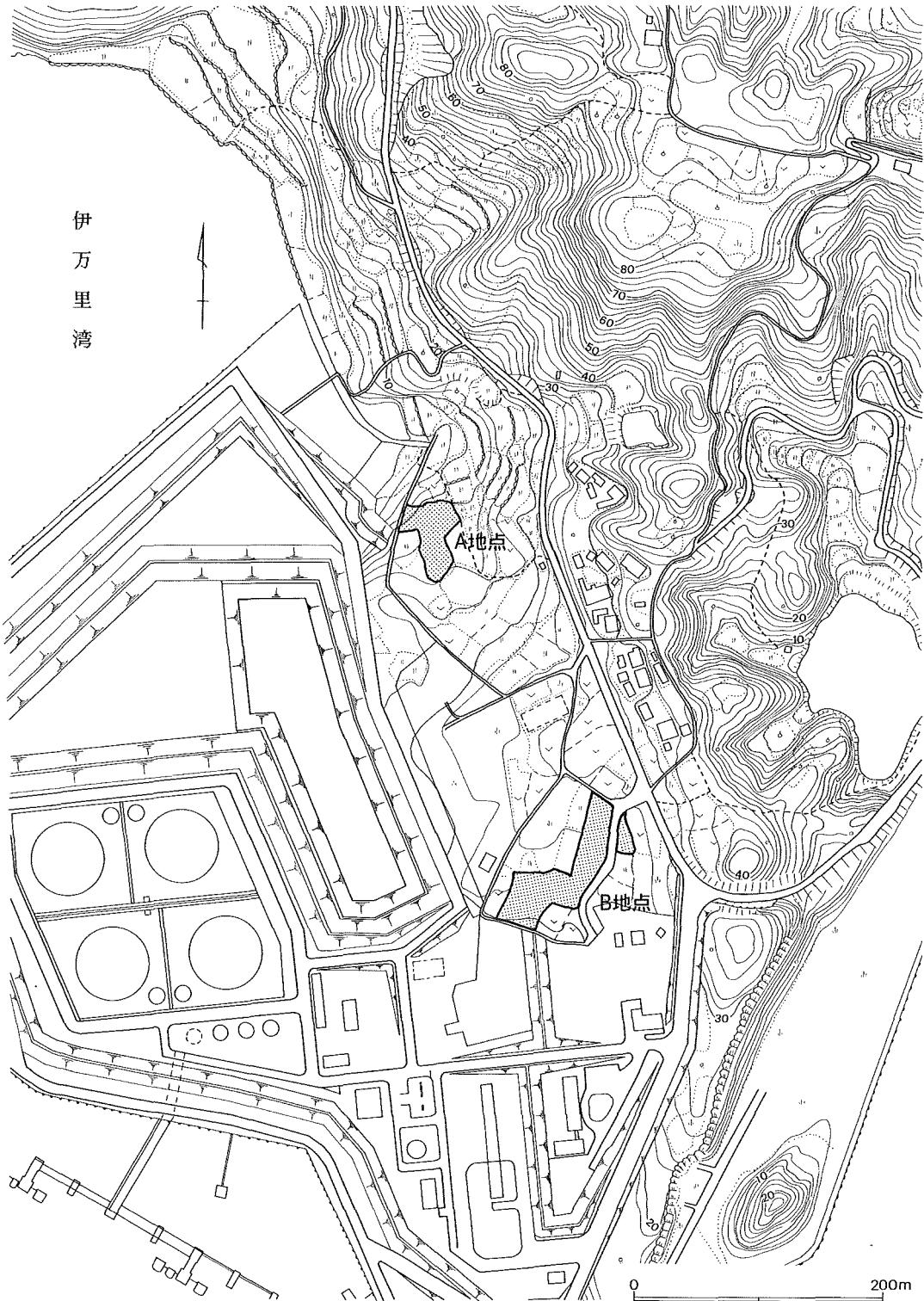
註5. 第13図中、斜線部分。

註6. 調査時の土層状況は第11図右側。

第3章 調査

第1節 A地点の調査

調査は北側地区から行うこととなった。この地区をA地点とし、以後南側の調査区をB地点として



第14図 調査地点配置図

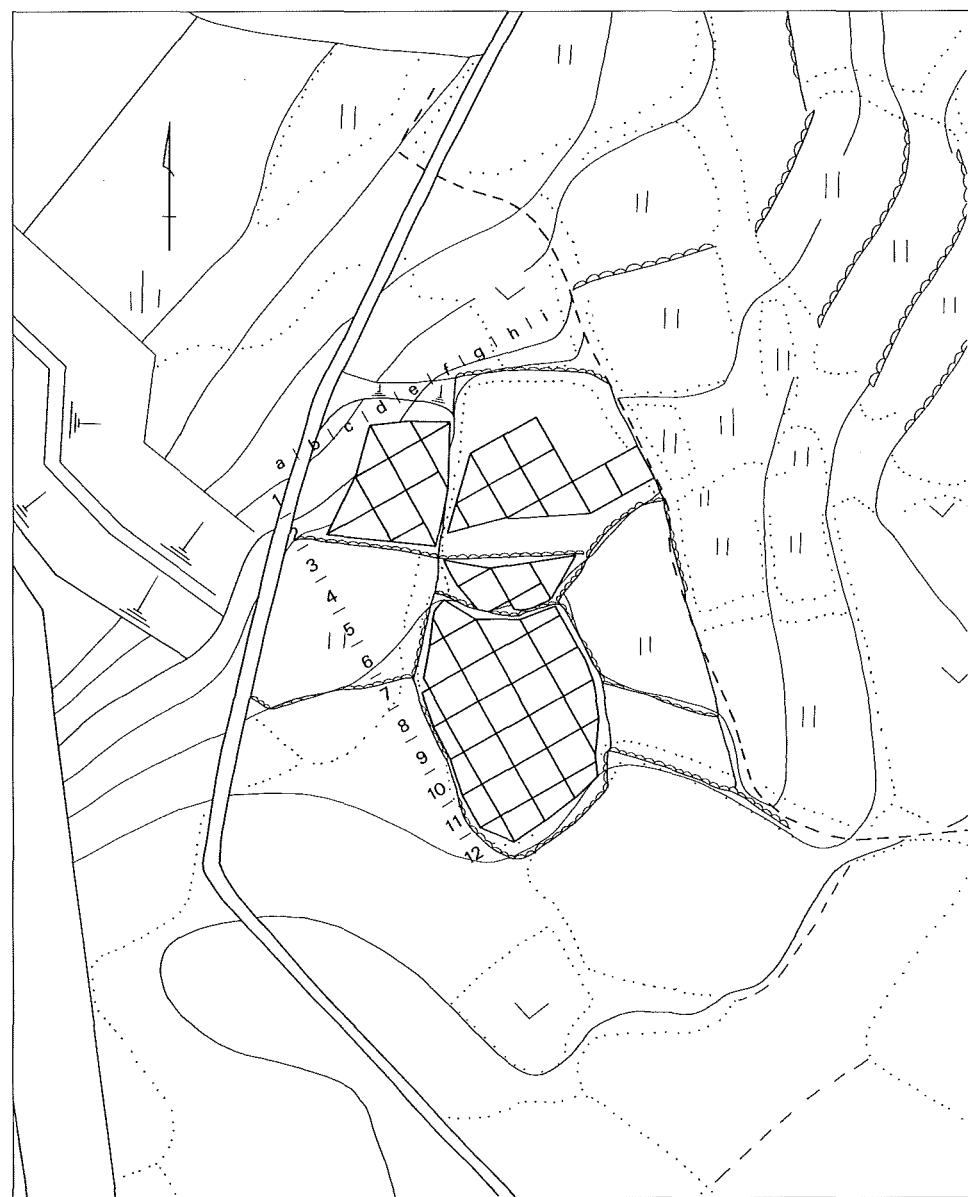
呼称していくこととする。A地点は、対象面積1,100m²で標高約14mのところに位置する。

調査の結果、全面的に遺物が出土するものの、遺構等の確認はなく、良好な包含層の確認は望めなかった。遺物は2層を中心に剥片類を多量に出土したが、剥片類の量に比べ石器の出土が少ないことが大きな特徴である。このことから本遺跡が、生活に供された場所というより、石器製作の一大拠点的な場所であったと考えることが必要であろう。時代的には、旧石器時代から縄文時代までに納まる傾向にあり、内容的にはほぼB地点の内容の延長上にあるものと考えられる。

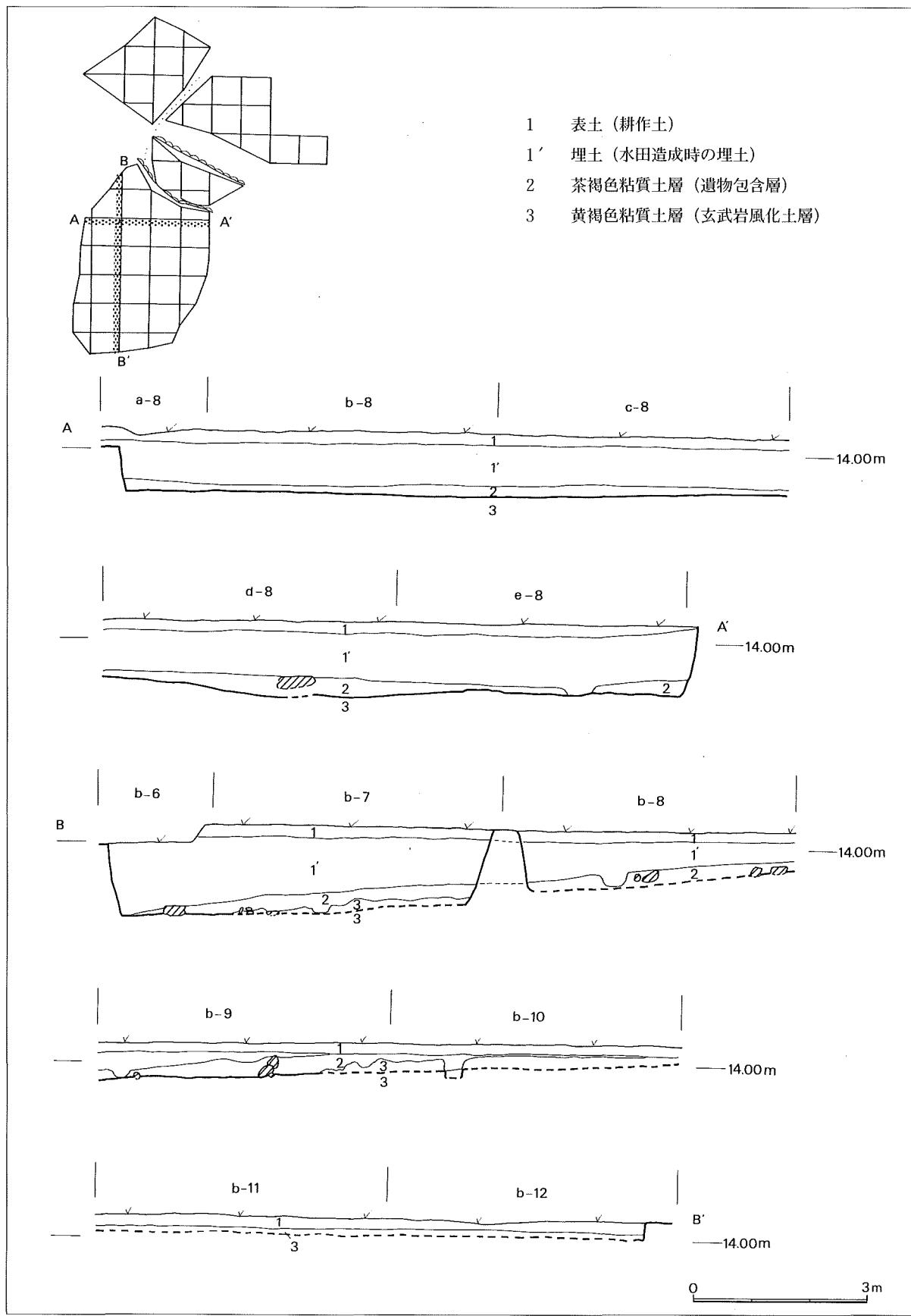
土 層

A地点では表土下がすぐに玄武岩の基盤が露出する地域が南側にあり、北側でも畑の拡張に伴う削平と盛土がおこなわれていた。基本土層は次の通りである。

- 1 層 灰褐色粘土層 (田の床土)
- 1' 層 赤褐色礫層 (田の拡張のための埋め土)



第15図 A地点グリッド配置図 (1/1,000)



第16図 土層図 (1/100)

- 2 層 茶褐色粘質土 (やや黒味あり) 遺物包含層
- 3 層 黄褐色地山層

A 地点の遺物

A 地点では多くの剥片・チップが出土したが、石器の出土は相対的に少なくこの地点が主体的に利用されたことは考えにくい状況にあった。このことはB 地点においても同様であり、平野遺跡そのものが、剥片剥離などを起こす場であったことが予想される。剥片、チップの出土と同時に旧石器時代から縄文時代の石器が数点出土している。

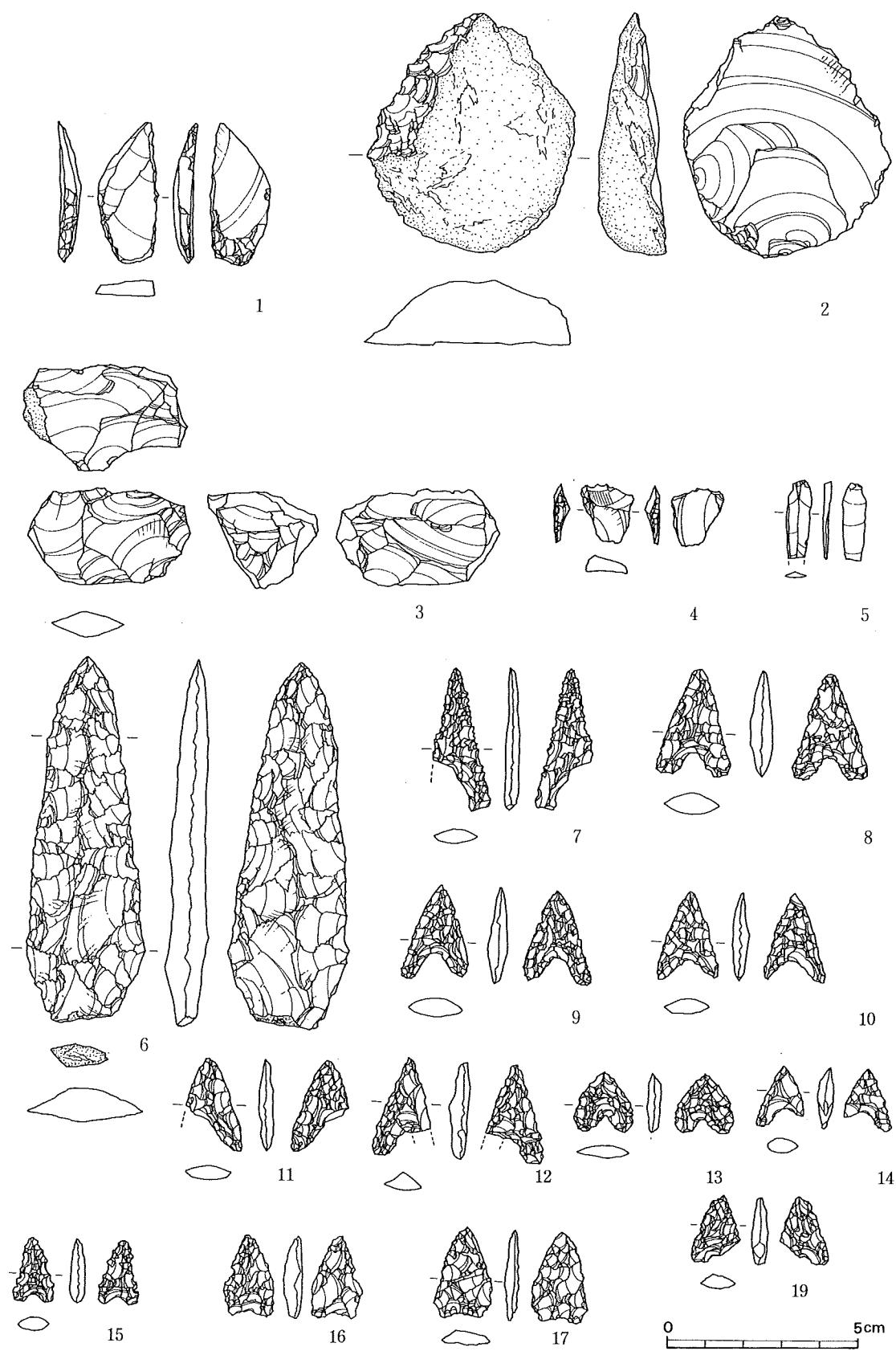
旧石器時代の遺物（第17図）

ナイフ形石器が1点出土している。幅広い縦長剥片を素材としており、やや湾曲気味である。主要剥離面の基部側に平坦剥離を施すのが特徴である。2は大形の厚みのある円形の剥片の一端に刃部加工を施したスクレイパーである。このような大形の原礫面付着の剥片は、B 地点に多く出土し、石核として使用される場合が多い。3は角錐状の石核で剥離面と打面を交互に変化させ、剥片を剥いでいくものである。4は百花台型の台形石器である。A 地点では旧石器の遺物としてはこの4点が出土しただけで、明確な包含層も確認できていないことから、他の地点に中心的な生活址があったものと思われる。

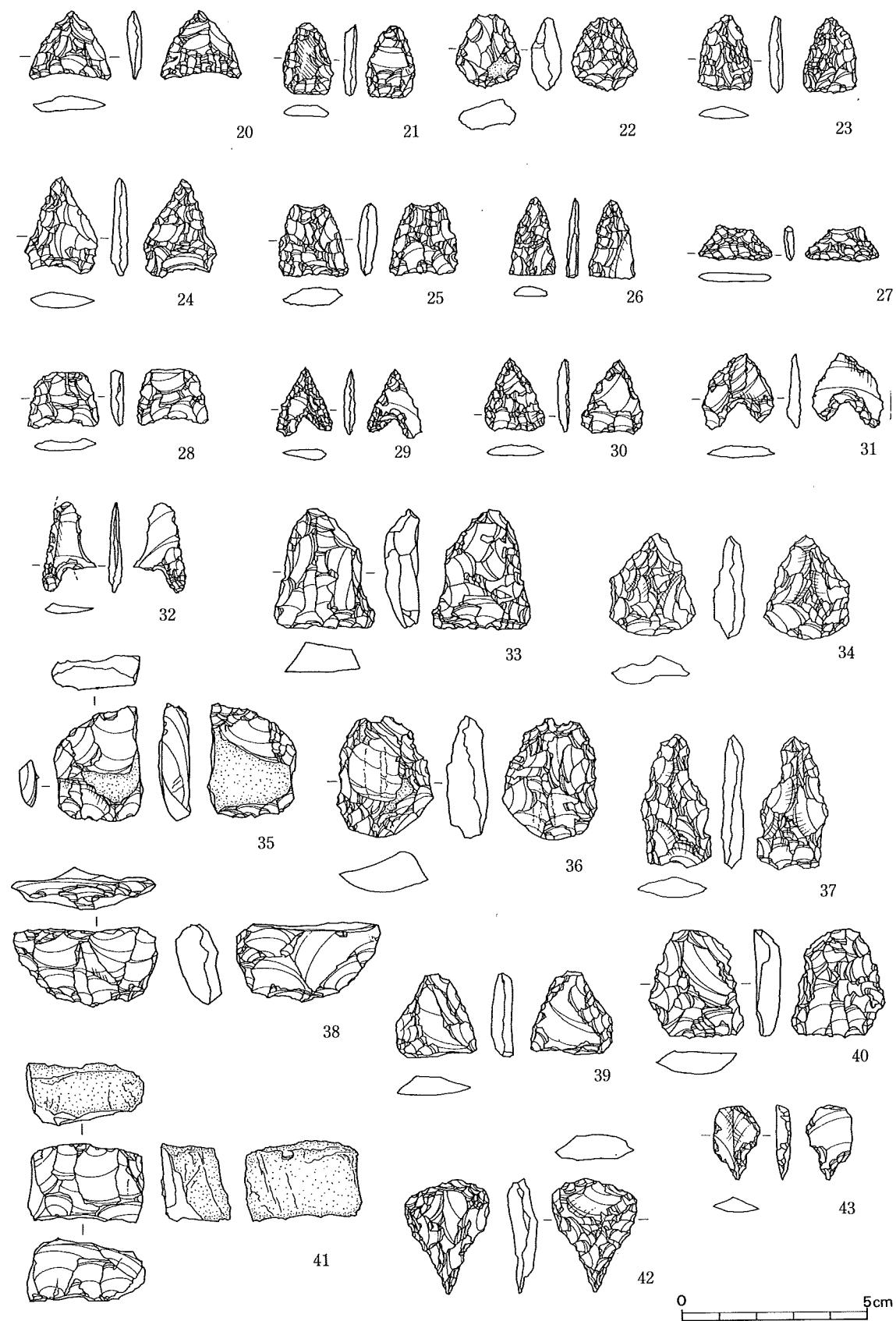
縄文時代の遺物（第17～19図）

A 地点出土の多数の剥片は、その多くが縄文時代に帰属するものと考えられる。石器の出土が少ないことから、この場で石器製作をおこない製品は外に持ち出したと考えるのが妥当であろう。出土遺物のなかで特筆されるものとして、6の玄武岩製の尖頭器がある。この尖頭器は、縄文時代の草創期に属するものと考えられるが、この地区でこの時期の物の出土はこの他細石刃一点に止まるところから、本来この時期の遺跡は他の場所に求めなければならないであろう。

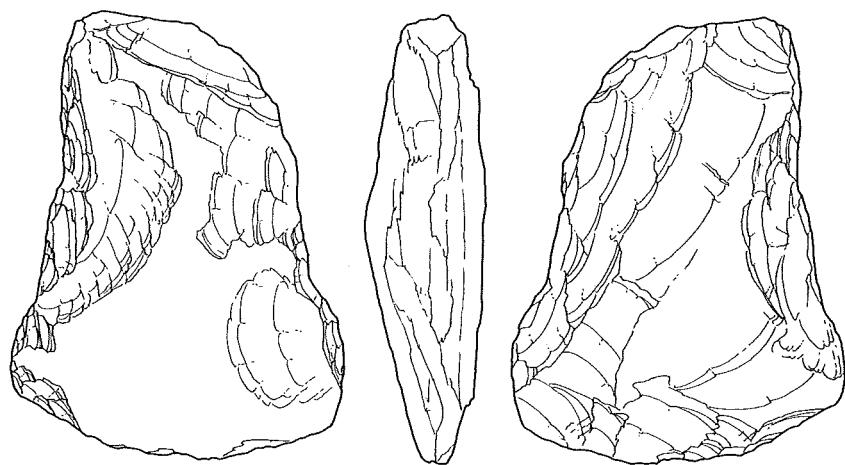
石鏸については、鍬形鏸やB 地点出土のものと共通する厚みのあるものの他、剥片鏸が数点出土しているが、基本的には晩期特有の粗雑な作りの石鏸が多数を占める。鍬形鏸はB 地点以上に出土比率が高く、早期の段階の行動範囲であったことが窺われる。剥片鏸については、西北九州沿岸部の縄文後期初頭から後葉にかけて出土する遺物として知られることから、本遺跡主体の縄文晩期以前の段階にも、ある程度の生活が営まれたものであろう。石核については、扁平な黒曜石を素材とし、ほぼ一面を作業面としている。石核についてもB 地点と同じような形態が出土している。この他42・43の石錐が出土していることがこの地点大きな特徴である。石斧は分銅形のものが1点出土する。分銅形石斧は晩期の遺跡で出土するが、県内ではどの遺跡においても1、2点の出土でしかなく、主体とはなり得ない石器の一つである。大型の石錘が1点出土するが、B 地点でも出土はなく積極的に関わった様相を石器群からは看取できない。



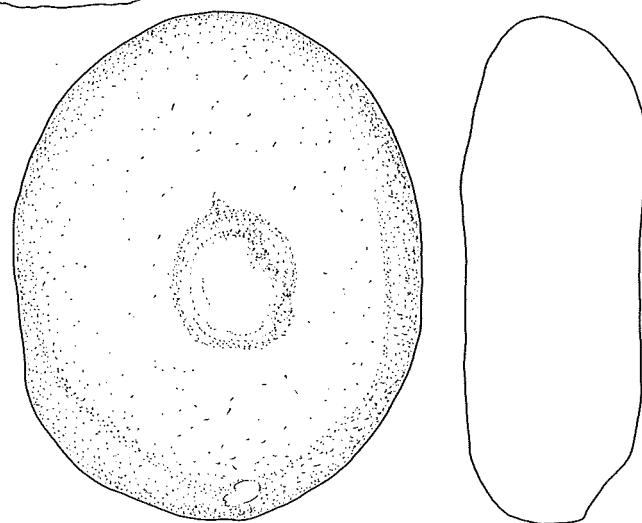
第17図 A地点の遺物① (2/3)



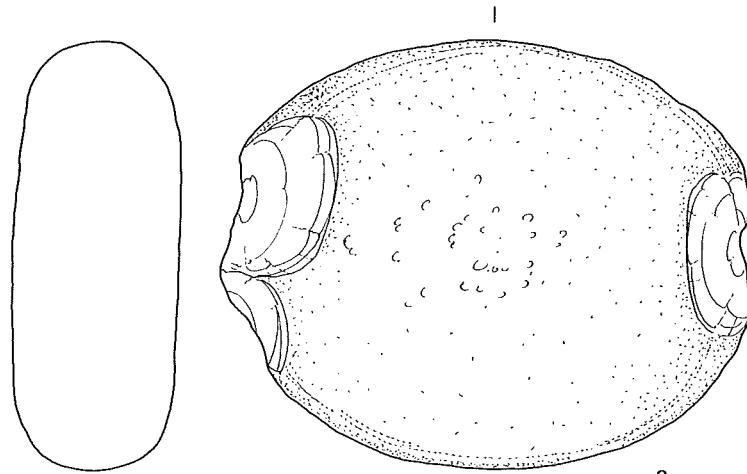
第18図 A地点の遺物② (2/3)



44



45



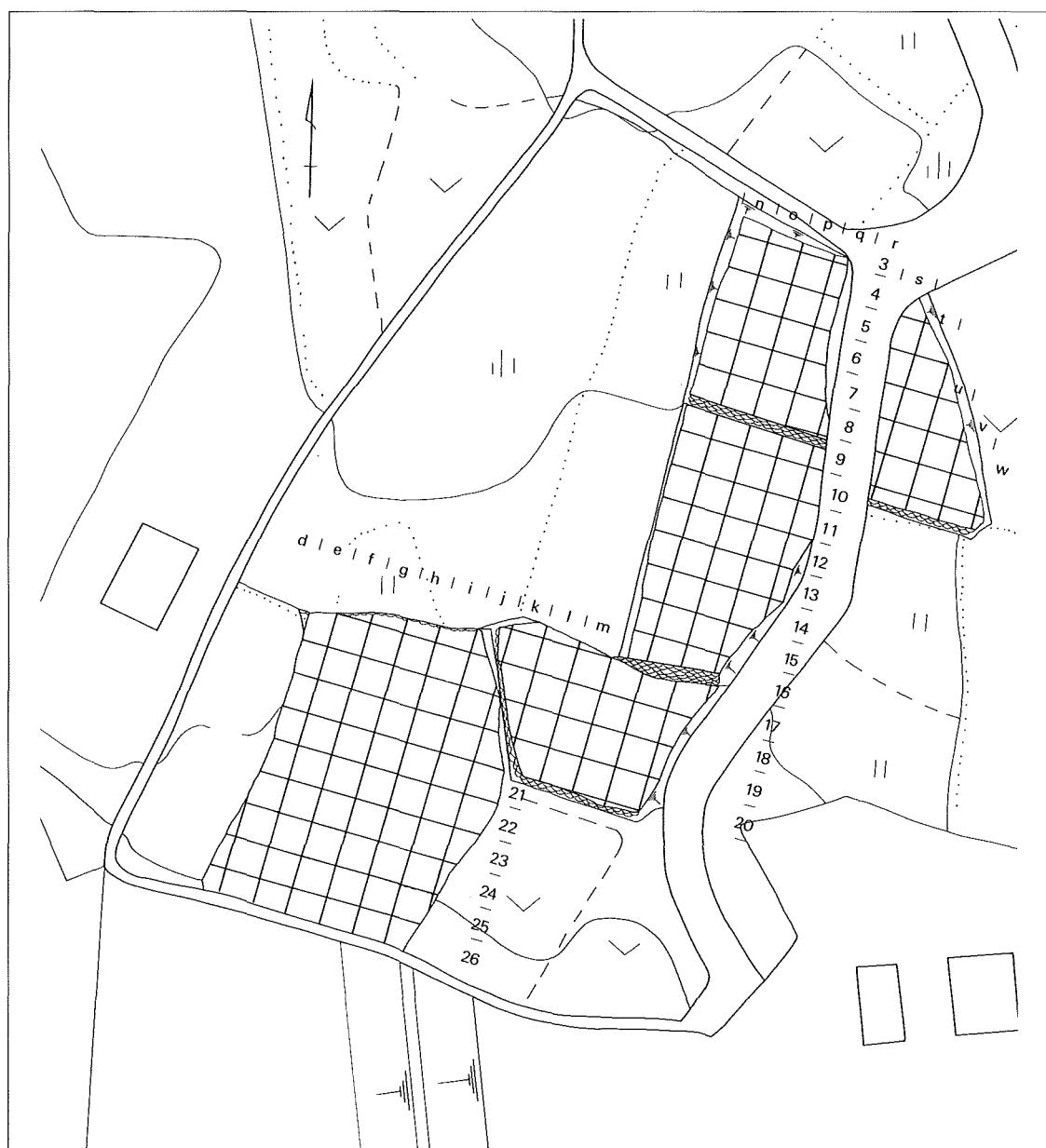
46

0 5cm

第19図 A地点の遺物③ (2/3)

第2節 B地点の調査

B地点は3,600m²が調査対象地区である。南北に緩傾斜しており傾斜面に沿って調査区を設定した。南側は包含層がわずかに残存するのみで、良好な状態ではなかったが、遺物は散在的ながら出土しており、本来の包含層が削平を受けたものと判断した。北側は前面的に遺物が出土し、中央部で遺物出土のピークがあることが判明した。これは旧地形が調査区の東と西で高く、中央部に鞍部を形成していることからこの鞍部に土が比較的厚く堆積した結果、良好な包含層が残存する結果となつたと判断した。また、南側では本来の包含層である3層が削平されてはいたものの、縄文晩期から弥生時代前葉のピット群を検出しており、さらに南側に延びるものと予想された。調査区外の北側に生活址を求めることができるものと思われるが、調査区の南側は既に削平されている状況であった。



第20図 B地点グリッド配置図 (1/1,000)

土層

B地点の南側A-A'のラインの基本土層を記載する。

1 層 表土

1' 層 埋土（玄武岩風化礫を含む）

2 層 灰黒色粘質砂層

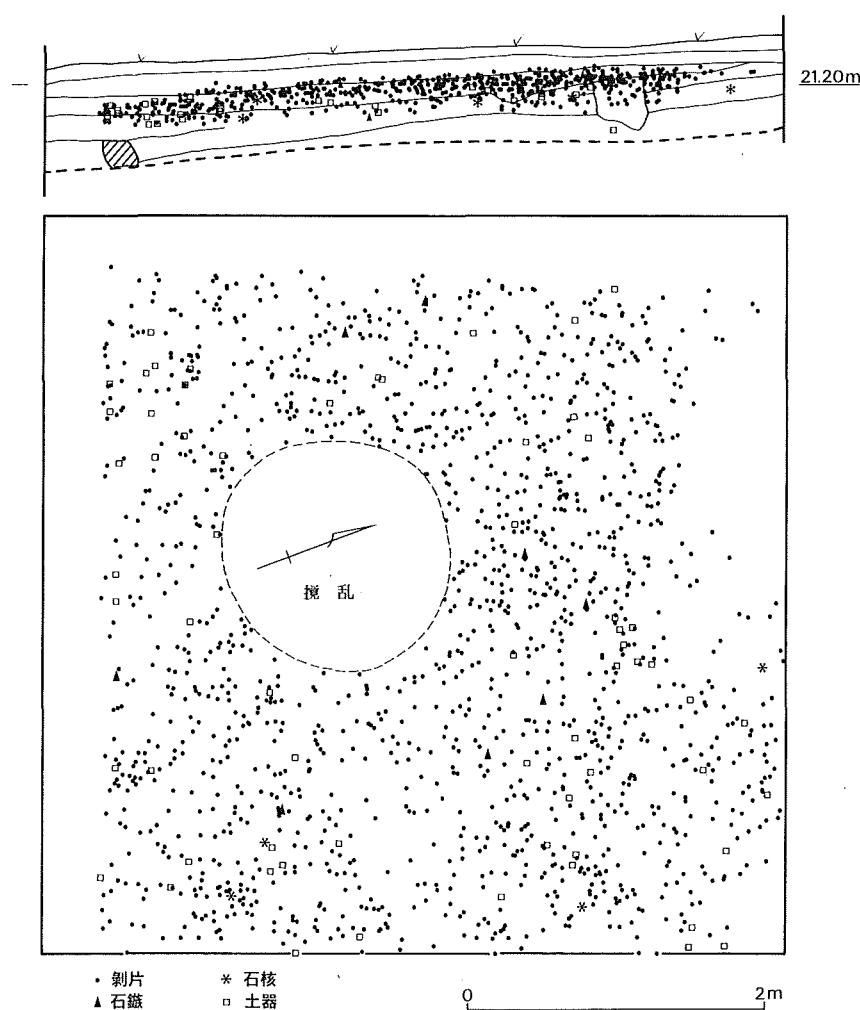
2' 層 灰褐色粘質砂層

3 層 褐色粘質土（遺物包含層）

4 層 暗黄褐色粘質土（玄武岩風化土層）

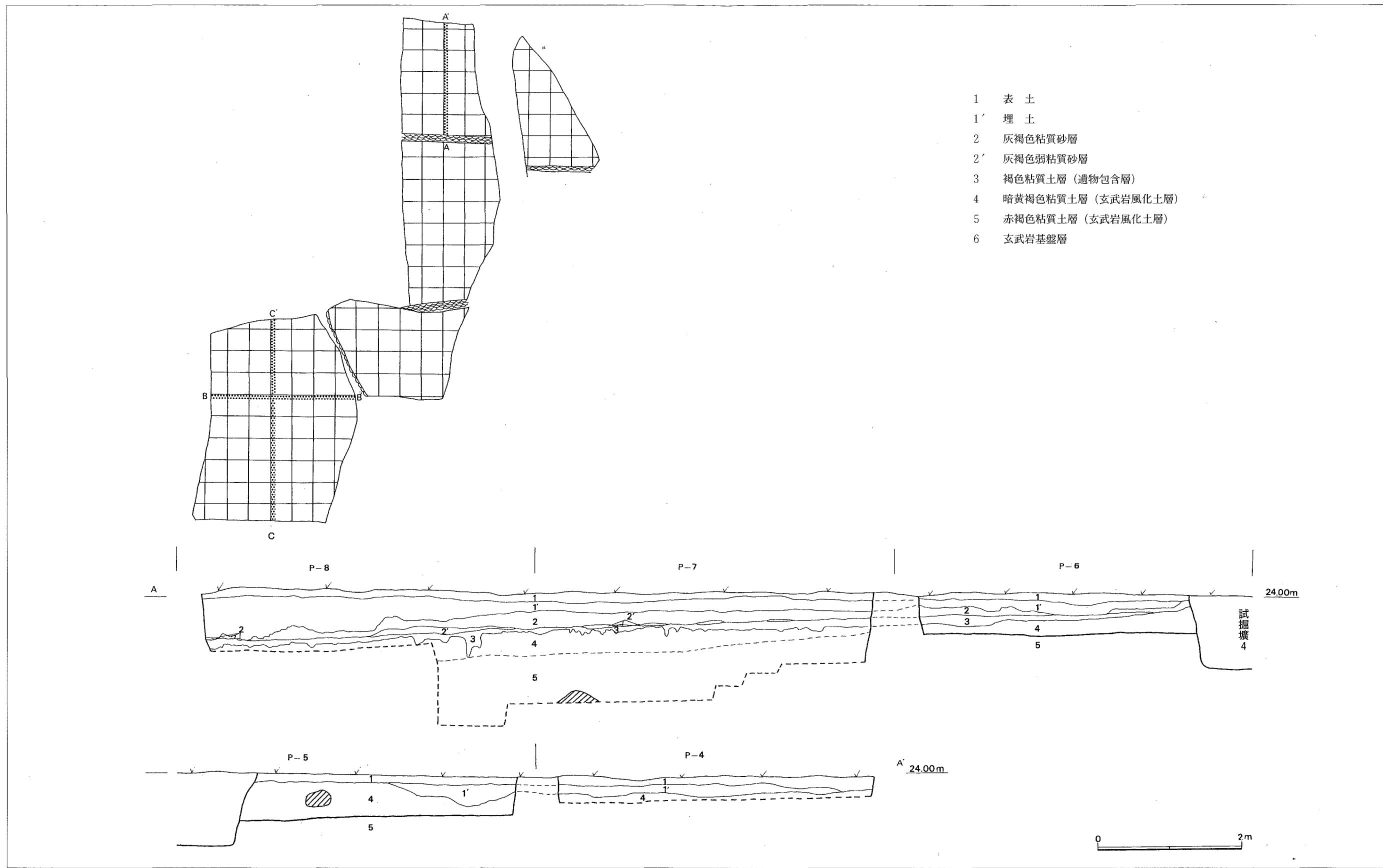
5 層 赤褐色粘質土（玄武岩風化土層）

B地点北側B-B'層のラインも基本的に同様で3層を遺物包含層として明確に捉えられる。北松玄武岩地帯の層序と基本的に一致するもので、浅い所では表土直下に5層の玄武岩風化土層が検出される。第21図にh-20区の平面分布と垂直分布を掲載した。平面的には全体的にこの地区同様かなり密集した形で遺物が出土し、ブロック等の検出が困難な状況にある。また、垂直分布で理解出来るように、3層を主体に遺物が含まれ、一部4層に落ち込む状況がみて取れる。

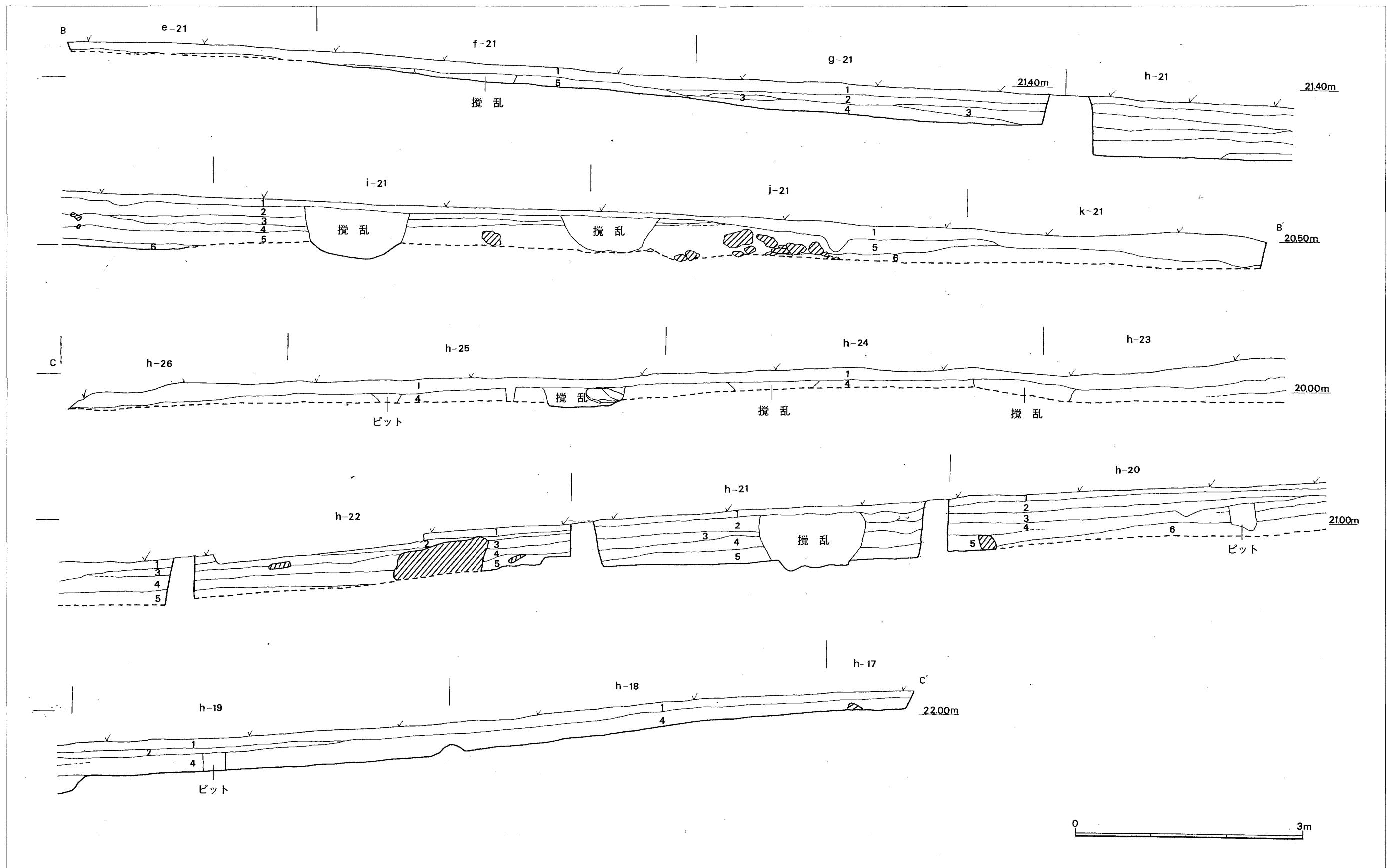


4・5層は玄武岩の風化土層で、特に北松地区でも土層堆積の良好な鞍部においては4層が確認される。江迎町根引池遺跡の状況からはある程度古い地層と考えられ、後期旧石器以前の遺物が含まれる可能性があるものと予想される。

第21図 h-20区遺物出土状況 (1/50)



第22図 土層図 ① (1/50)



第23図 土層図 ② (1/50)

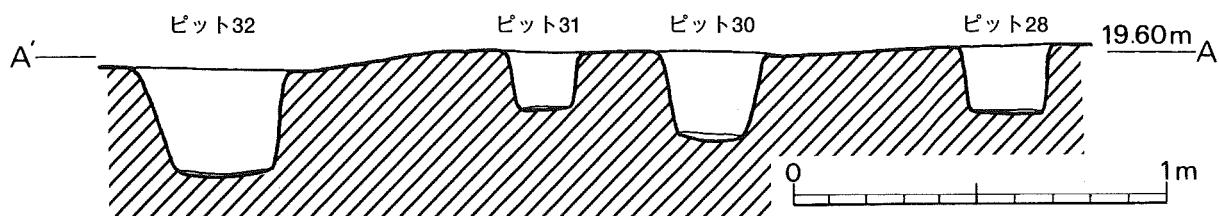
遺構

B地点の南側から多くのピット群を検出した。ピットは深さ20~30cm、直径約30cm大のものを主体とし、3層の黒色土を充填している。出土した遺物から、縄文時代晩期突帯文土器~弥生時代の前葉に築かれたピット群であることが理解できるが、特定の建物の復原ができるような状況ではなかった。ほかには遺構の検出はなかったが、本来遺構群をもつ遺跡で後世の削平により遺構が消失していることが理解できる状況下にある。以下、出土遺物とピットとの関係を説明していくこととする。

ピット出土の遺物

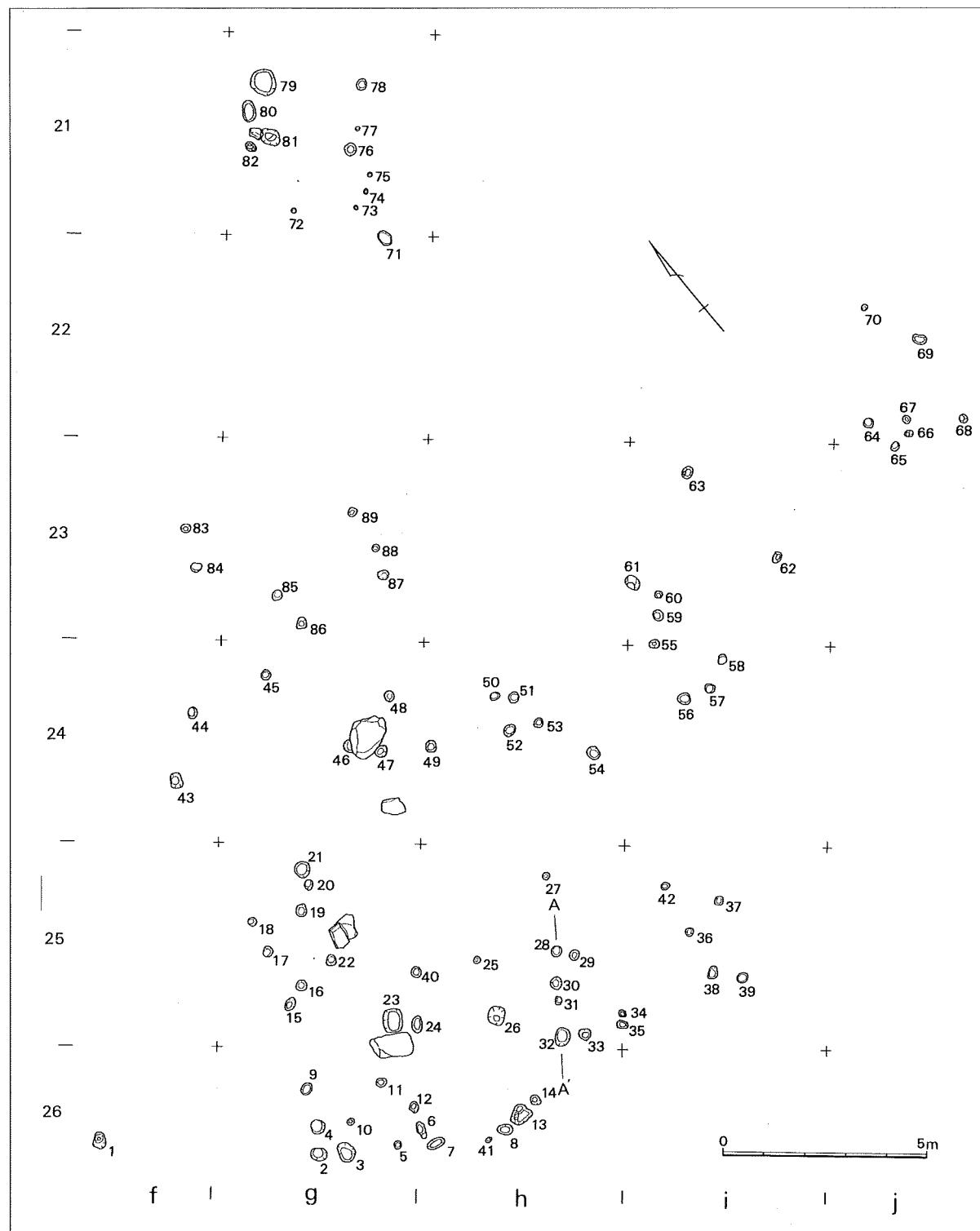
ピットからは概ね遺物の出土を見たが、土器片については多くは細片であった。このため、ここは石器については製品を、土器については時代判定ができるものについて図化をおこなった。以下ピット内遺物について説明する。

- ピット 2 二次加工石器で石鏃の一部と見られる。
- ピット 3 石核で、周辺から剥離をおこない非常に小型の薄い剥片を剥離したものと思われる。
- ピット 4 石鏃 3点と、その未成品 1点。石核 1点が出土。石鏃はすべて欠損である。薄身で剥離が器体中央部まで及ぶ。方形の黒曜石素材の 2面に剥離痕を有する小型のものである。
- ピット 6 薄身の石鏃 1点が出土。
- ピット 12 薄身の石鏃先端部。
- ピット 13 ピット 4 出土の石鏃と同様な薄身の石鏃と、方形の黒曜石を素材とした剥離面が 1面の石核。
- ピット 23 砂岩製の砥石が出土。表裏とも 4~5条の研ぎ面をもつ。円礫を素材とした石核と板状の黒曜石素材の 2種がある。a は一端にのみ剥離痕がみられ、剥離された剥片は自然面を付着したものと思われる。b は板状黒曜石を素材とし、求心状剥離をおこなう。c は打面を形成するが、寸詰まりのやや幅広の剥片を剥離している。
- ピット 24 鋸歯鏃である。小型のもので、他にこの手の石鏃を見ない。
- ピット 30~33・63 突帯文土器を出土。
- ピット 51 表裏に大剥離面を残す周辺加工の小型石鏃。
- ピット 62
- ピット 80 黒曜石の円礫素材の石核と、方形の素材を用いた石核が出土。
- ピット 83 黒曜石製の石鏃先端部と胴部が出土。他に多量にのチップ・剥片が出土している。剥

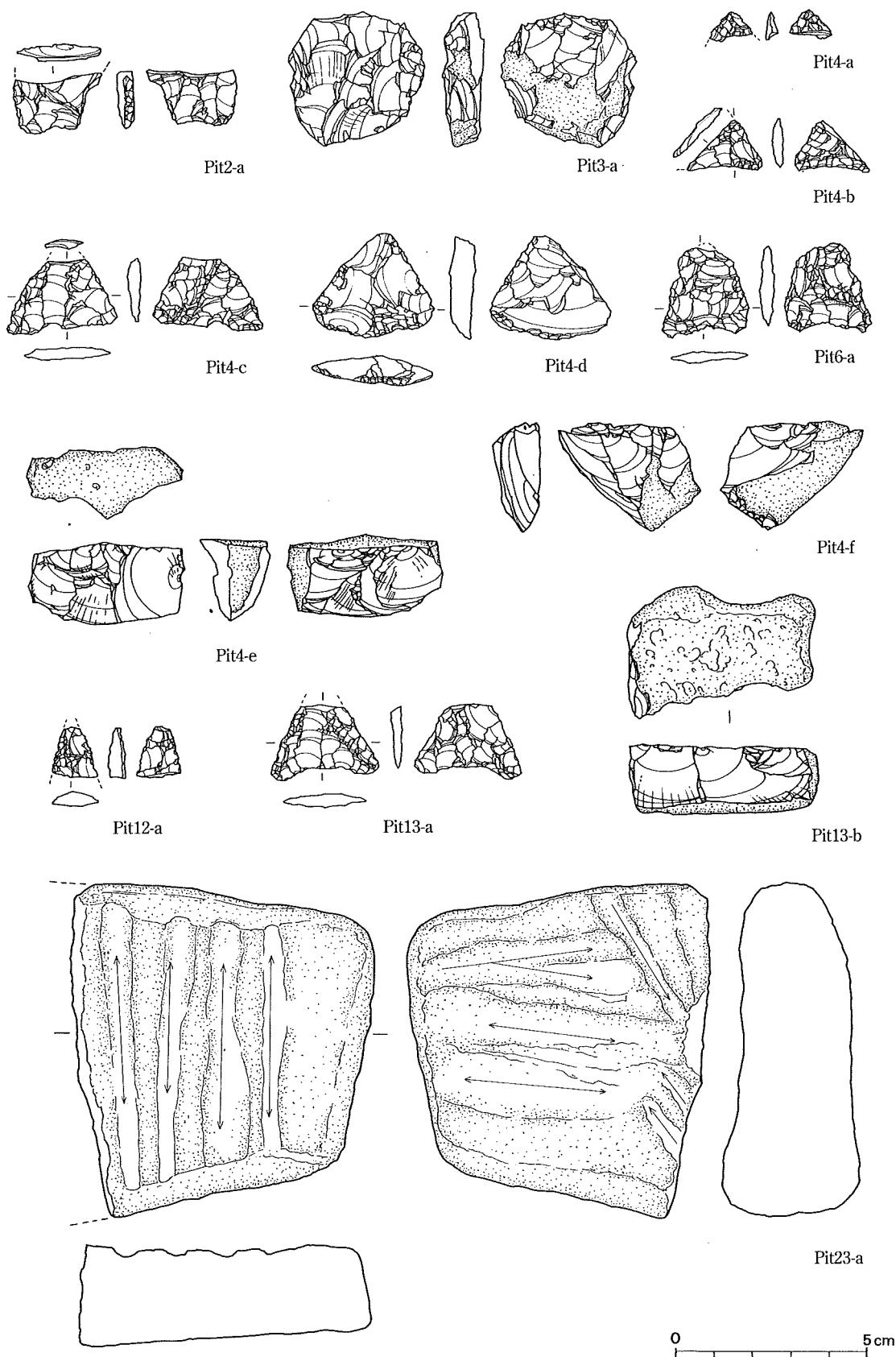


第24図 ピット断面図 (1/20)

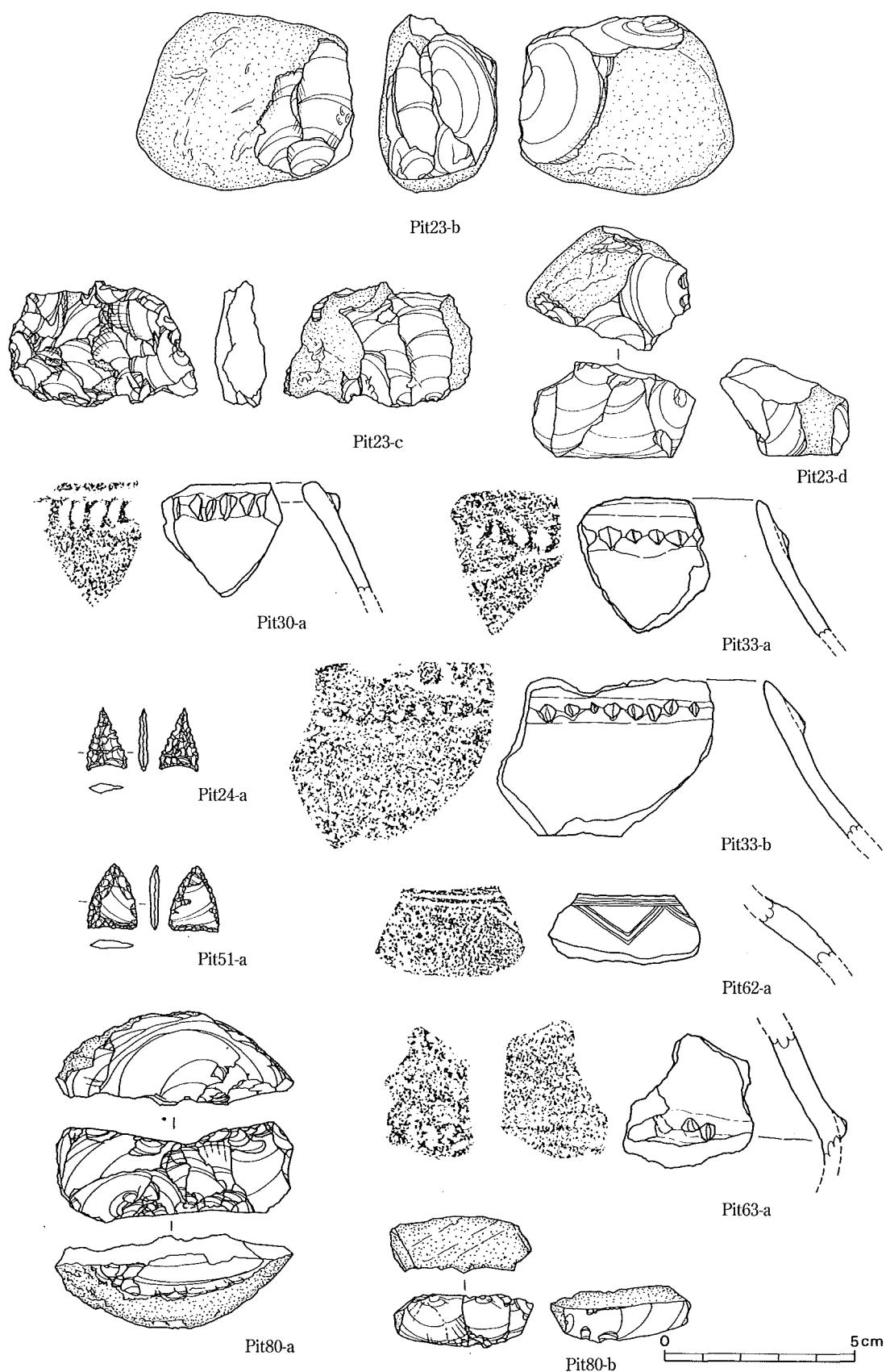
片は接合関係をもち、その剥離関係から求心状の石核から剥離されたものと考えられる。このピット出土の遺物から、石鏃製作に関わるチップ・剥片がピット内にそのまま埋納された状況が看取される。図化していないが土器洞部片も出土しているが時代判別の決め手とはならない。



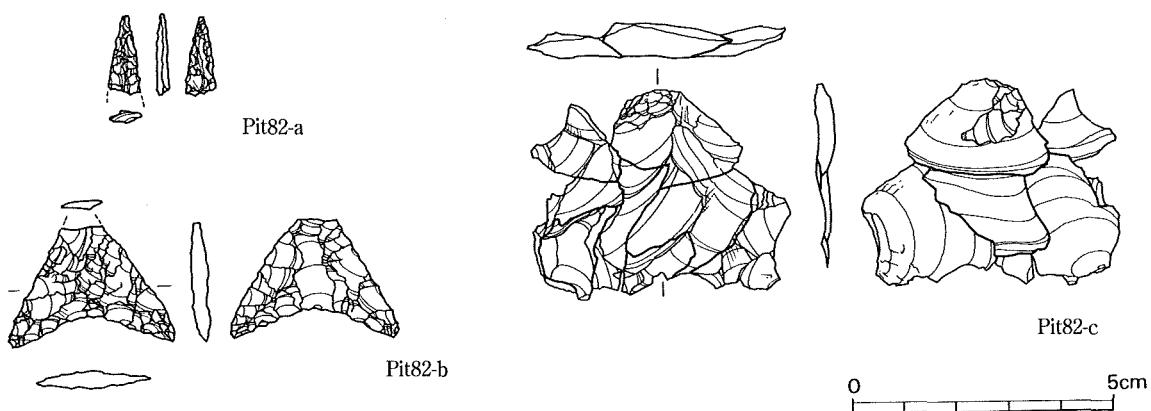
第25図 4層面ピット検出状況



第26図 遺構内出土遺物① (2/3)



第27図 遺構内出土遺物② (2/3)



第28図 遺構内出土遺物③ (2/3)

以上、ピット内出土の遺物について説明をおこなったが、これらの遺物については共通した遺物組成が看取できる。ピットから出土して遺物は基本的に土器あるいは石鏃を伴うということである。またピット内に、石鏃を製作する際に剥落した多数のチップ・剥片や石核なども含まれるということである。ピット内出土の石鏃については、いくつかの共通点が見られる。まず大形であるということ、平基であること、調整剥離の一つ一つが大きいこと、薄身であることなどである。包含層出土の石鏃の多くは厚みがあり、先端部が鈍く県内の晩期遺跡出土の石鏃との共通要素を見出せる。このことはピット出土の石鏃が特別な機能のためのものであることを考える必要があろう。

このピットの性格について、ピット？の遺物構成から考えていくこととする。ピット？は石鏃2点、チップ？点、剥片？点が出土している。出土剥片は、数点が接合関係をもっており、接合関係からかなり薄い剥片を剥離することに重点をおいていることが理解できる。このことは、出土した石鏃が薄身のものであることと共通するものであり、他のチップとも併せて考えるならば、石鏃の製作直後にその製作に関わった一連の物をピット内に土器とともに一括埋納したと考えができる。このようなピットが幾つか確認されており、この行為は本遺跡における一般的な行為であると言えよう。この行為が何に起因するのかについては現在同様な遺構についての類例を調査中であるが、現在のところその例を見いだすことは出来ない。現在考えられることは、儀礼的なものを想起させる行為ということである。この見知からすれば、個々のピットはそれぞれ独自に機能していたことが考えられ、それが縄文晩期から弥生時代にかけてのこの地域における習俗であった可能性が見出せる。特に狩猟に関する祭祀ということで捉えることが妥当と思われる。ただし、ピット？については砥石の出土があることや、土器の供献等を考えるならば単純に狩猟関連の儀礼行為の結果と考えることも出来ないところがある。今後、この地域周辺での類例を検索し、この儀礼的行為がなにに起因するのか、またその出自について検討することによって、さらにこの時期の生活形態の一端を表すことに通ずるものと考える。

番号	黒 隅 石									玄 武 岩									レベリング 上場→下場 (m)		
	石	鐵	石	核	その他	潤 片	チ ッ プ	製 品	潤 片	チ ッ プ	製 品	潤 片	チ ッ プ	製 品	縄文?	弥生?					
						25mm以上	25~16mm	16~12mm	12mm未満			25mm以上	25~16mm	16~12mm	12mm未満						
1	2					8	8	8	6						1	5	2	0.233	—		
2					1	2	7	13	53						1	4	19	0.145	—		
3	1	1			9	29	21	110				1			4	19	5	0.192	—		
4	3	4			11	42	48	208		1	2	2	4	30	8	3	3	0.164	—		
5					1	13	6	22		1	1	1			5			0.157	—		
6	1		1		4	8	12	16			1				5			0.156	—		
7					2	10	4	25		1	1				5			0.105	—		
8						5	18	75						2	1			0.081	—		
9					1	4								1				0.112	—		
10																		0.106	—		
11					1	1	1	1							2			0.194	—		
12	1				2	10	13	70		1	2	1	3	8	8	5	11	0.18	—		
13	1	2	1		7	77	94	608		2	1		5	11	3			0.18	—		
14					3	7	7	88		1	3	1	8					0.148	—		
15					3	6	14	1						5				0.192	—		
16					3	4	9	13						2				0.113	—		
17					1	1												0.21	—		
18			1				3	9		1	1							0.247	—		
19						7	4	5										0.25	—		
20						1		3										0.262	—		
21			1(?)		4	8	7	19		1				3				0.227	—		
22						2	3	6						1	1			0.254	—		
23		3	3		7	12	24	35	1(?)		1		1	10	6	0.092		0.088	—		
24	1				2	6	5	6										0.194	—		
25							3											0.137	—		
26					2													0.18	—		
27																		0.215	—		
28					1	2	1							2	2			0.236	—		
29														1				0.162	—		
30		1			2									2				0.304	—		
31							1							6				0.202	—		
32					1	5												0.164	—		
33						1	1	2										0.138	—		
34						3		5										0.12	—		
35					2													0.155	—		
36																		0.063	—		
37					1	1												0.163	—		
38						1	1	2										0.229	—		
39																		0.377	—		
40					1	1	2	3						1	2			0.182	—		
41						1	5	8	68									0.242	—		
42						1	3	2	3									0.149	—		
43		1				5	3	2		1								0.197	—		
44		2			1	7	3	2			2	1						0.302	—		
45																		0.157	—		
46																		0.055	—		
47																		0.077	—		
48																		0.278	—		
49						2	4	5	2					1	3	7		0.137	—		
50							2							1				0.2	—		
51	1				2	6	2	10						2	1			0.105	—		
52									13					6				0.188	—		
53					1	3	2	12			2				2			0.193	—		
54						1	2	8			1			1	3	1		0.116	—		
55					1	2												0.122	—		
56							3											0.085	—		
57					2	3	3	2			1							0.18	—		
58					1	1	2											0.105	—		
59					2	4	1	5		1				5				0.143	—		
60						1												0.195	—		
61	1				1	6	3											0.134	—		
62						1	4	2	5					5	2			0.146	—		
63						4	6	1	4	1		2		1				0.224	—		
64						1								1				0.195	—		
65							1	1										0.146	—		
66																		0.122	—		
67																		0.085	—		
68																		0.105	—		
69					1													0.105	—		
70						2	3	6						2				0.116	—		
71					1	2			1						2			0.109	—		
72																		0.102	—		
73																		0.055	—		
74							1											0.07	—		
75								1										0.06	—		
76																		0.237	—		
77																		0.038	—		
78																		0.143	—		
79								1	4									0.153	—		
80		2			6	11	2	7						1				0.134	—		
81																		0.164	—		
82	2				2	30	26	455							1			0.08	—		
83																		0.193	—		
84																		0.154	—		
85																		0.145	—		
86																		0.083	—		

平均 0.16457471

註1. 網掛け部分はビット内に遺物包蔵しているもの。

註2. —は、ビットの深さが平均値より深いもの。

表2 遺構内出土遺物一覧

縄文土器（第29図・第30図14～20）

出土した土器はA・B両地点ともごく少量であるが、特にB地点では若干の縄文土器の遺構内出土や包含層内出土があったため、石器が大多数を占めるこの遺跡では、土器をメルクマールとしなければならない。ほとんどが縄文晩期に比定される土器で、ほかに弥生土器・土師器で構成される。すべての土器が摩耗しており、器面調整が不明なものがほとんどである。中には器表面が溶けてしまい胎土が露わになっているものもあるが、本遺跡の主たる時代設定を考える上で重要であるため、検証していく必要がある。

遺跡の主体となる晩期の土器である。1・2は組成浅鉢、3は鉢、4～16・20は刻目突帯文を施した深鉢片である。1の外面口縁部にある沈線は意図的なものではなく、器面調整時の傷であろう。2は、口縁部のみ丁寧な指ナデが施されている。4・5と15・16は色調と突帯の有様、器厚から同一個体と思われる。4・5は、比較的細い突帯に指で下方からの押圧による太く粗大な刻みを施している。突帯は口唇直下に巡らし、口縁は外傾する。3の口唇に施した刻目やほかの突帯文土器の刻目は、刻目の幅から、ヘラ状工具によってなされたものと考えられる。7の外面は粘土紐の巻き上げ痕があり、内傾接合気味である。口唇刻目部分は突帯を貼付しておらず、胎土を外側につまみ上げて刻目を入れている。8は太い突帯に刻みを施した後、刻目直下をヘラ状工具でナデており、その際器面の胎土をやや削り取っているようである。17は胴部の最大径部分であるが、内面に器厚を減するための条痕による擦痕が残る。底部はすべて若干上げ底である。

弥生土器（第30図21～24）

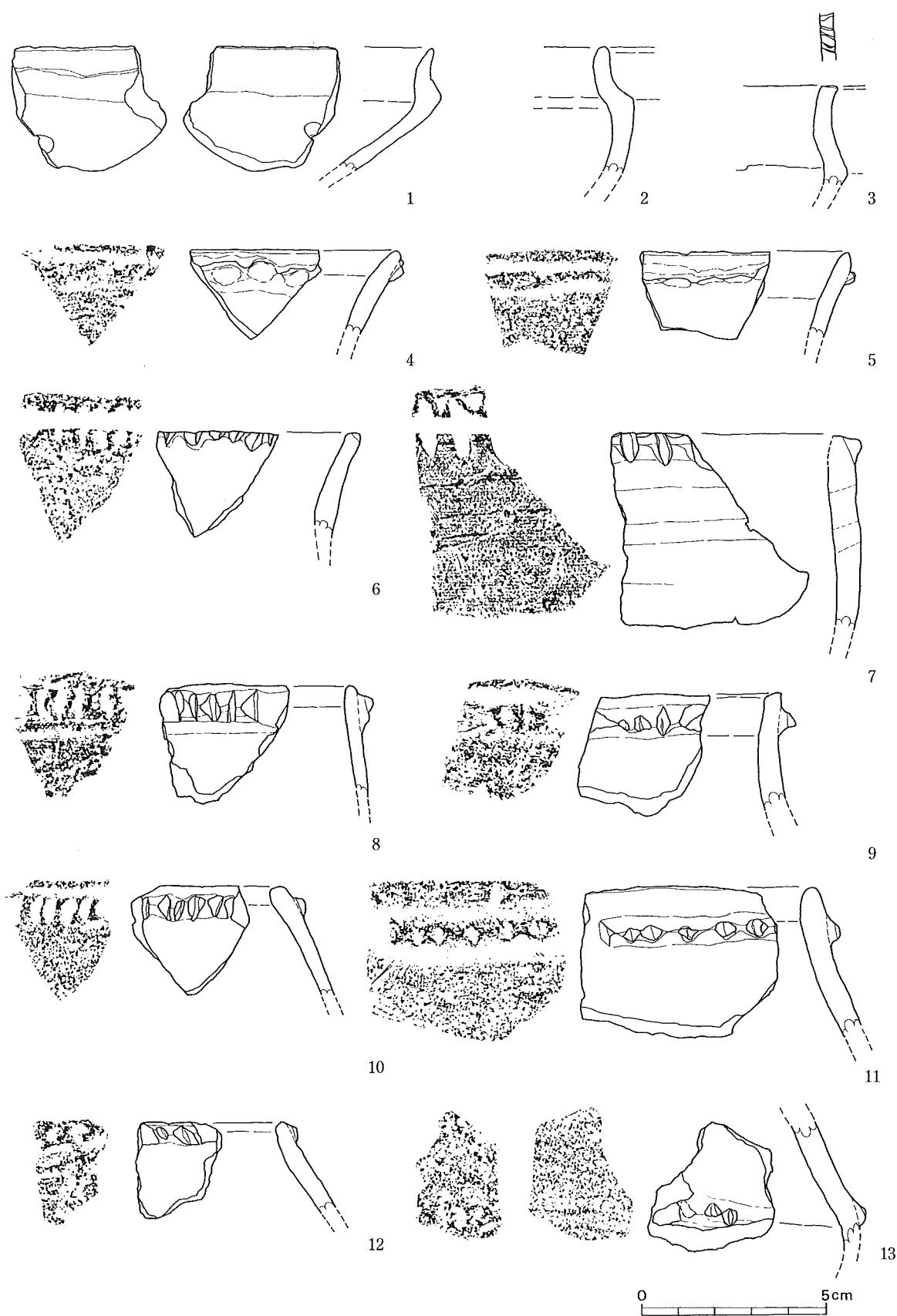
すべて前期の壺形土器と思われるものである。23は肩部の破片で、二重に圈線・三角文をヘラ状工具にて線刻している。外面は摩耗して沈線も見にくくなってしまっており調整は確認できないが、内面の調整痕は指ナデが残っている。24は底部の破片であるが、内面上部に下方から上方へかすり上げたような刷毛目が残っており、器壁を3分の1ほどえぐり取っている。ピット内から出土した土器は刻目突帯文土器と弥生前期に比定される土器である。

土師器（第31図）

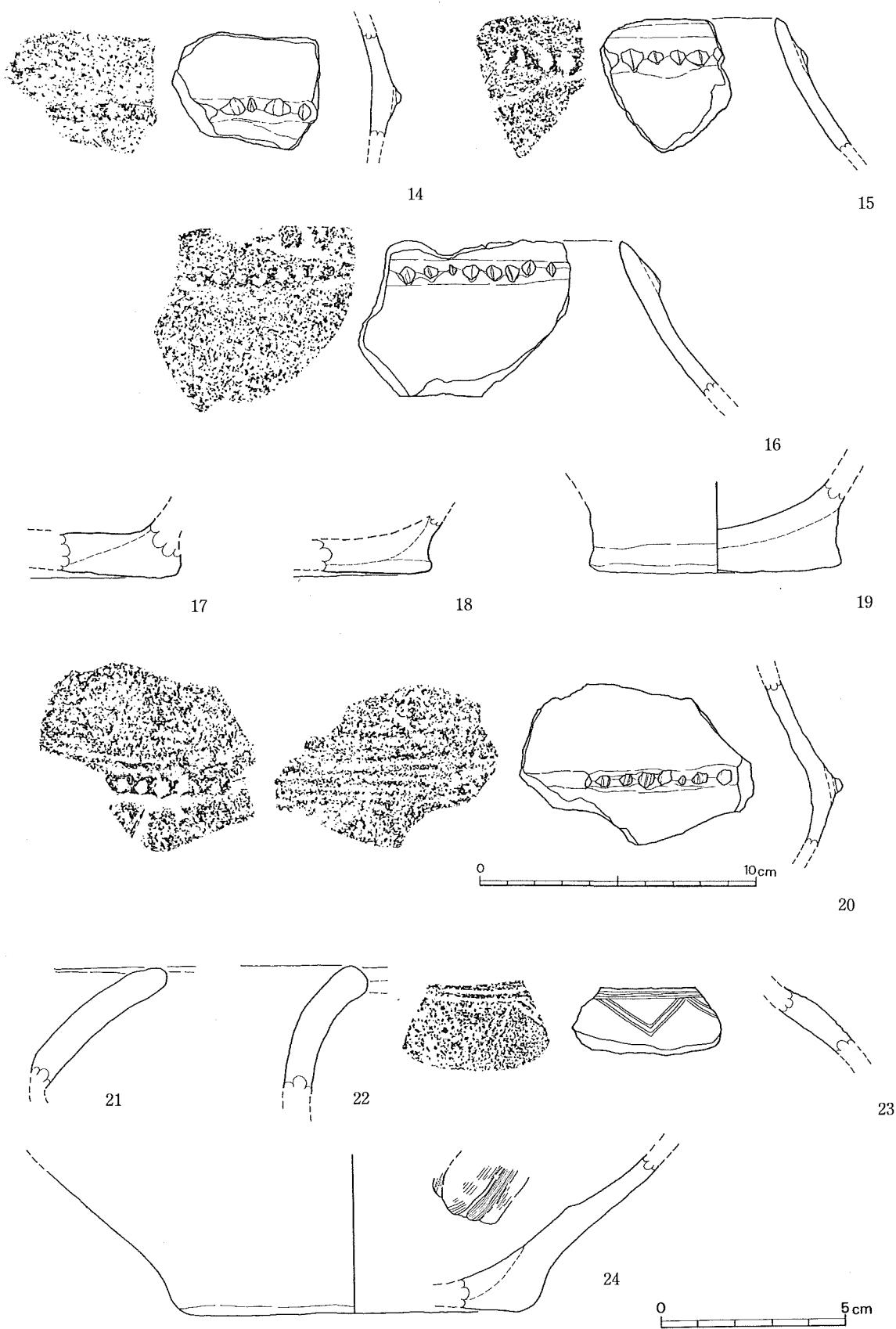
すべて口縁部分であり、摩滅が著しい。25は堆と思われるもので、口縁は薄手に仕上げている。頸部はあまり伸びず、屈曲部へ外弯気味に収束するようだ。26～28は壺である。26は外反気味の直口壺である。口縁端部ははっきりしないが、これ以上伸びないであろう。27の口唇には玉縁状の凸部になっているが、これは調整時に成形したものと思われる。28は強く外反した口縁で、内面は三段の調整を施している。時期は柳田康雄氏編年のV期と考えられるが、碎片のため判断は困難である。

【参考文献】

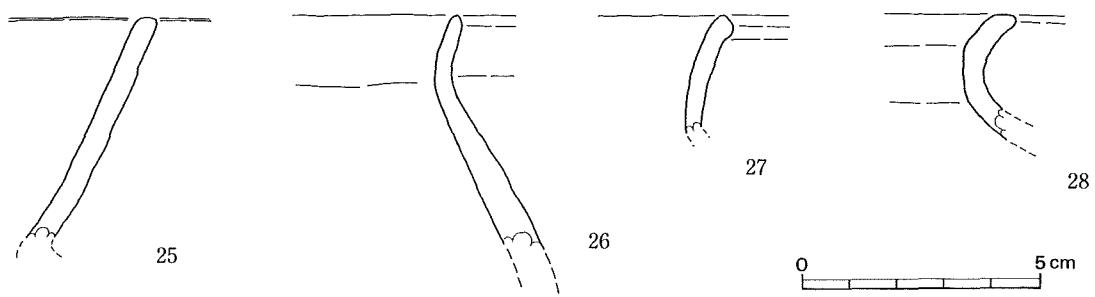
柳田康雄1991「2 土師器の編年 九州」『古墳時代の研究』6 雄山閣



第29図 B地点の遺物—土器① (2/3)



第30図 B地点の遺物—土器② (2/3)



第31図 B地点の遺物—土器③ (S=2/3)

番号	出土地区	層位・遺構	部位	胎 土	色		調		整	焼 成	備 考
					外	内	外	内			
29-1	h23	1(表土)	口縁	石英・長石・雲母・角閃石	灰褐色	灰褐色	—	—	不良	粗製 補修孔あり	
2	i22	3	口縁	石英・雲母	暗黒褐色	暗褐色	指ナデ	—	やや良好	粗製	
3	g20・21	1(表土)	口縁	石英・雲母・角閃石	橙色	暗灰色	—	—	不良	口唇に浅い刻目	
4	h20	3	口縁	石英・雲母	灰褐色	黄灰色	ヘラナデ	ヘラナデ	やや良好	指押圧	
5	h21	3	口縁	石英・雲母	橙色	黄灰色	—	—	やや良好	指押圧 4と同一個体か	
6	h20	3	口縁	石英・長石・雲母・角閃石	暗灰褐色	淡灰黄色	—	—	不良	口唇刻目	
7	h20	3	口縁	石英・長石・雲母	黒褐色	暗灰褐色	ヘラナデ	—	良好	口唇刻目 突帯なし	
8	h22	4	口縁	石英・長石・雲母	黒褐色	黒褐色	ヘラナデ	ヘラナデ	良好	明瞭な刻目	
9	j20	1(表土)	口縁	石英・長石・雲母	淡橙色	淡橙色	—	—	不良	粗雑な刻目	
10	h25	ピット30	口縁	長石・雲母・角閃石	暗褐色	茶褐色	—	—	不良	深い刻目	
11	h20	3	口縁	石英・長石・雲母	橙褐色	暗灰黄色	—	—	不良		
12	h22	3	口縁	長石・雲母	淡赤色	黄灰色	—	—	不良	口唇直下に突帶	
13	i23	ピット63	胴部	石英・長石・雲母	赤橙色	暗灰黄色	—	ヘラナデ	不良	粗雑な刻目	
30-14	i20	3	胴部	石英・雲母	黒褐色	灰褐色	—	—	不良	摩滅著しい	
15	h25	ピット33	口縁	長石・雲母・角閃石	淡黄灰色	黄灰色	—	—	不良	摩滅著しい	
16	h25	ピット33	口縁	長石・雲母・角閃石	淡赤黄色	黄灰色	—	—	不良	摩滅著しい 15と同一個体か	
17	i20	3	底部	石英・雲母	灰褐色	濃灰褐色	—	—	不良	やや上げ底	
18	g21	3	底部	石英・雲母	灰色	—	—	—	不良	やや上げ底	
19	h23	4	底部	石英・雲母	淡赤色	明橙色	—	—	やや良好	上げ底気味	
20	h21	3	胴部	石英・長石・雲母	淡黄色	淡黄色	条痕?	条痕	やや良好	二度突帯を貼付	
21	i21	3	口縁	長石・雲母・角閃石	明赤色	黄色	—	—	不良		
22	g25	4	口縁	石英・長石・雲母	赤色	赤色	—	—	やや良好		
23	i23	ピット62	肩部	石英・長石・雲母	灰褐色	灰褐色	—	指押さえ	やや良好	ヘラ状工具にて 圈線・三角文	
24	g22	2	底部	石英・長石・雲母	赤橙色	橙灰色	—	刷毛目	やや良好	やや上げ底	
31-25	h22	3	口縁	石英・雲母	暗褐色	黄色	—	—	不良	土師器 直口壺	
26	h21	1(表土)	口縁	石英・長石・(金)雲母	灰黄色	淡赤色	—	—	不良	摩滅著しい	
27	h20	3	口縁	石英・長石・(金)雲母	淡黄灰色	淡黄色	—	—	不良	口唇外反氣味	
28	h21	1(表土)	口縁	石英・長石・(金)雲母	黒灰色	明橙色	—	—	不良	強く外反	

表3 出土土器観察表

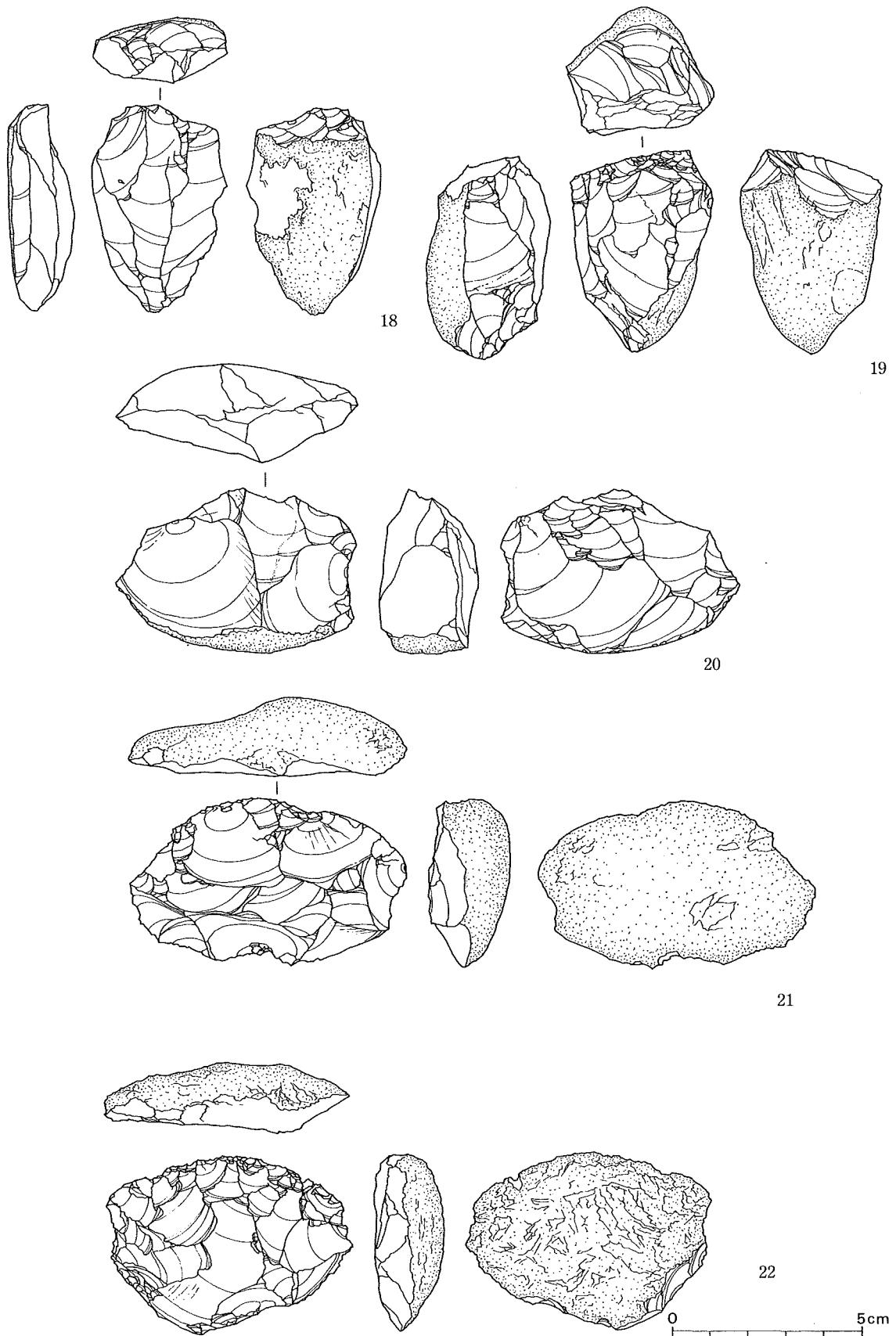
石 器

旧石器時代の遺物17点を図化した。内容的には、ナイフ形石器8点、台形石器7点、スクレイパー2点である。それぞれ技術的、形態的側面にはいくつかのバラエティがあり後期旧石器時代の中でも時間幅を持っているようである。1は、柳葉形の幅が細い縦長剥片を使用したもので、主要剥離面の基部側の打点の観察から点状の打点であったことが知れる。特徴として、プランティング先端部に細いネガ面が観察されることである。器体先端部aにおいて加工の変化点が観察されることから、本来破線まであったものを意識的に折り取った結果であろうと考えられる。この加工が刃部再生にかかわるものか、ナイフ形石器の整形の際、一般的にこのような手法が存在するのか検討の余地がある。2は平坦打面石核の奥に打点を置き、打面が三角形になる厚手の縦長剥片を素材とする。一側辺のみにプランティングを施し、プランティング面を打点としながら主要剥離面にも平坦剥離をおこなう。もう一方の側辺は素材側辺すべてを刃部としている。3は下部のプランティングの一側辺が背面側から加工をおこなうことを特徴としている。4は2側辺のプランティング加工が45度に近い角度で施され、寸づまりな形態である。あるいは、大形のナイフを何回か再加工し、最終的に今の形態になったことも考える必要があろう。5・6・7・8は小形ナイフの一群である。素材も薄い縦長剥片を使用し、プランティングも2側辺に施すものと一部にのみ施すものとがある。8は大形の台形石器で素材剥片は打面に最大厚をもつ横広の剥片を使用している。プランティングは側辺に並行におこない日ノ岳型（下川1981）に類似する。9も横広剥片を素材とするもので、抉る様な加工を施すことにより逆三角形状を呈する。10は側辺の加工が錯交するプランティングが特徴的で、原の辻型の台形石器の加工と共通するものである。11・12は縦長の薄い剥片を使用することで他と相違し、プランティングも細かいものになっている。素材的には百花台型に類似するが、刃部の張り出しがないことなどから純粹な百花台型とは言えないであろう。16は剥片の側辺に加工を施したコンケイブ・スクレイパーである。また、その一端には載断面とその側辺に使用痕が認められることから、彫器としても使用していたであろう。17は分厚い横長の剥片の一部に刃部を設けたエンド・スクレイパーである。これらの旧石器時代の遺物から、3つの時間的な段階が想起される。5～7・15の小形ナイフの存在、スクレイパーと及び日ノ岳型台形石器の存在、薄い縦長剥片使用の台形石器の一群である。

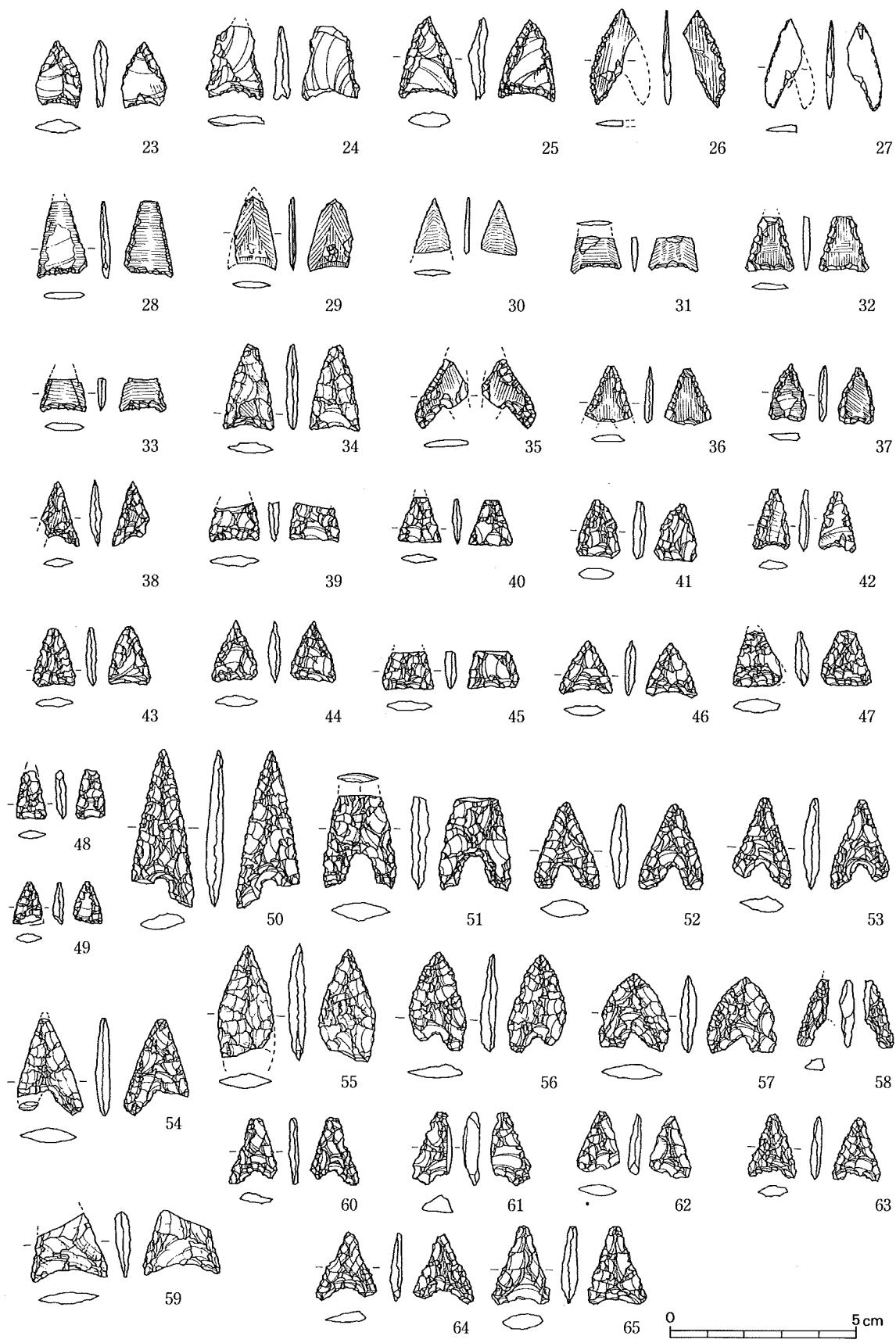
石核については、旧石器的な様相を持つものということでしか捉えることができない。遺跡の主体が縄文晩期から弥生初頭であり、この時期の石核も特徴的であることから比較的容易に旧石器時代の石核と分類可能である。18・19のような円礫を主体とする縦長剥片石核が旧石器時代のものと思われる。石核前面の剥離痕・急傾斜打面という共通性をもち、背面は自然面に覆われる縦長剥片石核はこの2点のみである。打面調整をおこなうことでも共通している。20は横広の剥片を剥離した石核で、チョッパー状の形態をもつ。原石の用い方が18・19が長軸を剥離面とするが、3は短軸を作業面とすることに大きな相違がある。より横広な作業面を獲得するための行為がそこに表れている。目的とする石器としては台形石器が挙げられよう。21・22のような資料については即断出来ないが、大形の円形の剥片の主要剥離面を作業面とし、周辺から求心状に剥離していくことから、目的とする剥片は、小形の横長剥片で台形石器の素材となり得るものと思われる。ただし、旧石器時代の石核の中で明確な位置をもっていないことから旧石器時代のものとして即断はできない。



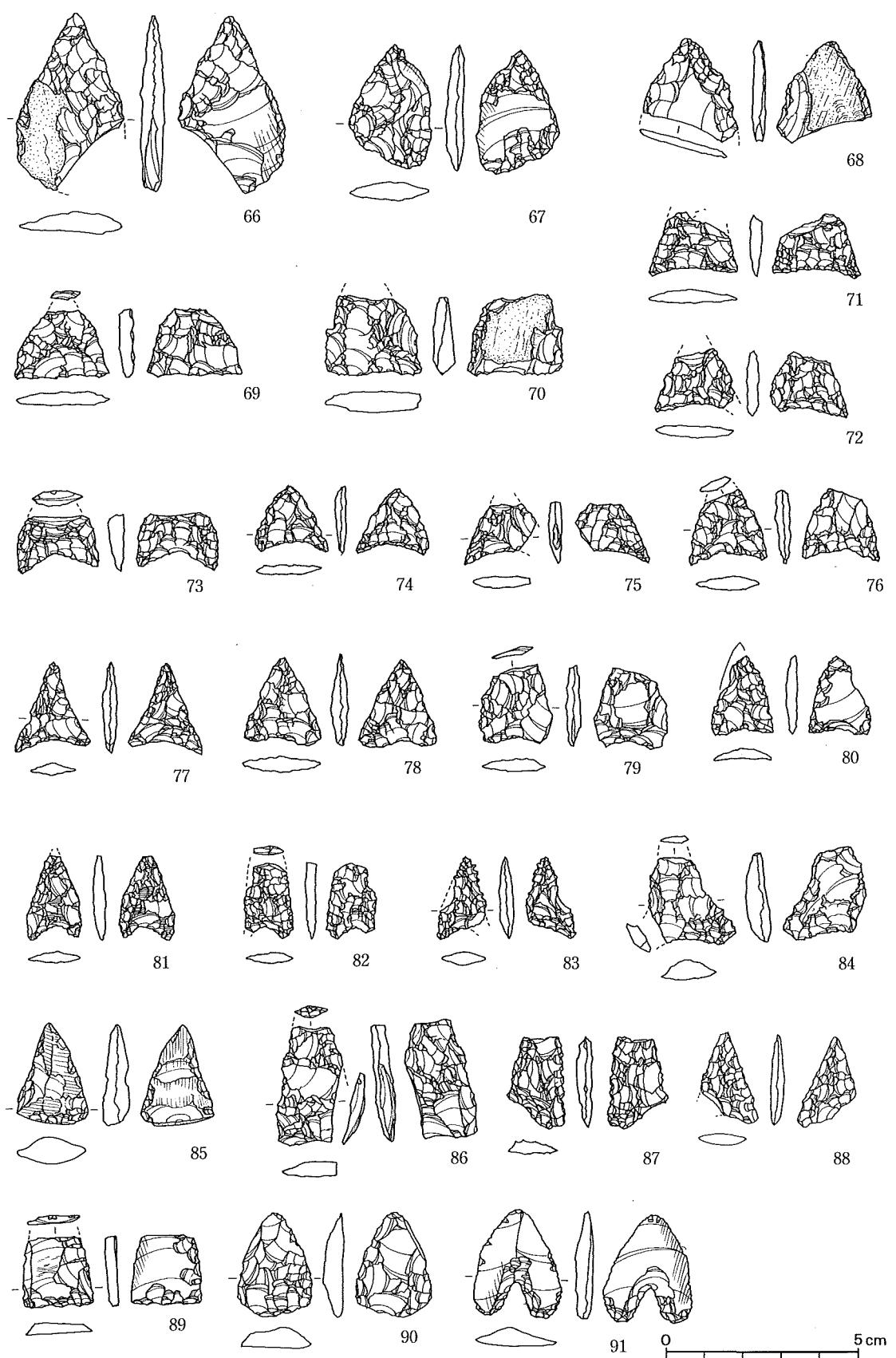
第32図 B地点の遺物—石器① (2/3)



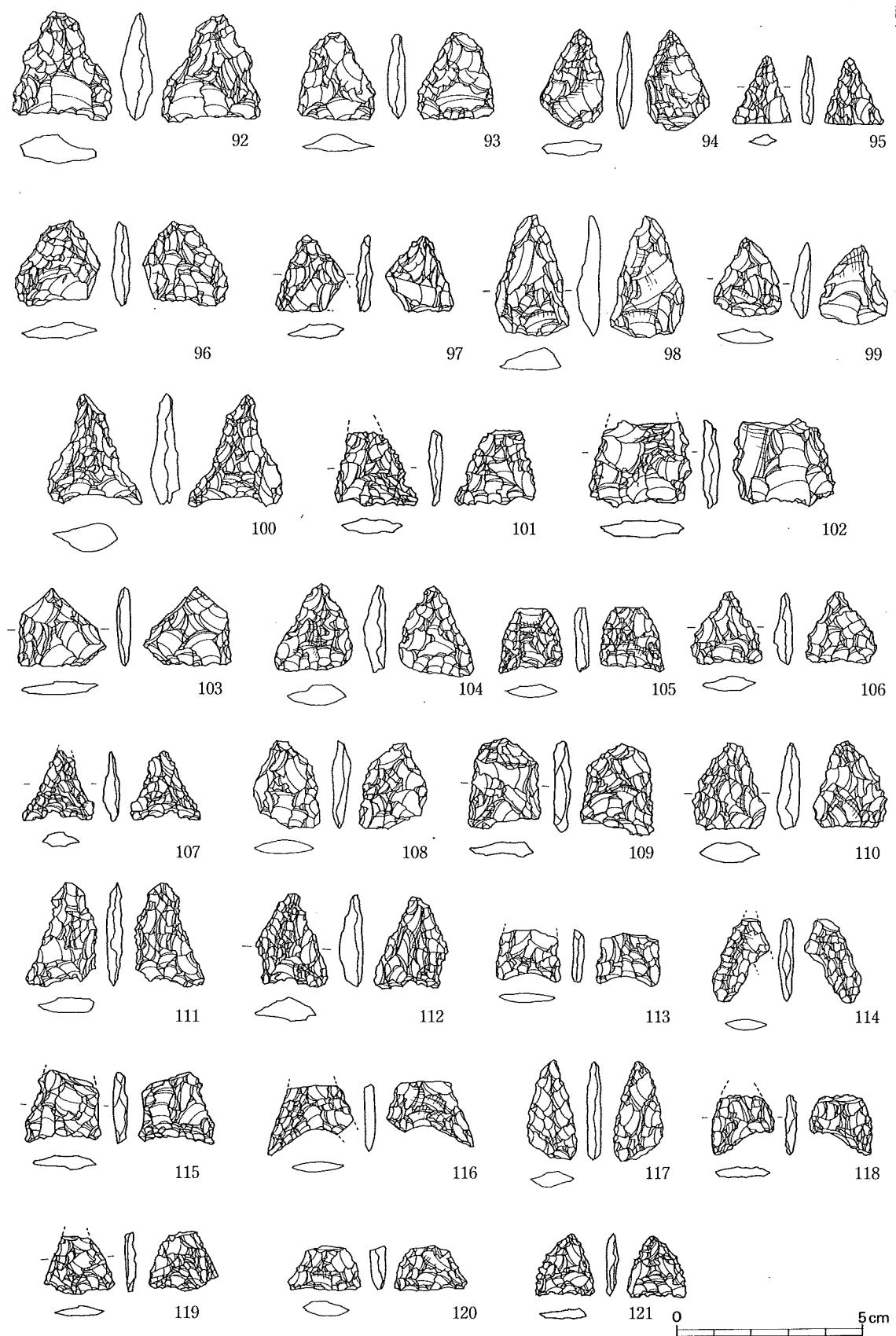
第33図 B地点の遺物—石器② (2/3)



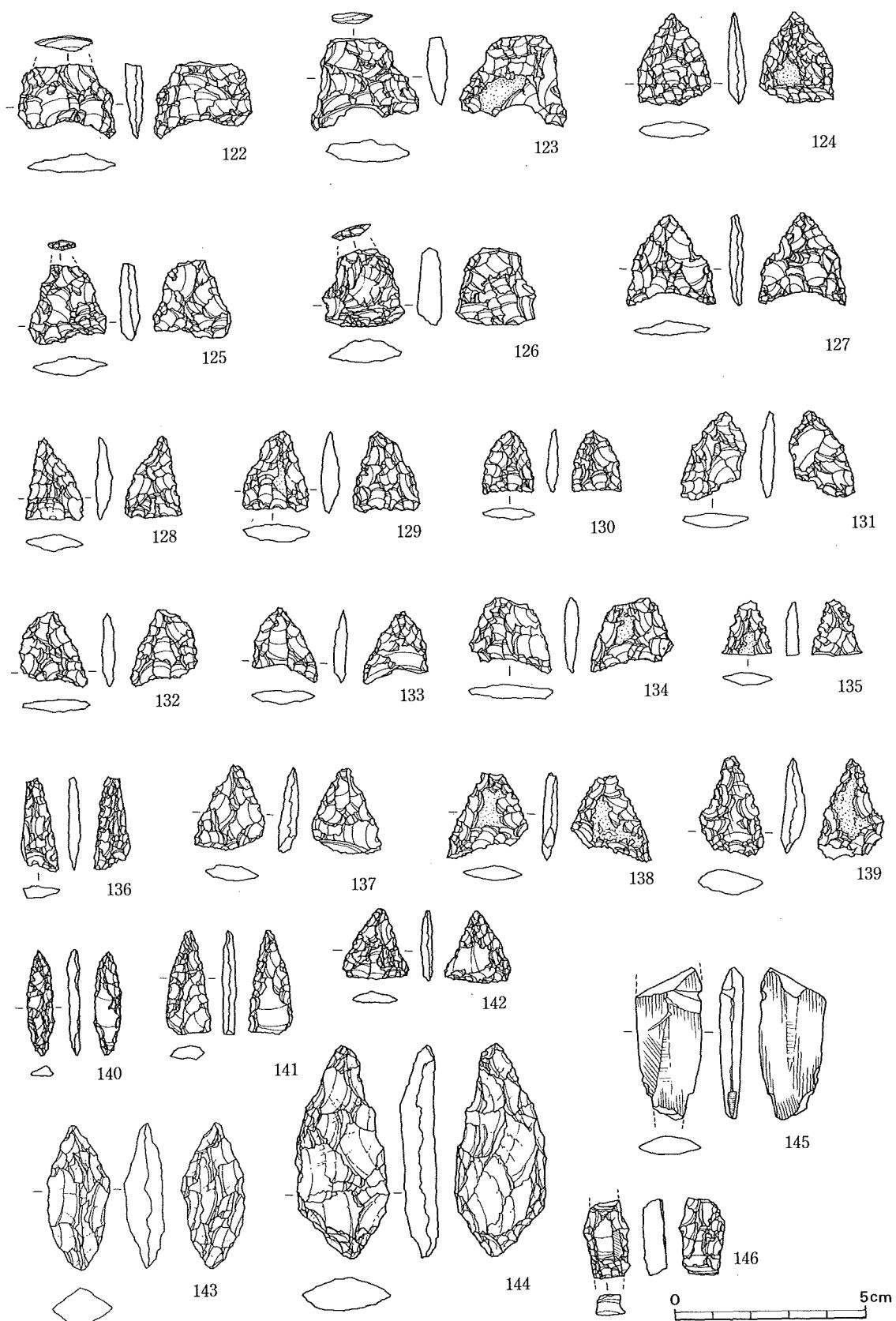
第34図 B地点の遺物—石器③ (2/3)



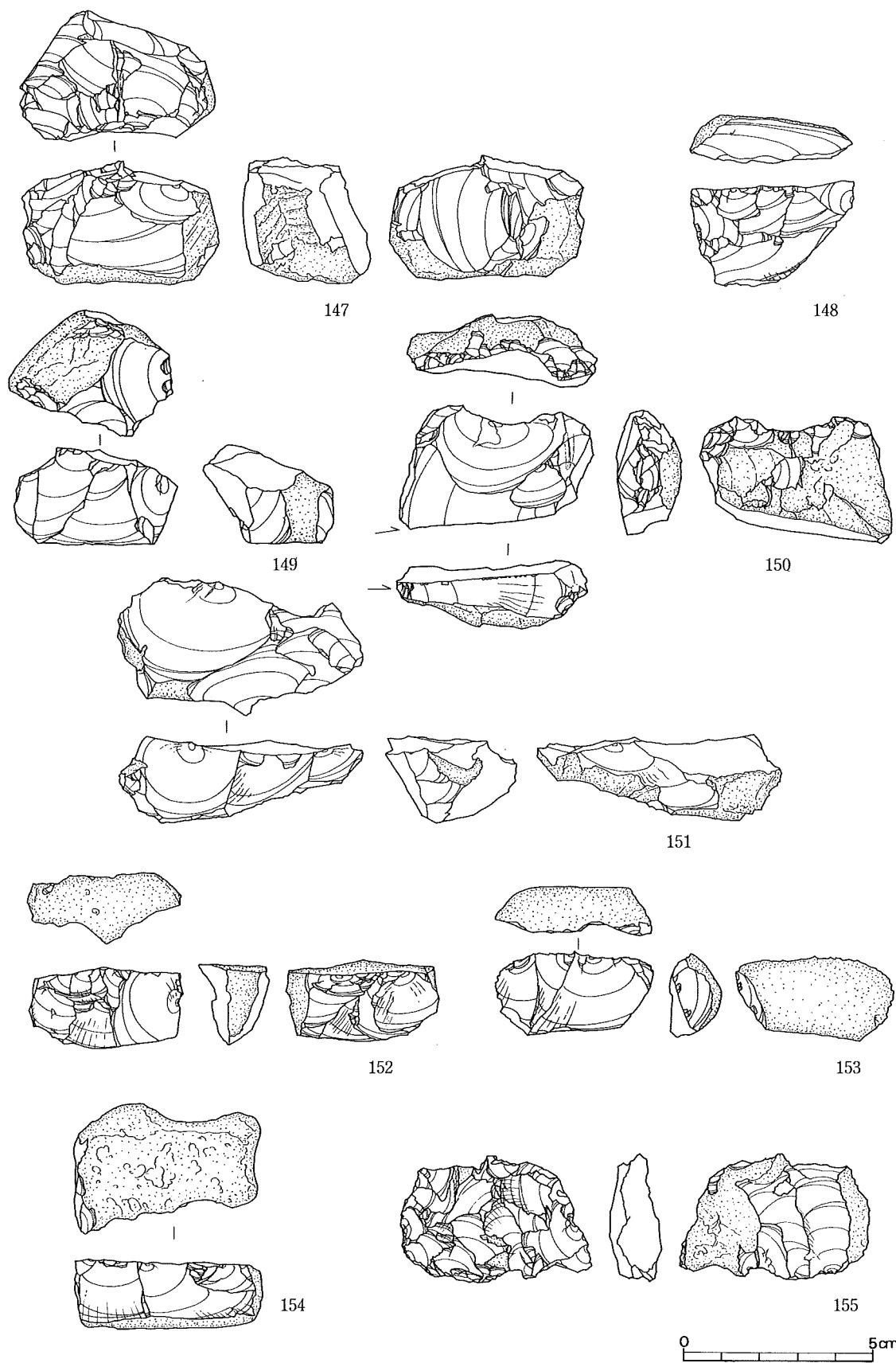
第35図 B地点の遺物—石器④ (2/3)



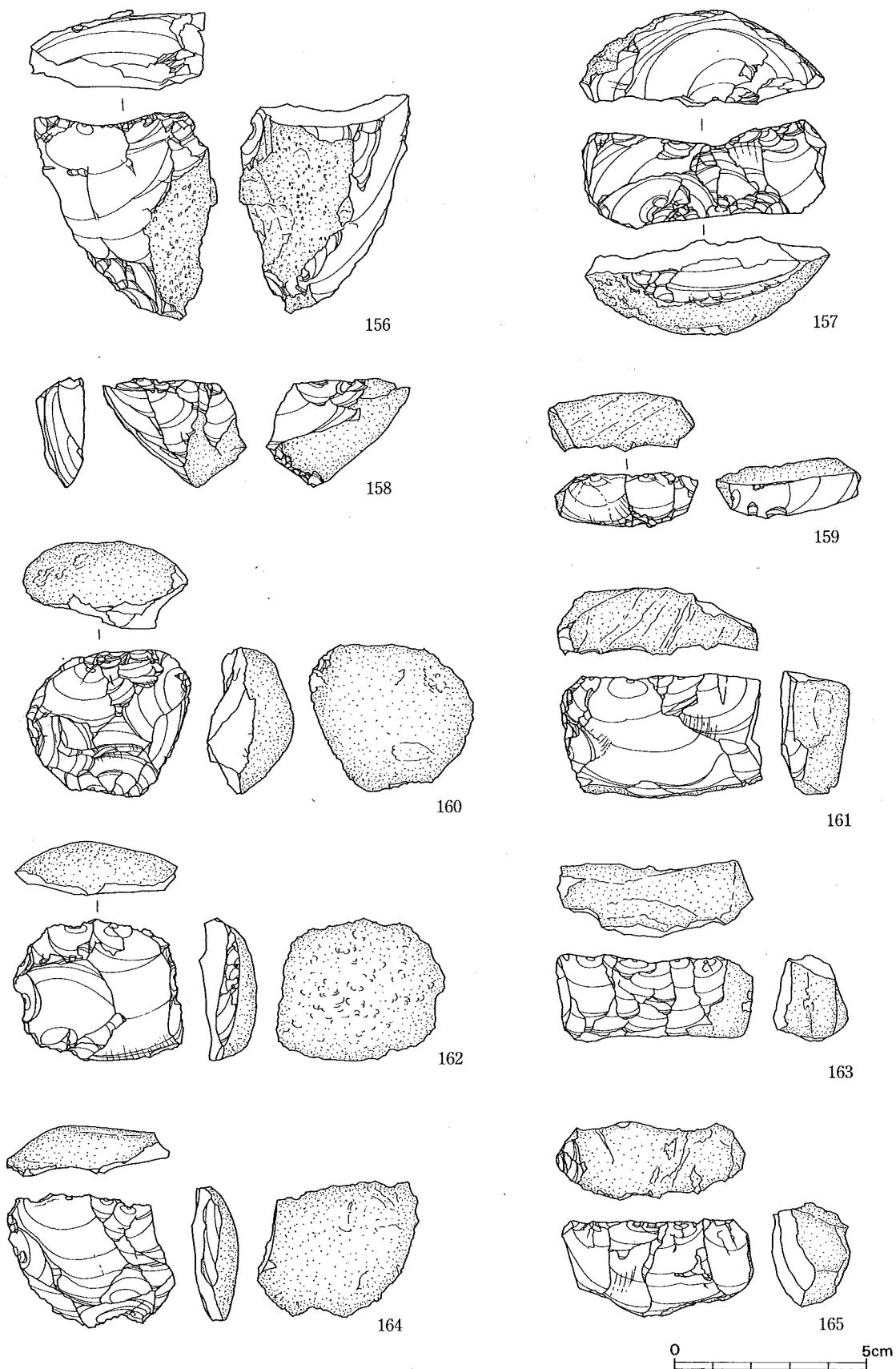
第36図 B地点の遺物—石器⑤ (2/3)



第37図 B地点の遺物—石器⑥ (2/3)



第38図 B地点の遺物—石器⑦ (2/3)



第39図 B地点の遺物—石器⑧ (2/3)

縄文時代～弥生時代の遺物

B地点の遺物は縄文時代の早期から弥生時代のものまでを含むが、個々の資料については所属時期を特定できる状況にはない。ただし、磨製鎌や剥片鎌などの遺物が含まれることから、縄文早期や後期にもこの地が生活の場として利用されていたことが理解される。

縄文晚期から弥生時代の石器は石鎌が主体で、その特徴として分厚いことや一つ一つの剥離が比較的大きいことがある。その中にあって弥生時代の磨製鎌が1点出土している（第37図-145）。先端部と基部を欠損しているが、器体全体の研磨は断面三角形を意識しており、基部の作り出し部もしっかりしている。この磨製鎌の出土や、弥生土器片の出土から、本遺跡の所属時期が弥生時代にまで下るとの結論がでた訳だが、主体的に活動をおこなっていたと考えるほどの遺物の出土はなく、B地点以外の場所にその主体部を求める必要があるとの結論に達した。

剥片・石核も多量に出土している。晩期の石核についてはサイクロ状の十郎川型石核が特徴的に出土するが、本遺跡ではこの十郎川型の石核以外に扁平な黒曜石の原石の一端に作業面を構成する石核が多量に出土している。また、分厚い剥片を折断し、その折断面を打面として剥離作業をおこなう石核なども同様出土している。

石斧3点が出土している。166・168は玄武岩を素材とし、全体に敲打整形をおこなったもので、刃部を欠損する。素材自体は軟質で質が悪い。167は硬質の玄武岩製の小型の片刃石斧である。全体を研磨することにより細身に仕上げている。これらの石斧は極めて弥生的で、今回は縄文的な磨製石斧の出土はみられなかった。

石錘は1点出土している。海岸部に近いという地理的条件にあるにもかかわらず、この手の漁撈に関連する遺物が少ないとすることはこの遺跡の大きな特徴と言わなければならないであろう。

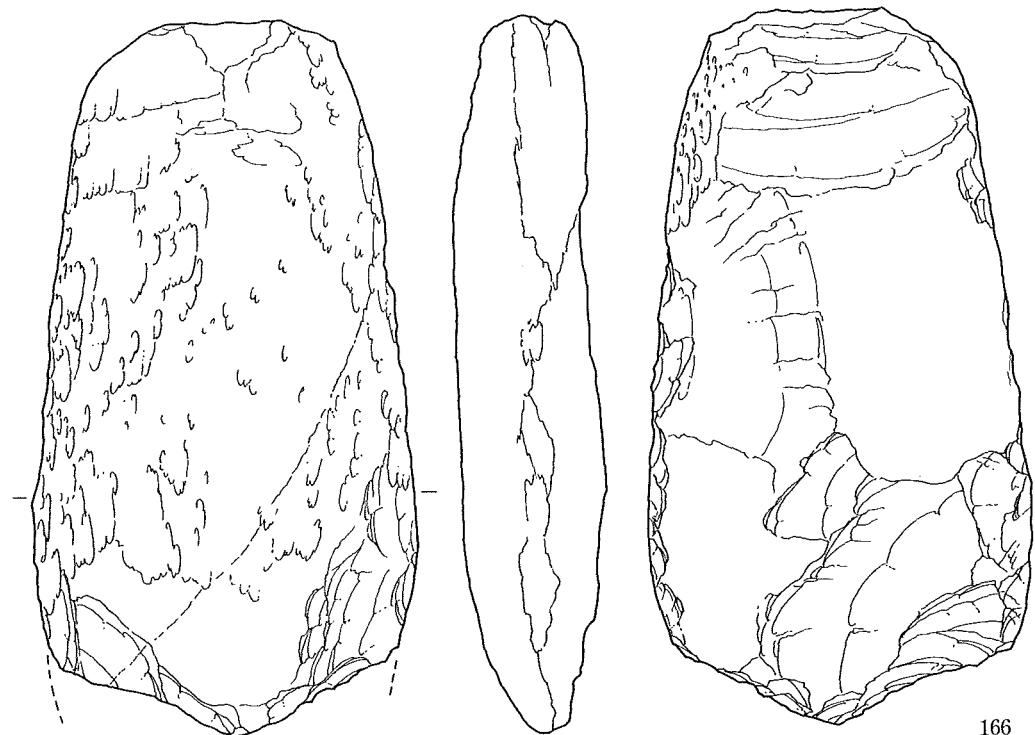
収穫用石器

玄武岩の板状剥片を使用し、片側に刃部を設けた石器が出土している。扁平打製石斧と同様の加工であるが、加工が一端のみに集中する点が相違する。

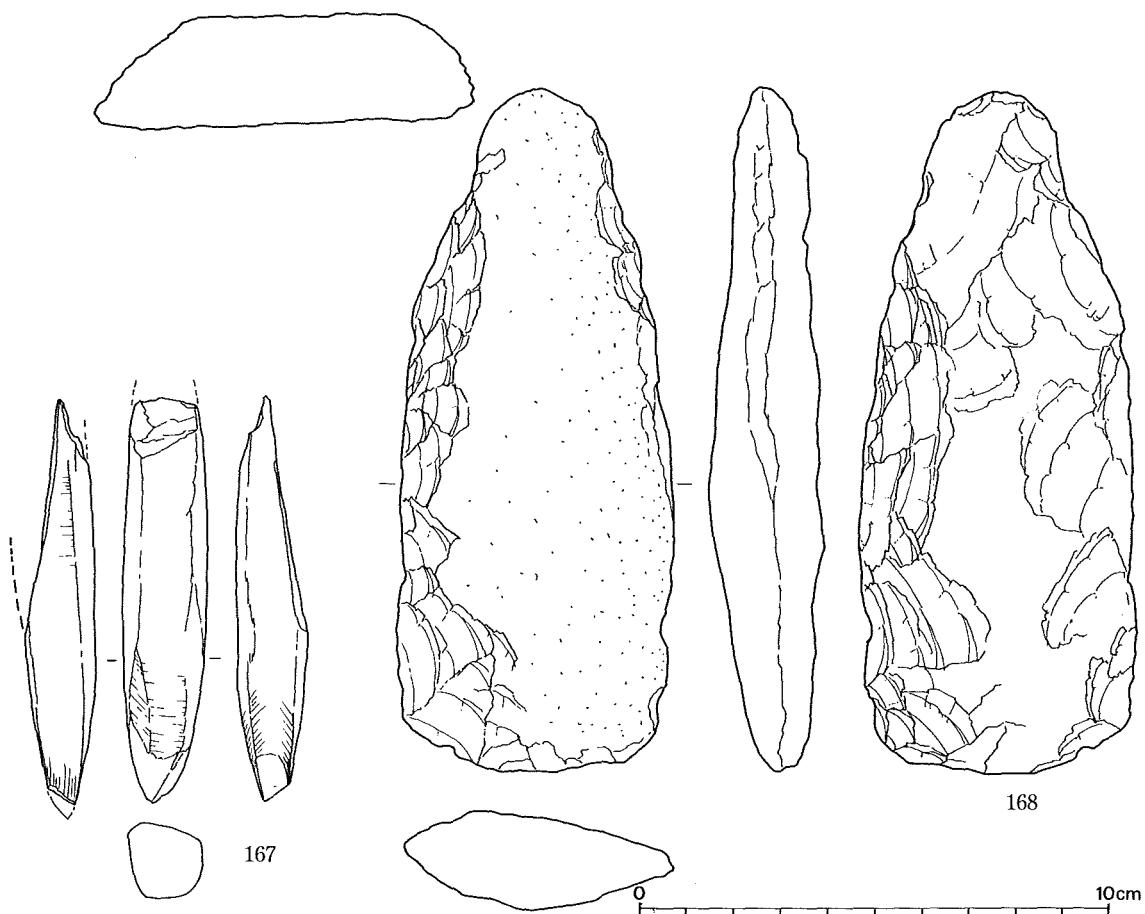
砥 石

ピット内出土のものである。粗い砂岩を素材としており、縦に数条の研磨痕が確認され、裏は面的に研磨痕が確認される。細い金属状のものを研磨したものと考えられ、他の晩期の遺跡で確認されるものに共通する。ピット内から出土したということに大きな意味がある。他のピットの出土遺物が石鎌を主体とし、狩猟に関連するものであるのに対し、砥石という加工工具を伴うピットということで本遺跡の中でも特筆される遺物・遺構である。

石器については、まとめの項で再度触れることにする。



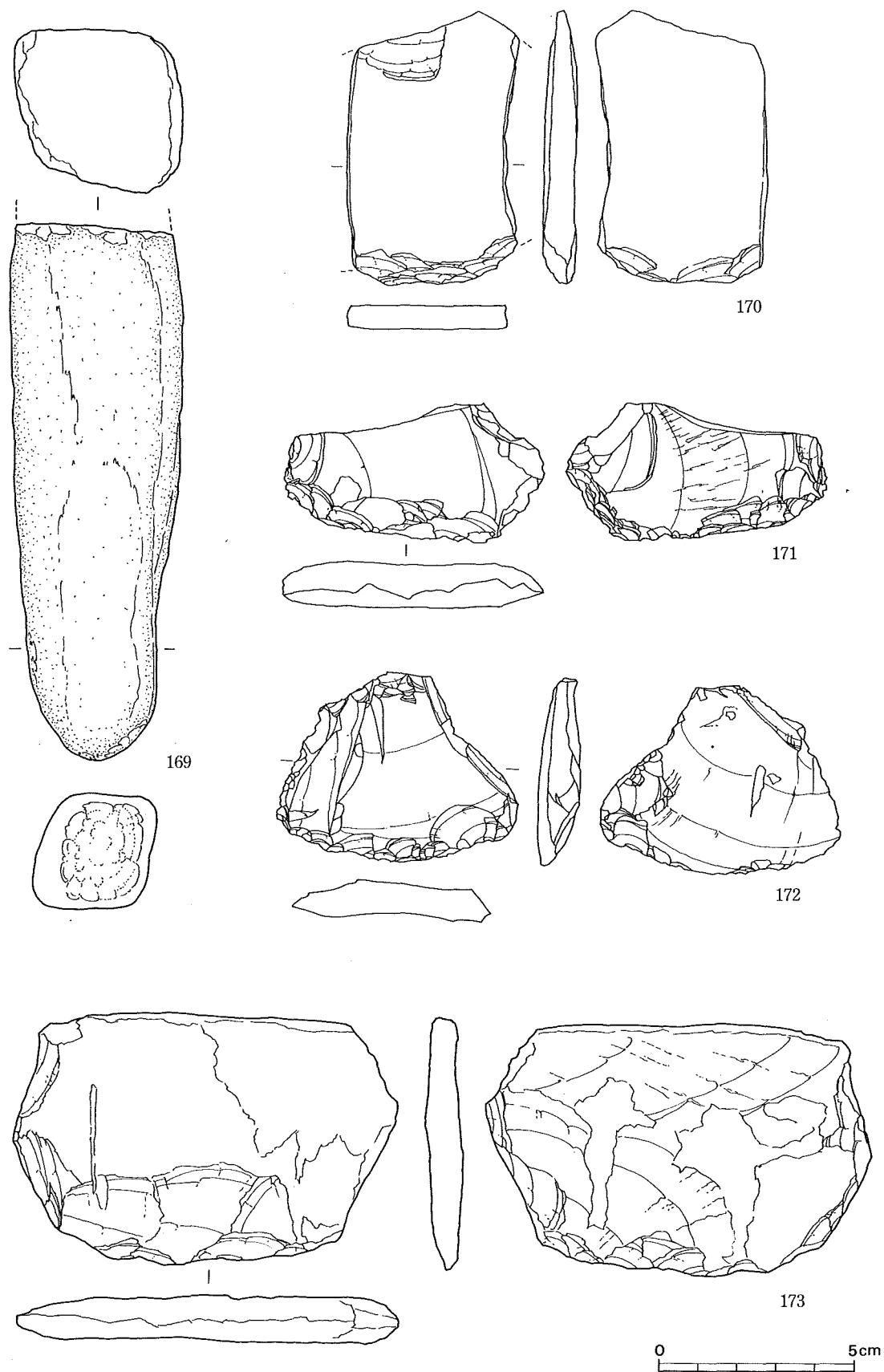
166



167

168

第40図 B地点の遺物—石器⑨ (2/3)



第41図 B地点の遺物—石器⑩ (2/3)

挿図番号	グリッド	層位	器種	重さ	長さ	幅	厚さ	挿図番号	グリッド	層位	器種	重さ	長さ	幅	厚さ
17-1	A c10	表土	ナイフ形石器	2.9	3.8	1.6	0.5	32-10	B r25	表土	台形石器	10.0	4.1	2.7	1.2
2	A b3	表土	スクレイバー	49.1	6.9	5.4	1.8	11	B h21	III	"	1.3	2.6	1.9	0.3
3	A c3	III	石核	24.4	2.6	4.4	2.6	12	B n·o16	表土	"	0.7	2.0	1.4	0.3
4	A b9	I'	台形石器	0.6	1.6	1.4	0.5	13	B j20·21	表土	"	1.9	2.1	2.7	0.6
5	A c8	表土	細石刃	0.1	2.1	0.6	0.2	14	B	表採	"	4.3	3.0	2.0	1.0
6	A b3	II	石槍	28.6	9.8	3.1	0.9	15	B t9·10	表土	"	2.0	2.8	2.2	0.5
7	A d8	I'	石鎌	1.1	3.8	(1.5)	0.4	16	B q15	I	スクレイバー	7.6	4.5	2.9	0.6
8	A b8	III	"	1.7	2.9	2.0	0.6	17	B i22	III	"	5.6	(2.1)	(3.6)	0.9
9	A b7	II	"	1.3	3.0	1.8	0.5	33-18	B o20	IV	石核	32.4	5.5	3.5	—
10	A d3	III	"	0.9	2.4	1.6	0.4	19	B e26	III	"	67.6	5.3	3.8	—
11	A b7	II	"	0.7	2.5	(1.5)	0.4	20	B i20·21	表土	"	59.2	4.4	6.4	—
12	A b12	表土	"	1.0	2.6	(1.5)	0.5	21	B g19	表土	"	59.5	4.5	7.4	—
13	A c8	II	"	0.5	1.6	1.4	0.3	22	B h21·22	表土	"	54.3	4.7	6.6	—
14	A c9	表土	"	0.4	1.6	(1.3)	0.4	34-23	B h23	III	石鎌	0.5	1.8	1.2	0.4
15	A d5	II	"	0.5	1.7	1.1	0.4	24	B i22	III	"	0.8	(2.0)	1.5	0.4
16	A f·g·h2·3	表土	"	1.1	2.2	1.4	0.5	25	B h22	III	"	0.9	2.2	1.6	0.4
17	A b3	表土	"	0.9	2.4	1.5	0.4	26	B i21	III	"	0.3	2.6	(1.2)	0.2
18	A e9	表土	"	0.4	1.6	1.6	0.3	27	B h23	III	"	0.2	2.4	(1.0)	0.2
19	A c10	表土	"	0.7	1.8	(1.3)	0.4	28	B h21·22	表土	"	0.4	(2.1)	(1.3)	0.2
18-20	A d5	II	"	1.0	1.9	2.2	0.4	29	B g22	III	"	0.3	(2.0)	(1.2)	0.2
21	A b12	表土	"	0.8	1.9	1.3	0.3	30	B h·i22	表土	"	0.1	(1.5)	(1.0)	0.2
22	A f·g·h2·3	表土	"	2.0	2.0	1.8	0.8	31	B g21	III	"	0.2	(1.0)	1.3	0.2
23	A b8	I'	"	0.9	2.0	1.5	0.4	32	B g19	II	"	0.3	(1.5)	1.3	0.2
24	A c4	表土	"	1.5	2.6	2.0	0.4	33	B g26	表土	"	0.2	(0.9)	1.3	0.2
25	A a10	表土	"	1.6	(2.0)	1.9	0.5	34	B i22	II	"	0.7	2.3	1.4	0.3
26	A f·g·h2·3	表土	"	0.7	2.1	1.2	0.3	35	B j22	表土	"	0.3	(1.8)	(1.4)	0.2
27	A d8	表土	"	0.4	(1.0)	2.0	0.3	36	B f25	表土	"	0.3	(1.5)	(1.3)	0.2
28	A d10	表土	"	0.9	(1.5)	1.9	0.3	37	B g25	表土	"	0.3	1.5	1.0	0.2
29	A b7	II	"	0.4	1.9	1.5	0.3	38	B		"	0.2	1.8	(1.0)	0.3
30	A d10	表土	"	0.8	1.9	1.6	0.3	39	B g21	III	"	0.3	(1.0)	1.3	0.3
31	A b10	表土	"	0.9	2.0	1.9	0.4	40	B g20	表土	"	0.2	(1.2)	1.2	0.3
32	A d6	表土	"	0.5	(2.5)	(1.5)	0.3	41	B i26	表土	"	0.5	1.5	1.1	0.3
33	A d7	表土	"	6.5	3.2	2.2	0.8	42	B g17·18·19	III	"	0.3	1.6	1.0	0.3
34	A d4	表土	"	4.3	2.8	2.3	0.8	43	B h19	表土	"	0.3	1.6	1.2	0.2
35	A c3	III	石核	6.1	3.1	2.4	0.9	44	B i21	III	"	0.4	1.7	1.3	0.3
36	A b7	II	石鎌	7.6	3.3	2.6	1.1	45	B d·e25	表土	"	0.3	(1.0)	1.4	0.3
37	A b6	表土	"	3.0	3.6	2.0	0.5	46	B d9	I'	"	0.3	1.4	1.4	0.3
38	A e6	II	石核	6.8	2.2	4.9	1.3	47	B g26	表土	"	0.6	(1.5)	(1.3)	0.4
39	A g5	表土	石鎌	2.7	2.0	1.8	0.4	48	B h22	表土	"	0.2	(1.3)	0.8	0.2
40	A d9	II	"	4.4	2.9	2.5	0.7	49	B g21		"	0.2	(1.1)	(0.8)	0.3
41	A d5	II	石核	14.2	2.2	3.1	1.9	50	B g14	表土	"	1.9	4.2	(1.7)	0.5
42	A d3	表土	石錐	3.1	3.1	2.3	0.7	51	B q8	III	"	1.5	(2.5)	2.0	0.5
43	A f·g·h2·3	表土	"	0.7	2.0	1.2	0.4	52	B h·i	表土	"	1.0	2.3	1.7	0.5
19-44	A f6	表土	石斧		9.6	7.2	2.5	53	B h22		"	0.8	2.5	1.6	0.4
45	A c3	III	敲石	580.0	11.0	8.9	3.8	54	B p·q7	III	"	1.0	(2.6)	(1.8)	0.4
46	A d3	表土	石錐		9.3	11.6	3.5	55	B h22		"	1.5	(3.1)	(1.5)	0.5
32-1	B m20	表土	ナイフ形石器	2.0	(4.3)	1.3	0.5	56	B g21	III	"	1.0	2.7	1.6	0.4
2	B t9·10	表土	"	5.8	4.4	2.1	1.2	57	B i21	III	"	1.2	2.1	1.9	0.4
3	B s5	表土	"	3.2	(2.9)	1.6	0.7	58	B h18		"	0.2	1.8	(0.8)	0.3
4	B o20	III	"	2.1	2.9	2.0	0.5	59	B i21	III~IV	"	1.0	(1.8)	2.0	0.3
5	B j21·22	表土	"	1.4	2.7	1.3	0.4	60	B i22	III	"	0.3	1.8	1.3	0.3
6	B k21	表土	"	1.7	2.8	1.4	0.5	61	B e25	表土	"	0.6	2.0	(1.1)	0.5
7	B m19	III	"	1.7	3.3	1.5	0.5	62	B g18·19	表土	"	0.4	(1.6)	(1.2)	0.3
8	B i19·20	表土	"	1.6	2.9	1.4	0.6	63	B h19	III	"	0.4	1.7	1.3	0.3
9	B u9·10	表土	台形石器	1.6	2.2	2.0	0.6	64	B g21	表土	"	0.5	1.9	1.6	0.3

表4 出土石器観察表①

挿図番号	グリッド	層位	器種	重さ	長さ	幅	厚さ	挿図番号	グリッド	層位	器種	重さ	長さ	幅	厚さ
34-65	B i18・19	表土	石鏃	0.8	2.1	1.6	0.4	36-120	B i23	II	石鏃	0.9	(1.2)	2.0	0.4
35-66	B h21	III	"	5.6	4.7	(2.8)	0.6	121	B g18・19	表土	"	0.6	1.6	1.6	0.3
67	B i26	IV	"	2.4	3.3	2.2	0.5	37-122	B i20	III	"	1.9	(2.0)	2.6	0.5
68	B e・f	表土	"	1.5	(2.7)	2.5	0.4	123	B h20	III	"	3.0	(2.4)	2.8	0.6
69	B f19	III	"	1.7	(1.8)	2.5	0.4	124	B f17・18	III	"	1.7	2.5	2.4	0.4
70	B e・f	表土	"	3.1	(2.2)	2.6	0.6	125	B h・g19	表土	"	1.7	(2.1)	2.1	0.5
71	B h22	表土	"	0.9	(1.7)	2.3	0.4	126	B k21	表土	"	2.5	(2.1)	2.2	0.8
72	B g26	表土	"	0.9	(1.7)	(2.1)	0.3	127	B i23	III	"	1.5	2.4	2.4	0.4
73	B i21	III	"	1.1	(1.5)	2.2	0.4	128	B i20		"	1.1	2.2	1.5	0.5
74	B k21	表土	"	0.6	1.8	1.9	0.3	129	B i18・19	表土	"	1.5	2.2	1.8	0.5
75	B k21	表土	"	0.8	(1.6)	(1.9)	0.3	130	B g17・18・19	III	"	0.5	(1.7)	1.4	0.3
76	B e23	表土	"	1.1	(2.0)	2.1	0.4	131	B		"	1.2	2.4	(1.7)	0.4
77	B h19	表土	"	0.8	2.4	2.0	0.3	132	B h20・21	表土	"	1.0	(2.0)	(1.8)	0.4
78	B g20・21	表土	"	1.2	2.3	2.0	0.4	133	B h20	III	"	0.9	(2.0)	(1.8)	0.4
79	B g26	表土	"	1.2	(2.1)	2.0	0.4	134	B i20・21	表土	"	1.3	(2.0)	2.2	0.4
80	B h23	IV	"	0.7	(2.1)	1.6	0.3	135	B p・q5	表土	"	0.6	(1.5)	(1.3)	0.3
81	B h22	III	"	0.7	(2.2)	1.5	0.3	136	B g・h23	表土	"	0.7	(2.5)	(1.0)	0.4
82	B o20	III	"	0.8	(2.0)	(1.3)	0.3	137	B i21・22	II	"	1.6	(2.3)	(1.9)	0.4
83	B j22	II	"	0.6	2.2	(1.3)	0.3	138	B g22		"	1.4	(2.3)	(2.1)	0.4
84	B i26	IV	"	2.3	(2.4)	(2.3)	0.5	139	B h18・19	表土	"	2.1	2.7	1.7	0.7
85	B i22	II	"	2.6	2.7	1.9	0.7	140	B h23	IV	"	0.5	2.8	0.8	0.3
86	B h20	III	"	2.5	(3.1)	(1.8)	0.4	141	B g22	III	"	0.9	2.8	1.2	0.4
87	B i23	II	"	1.4	(2.4)	(1.5)	0.4	142	B i22	II	"	0.7	1.9	1.8	0.3
88	B g20	II	"	0.8	2.4	(1.6)	0.3	143	B i23	II	石槍	5.2	3.8	1.7	1.0
89	B h19	III	"	1.2	(1.8)	1.9	0.3	144	B i22	II	"	12.5	5.7	2.5	0.9
90	B g25	表土	"	2.1	2.8	2.0	0.5	145	B	表採	磨製石鏃	3.9	(4.1)	1.7	0.5
91	B m19	III	"	1.9	2.8	2.4	0.5	146	B f・g25	表土	石錐	1.7	(2.1)	1.2	0.6
36-92	B i23	II	"	4.5	2.9	2.7	0.8	38-147	B f26	IV	石核	63.1	3.3	5.2	—
93	B h21	III	"	1.8	2.3	2.1	0.5	148	B h22	IV	"	13.9	2.8	4.2	—
94	B h22	II	"	1.5	2.7	(1.7)	0.4	149	B pit23		"	29.9	2.6	4.3	—
95	B j20	II	"	0.6	(1.6)	(1.6)	0.3	150	B f17・18	III	"	23.6	3.3	5.1	—
96	B i26	表土	"	2.1	2.3	(2.3)	0.5	151	B g26	表土	"	31.5	2.3	6.4	—
97	B g18・19	表土	"	1.2	2.0	(1.9)	0.4	152	B pit4		"	10.9	2.1	4.0	—
98	B i26	表土	"	2.8	3.2	2.0	0.6	153	B g26	表土	"	9.9	2.3	4.2	—
99	B h20	表土	"	1.1	2.1	1.8	0.4	154	B pit13		"	35.5	1.9	4.9	—
100	B h22	II	"	2.6	3.0	2.5	0.8	155	B pit23		"	14.7	3.4	4.9	—
101	B j25	表土	"	1.3	(2.0)	(2.2)	0.4	39-156	B h22	III	"	39.5	5.5	4.6	—
102	B j23	表土	"	3.3	(2.4)	2.7	0.4	157	B pit80		"	34.9	2.7	6.3	—
103	B i23	II	"	1.6	(2.1)	(2.4)	0.4	158	B pit4		"	7.6		—	—
104	B h23	表土	"	1.9	2.4	2.1	0.6	159	B pit80		"	6.1	1.5	3.7	—
105	B f25	表土	"	1.0	(1.7)	1.7	0.4	160	B h22	III	"	29.8	3.8	4.2	—
106	B i19	表土	"	0.8	2.0	2.0	0.4	161	B h22	III	"	31.1	3.2	5.2	—
107	B h20	表土	"	0.8	1.9	1.4	0.4	162	B h19	III	"	29.8	3.7	4.4	—
108	B h18	表土	"	1.5	2.3	1.8	0.4	163	B i21・22	表土	"	24.3	2.3	5.1	—
109	B g26	表土	"	2.2	(2.4)	1.9	0.4	164	B h23	III	"	14.8	3.5	4.2	—
110	B j22	表土	"	2.4	(2.3)	(2.0)	0.6	165	B g25	III	"	23.2	2.6	4.9	—
111	B g26	表土	"	1.7	2.8	(1.9)	0.4	40-166	B	表採	石斧	520.0	(15.4)	8.3	2.4
112	B i21	表土	"	2.1	2.5	(2.0)	0.6	167	B j23	表土	"	31.5	(8.7)	1.9	1.6
113	B g20	表土	"	0.7	(1.4)	1.7	0.3	168	B j23	表土	"	230.9	14.8	6.0	2.2
114	B i23	II	"	0.8	(2.2)	(1.5)	0.3	169	B h20・21	表土	敲石	362.2	13.9	4.5	
115	B g26	表土	"	1.6	(1.9)	2.0	0.4	170	B i21	III~IV	搔器	33.2	7.1	(4.5)	0.7
116	B h21	III	"	0.7	(1.8)	(2.3)	0.3	171	B i24	表土	"	35.5	3.6	6.8	1.2
117	B g20	II	"	1.3	2.7	(1.3)	0.4	172	B h23	表土	"	30.9	4.9	6.3	1.0
118	B g23	表土	"	0.7	(1.6)	1.7	0.3	173	B p・q7	III	"	97.2	6.5	10.0	1.2
119	B f26	表土	"	0.6	(1.6)	1.9	0.3								

表5 出土石器観察表②

第4章 まとめ

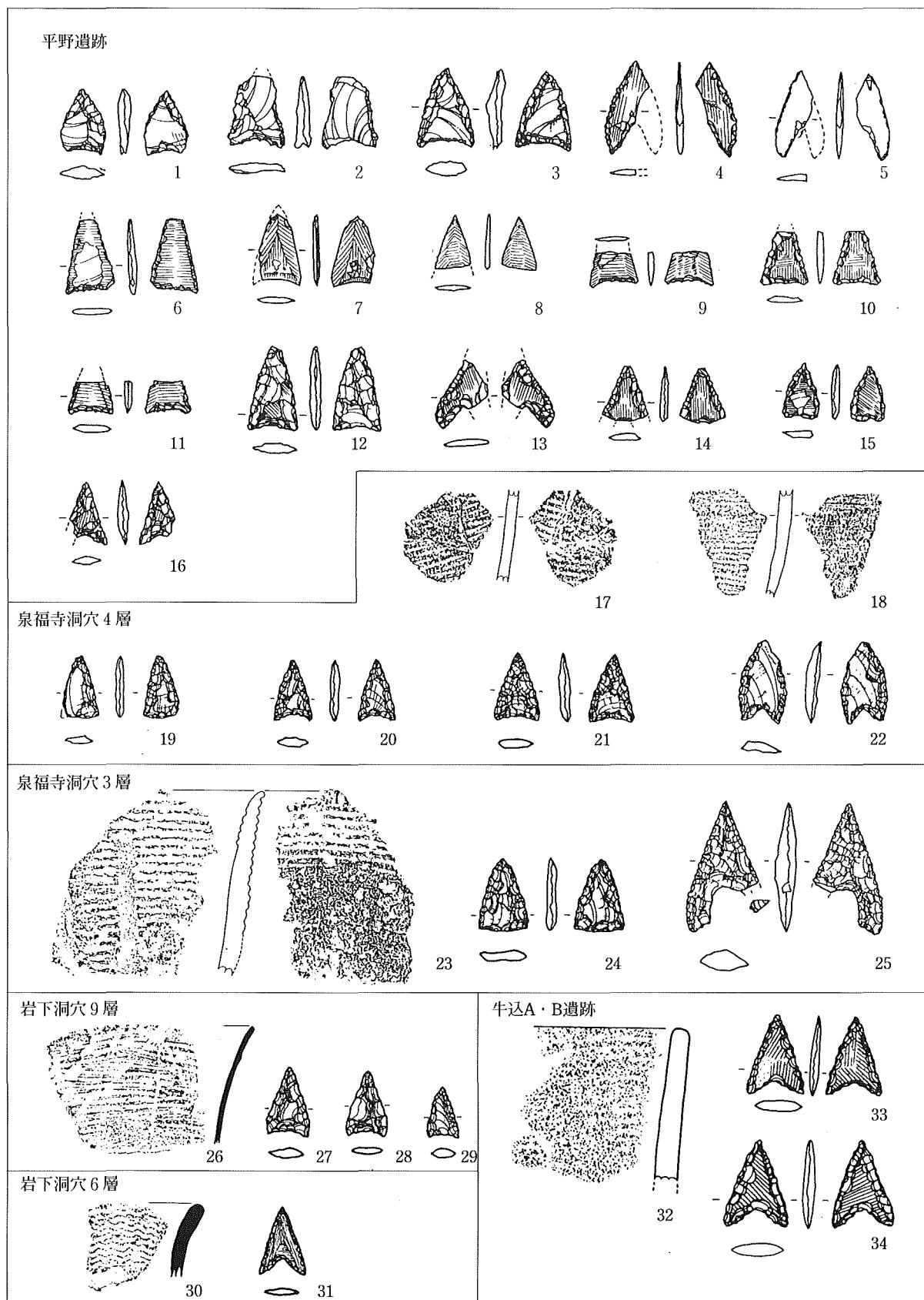
〈縄文時代早期小型石鏃の時期〉

今回の調査で特に注目したのは、黒曜石製品のうち、膨大な量の剥片の出土に混じって確認した石鏃の多様さとその数量である。前述したように、平野遺跡の指標になる土器は、B地点において縄文晩期とされる刻目突帶文土器が数点、遺構のピットを中心に出土しているのみである。その上層の、本来なら晩期単純層があるべき3層の遺物包含層に、後世の攪乱によって晩期にはみられない長軸2.0cm前後、底辺1.5cm前後の小型の石鏃が局部磨製石鏃とともに出土した。その石鏃は、黒曜石製の薄手の不定形剥片を素材とした小型で、概形が二等辺三角形状の平基あるいはやや凹基で、主要剥離面を大きく残し、周縁のみを調整剥離した石鏃である（第42図1～3）。仮に、便宜上周縁加工剥片鏃と呼称する。後期に隆盛した、縦長剥片を素材とした、両縁は調整剥離を施さず剥離そのものを生かして、脚部のみ抉り部調整をしたいわゆる剥片鏃とは違うタイプである。このタイプの石鏃は、ある一時期に限定されると考えられる。一方、早期に特徴的な局部磨製石鏃も数点出土している。12・13・16以外は全面研磨を施す。この2種類の石鏃は本遺跡では特徴的な遺物であるため、どの時期に位置付けることができるか、時期設定を試みた。長崎県では特に縄文時代の古い時期での土器と共に伴することが稀であるため、主に県内で土器資料が残る洞穴遺跡を参考にした。

細石器文化層から縄文晩期文化層までの遺物包含層を残す泉福寺洞穴では、草創期の5層押引文土器文化層中に周縁加工剥片鏃あるいは局部磨製石鏃は含まれず、4層条痕文土器文化層では周縁加工剥片鏃が主体となる。しかし、3層稲荷山式もしくは早水台式の押型文土器文化層では減少傾向である。一方局部磨製石鏃は、この二層にわたってわずかの出土である。佐世保市岩下洞穴では、周縁加工剥片鏃が局部磨製石鏃に先行して9層条痕文土器文化層から出現し、続いて局部磨製石鏃が8層押型文土器文化層から出土している。このことから、周縁加工剥片鏃が局部磨製石鏃に先行して、条痕文土器使用時期に使用されていたことが窺える。佐賀県伊万里市白蛇山岩陰遺跡では、9層押型文土器主体層から双方の石鏃が出土している。また、県内の洞穴遺跡以外の早期遺跡では、諫早市牛込A・B遺跡の円筒形条痕文土器に伴い局部磨製石鏃が、同市鷹野遺跡の円筒形条痕文土器や押型文土器とともに双方の石鏃がそれぞれ出土している。

このように、西北九州では少なくとも条痕文土器の時期には周縁加工剥片鏃が使用され、遅くとも押型文土器の早い段階で局部磨製石鏃が利用されていたと考えられる。よって、本遺跡から出土した2種類の早期小形石鏃の時期的位置は、周縁加工剥片鏃が円筒形条痕文土器段階から、局部磨製石鏃が条痕文土器段階から押型文土器の前半段階にかけて製作・使用され始めたものと考えられる。

しかし、良好な資料があまりにも少ないため結論付けるのは早計であり、課題も多い。①対象とした地域が狭い範囲であること、②鏃形鏃との関係を踏まえていないこと、③石鏃のみを対象としていること、④資料が少ないとこと、である。④は、前述したように土器と共に伴した資料が少ないとため、土器を含む資料の増加を期待するのみであるが、①～③は、資料とそれから得られるデータから石器中心の遺跡から年代を想定できる資料となるよう今後の筆者の課題としたい。



(1~16 平野遺跡, 17~22 泉福寺洞穴 4 層, 23~25 泉福寺洞穴 3 層, 26~29 岩下洞穴 9 層, 30・31 岩下洞穴 6 層, 32~34 牛込 A・B 遺跡)

第42図 早期小型石鏃と関連土器 (石鏃は2/3, 土器は1/3)

【参考文献】

- 麻生 優編1968『岩下洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会
麻生 優編1984『泉福寺洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会
副島和明他編1986『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第85集
福田一志他編1982「牛込A・B遺跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅱ』
水ノ江和同1998「九州における押型文土器の地域性」『九州の押型文土器—論攷編一』九州縄文研究会
森醇一郎編1974『白蛇山岩陰遺跡』佐賀県立博物館調査研究所第1集 伊万里市教育委員会
〈刻目突帯文土器について〉

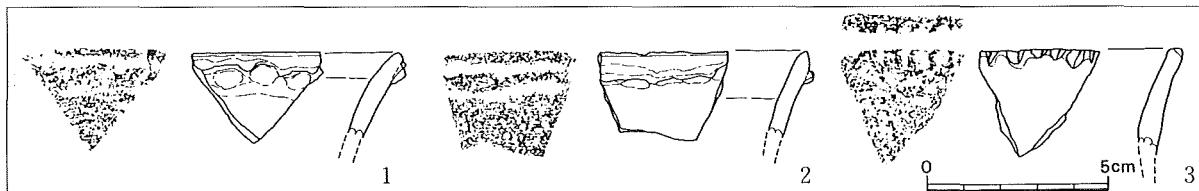
本遺跡では、数少ない土器の中で、刻目突帯文土器を主体に出土している。それらには、如意状口縁に直接刻目を施すものや「亀ノ甲タイプ」の刻目突帯文土器を含んでおらず、極めて縄文時代晩期末の様相を強く示している。その中でも特に、刻目突帯文土器の古いタイプのものが出土しているため、一言書いておこうと思う。層位で資料を整理することが不可能であったため、個々の遺物の特徴からのみの考察であることを了解いただきたい。

本遺跡出土の刻目突帯文土器の最古相に分類できるのが、下図の3点である。それぞれ、細い突帯に指頭を下方から押し当てて刻目を施したことによって原形を留めない突帯をもつもの（1・2）と、口唇を外側へ摘んで成形した後刻目を施しているもの（3）である。これらは、刻目突帯の形状により分類した田崎博之氏の甕II A系譜①種に相当し、また、中間研志氏のいう刻目凸帯文土器2類に対応するものと考えられる。

3点の遺物を対象としたため明言はできないが、刻目突帯文の形態から、これらの土器は山ノ寺式段階に位置付けられ、弥生時代まで下らないだろうと思われる。

資料が少なく、その他の資料との共伴関係や、層位的に押さえられなかっただために他の刻目突帯文土器との前後関係が把握できなかった。しかし、本遺跡における土器文化層を確認することができた。そのことによって、縄文時代も早期・晩期という時代分割ができ、また、石鏃の分類の助成になり、大きな成果を得られた。

西北九州、特に海路では北部九州周辺地域にあたる県北地区の縄文時代晩期後葉から弥生時代前期初頭の土器形式の一端を担うことができれば幸いである。



第43図 古相の刻目突帯文土器 (1/2)

【参考文献】

- 田崎博之1994「夜臼式土器から板付式土器へ」『牟田裕二君追悼論集』牟田裕二君追悼論集刊行会
中間研志編1995『甘木市所在 柿原I縄文遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告(37) 福岡県教育委員会

〈遺跡検出のピットと埋納された石鏃について〉

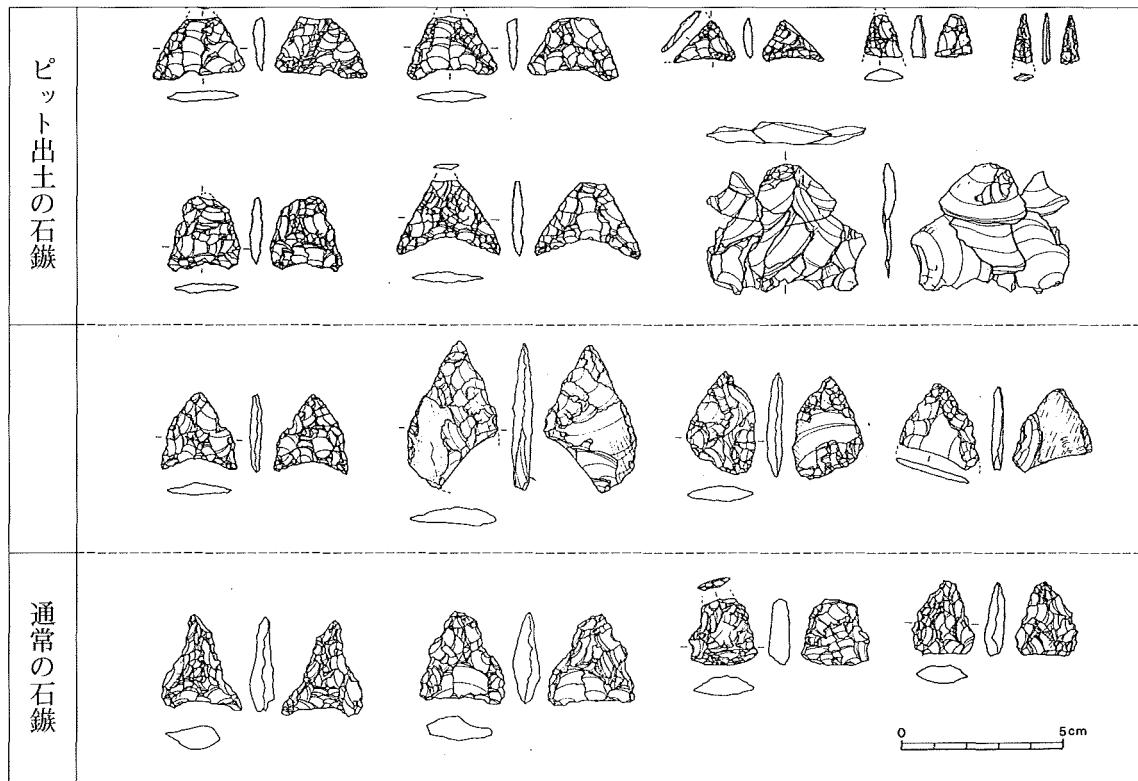
本遺跡の調査は調査区のほぼ全域から遺物が検出されたが、良好な遺物包含層はB地点の一部にのみに止まった。遺物全体から見れば、石鏃・剥片・石核類が多数を占め、生活址と考える以上に石鏃を製作する際の、剥片剥離を行う場としての機能をもったと捉えることが必要であるとの感を抱いた。数百点にも及ぶ石鏃の出土とそれ以外の石器の出土が希薄なため、石鏃を生産し、他に供給していたと考えるのが妥当であろう。縄文時代晚期の遺跡での石鏃の出土は、縄文時代のなかでも石器組成中に占める石鏃の数が少ないようと思える。一方、本遺跡や佐世保市の四反田遺跡のように石鏃を大量に生産している遺跡が存在するなど、石器が遺跡間で取引されていた可能性を示唆する状況にある。さて、本項では出土した石鏃の中でもピット出土の石鏃と石核の特徴を観察することにより、晚期終末から弥生初頭の石鏃と剥片剥離の一端を示していくことを目的とする。

ピットの性格について

本遺跡からはB地点の北側を中心にピット群が検出されている。ピットは89箇所検出されたがそのうちの73%は何らかの遺物が出土している。遺物の主体となるものは、小片ながら土器片や石鏃等であるが、通常のピット以上に遺物を含む点が大きな特徴である。このピット群における遺物の出土状況から、通常の柱穴的なものとは相違するものと考えなければならないとの結論に達した。以下、ピット内の遺物とその特徴を記す。

ピットから出土した遺物の組成を見ると、石鏃・石核・剥片・チップ・土器片で構成されるものを基本とし、その内のどれかが欠けるものとで構成されている。ピット82では、土器片と石鏃・石鏃先端部・剥片で構成され、剥片・チップ類が513点出土している。剥片どうしの接合関係も見られる。ピット4でも石鏃3点、石核4点、剥片チップ類が309点、土器の小片38点が出土している。この状況は他のピットも同様で、特に剥片・チップ類の出土が多いのが最大の特徴である。ピット82の状況で見る限り、石鏃の製作後に製作に関わった剥片・チップと製品（石鏃）・土器を一括埋納したとしか考えられない状況にある。いわゆるデボの状況とは異質なものと考えられ、その行為そのものに精神的なもの、祭祀的なものを考える必要がある。通常、縄文時代にはデボという、埋納行為が知られるが、デボはあくまで「隠匿・保管・貯蔵を目的」とするもので「再び掘り出すことを前提とする」（松藤、2000）ことであり、デボの行為と区別する必要があろう。つまり、本遺跡の埋納行為は、掘り出す必要がない剥片・チップ等が多数埋納されるからである。土器片が出土することから土壙墓としても考えることができるが、このような行為について現在知るかぎりでは筆者の管見に触れない。ただし、製品・剥片・チップという生産上、回帰的なものの集まりから、再生を願う行為であることも考えた場合、死者の再生を願う行為とも考えられよう。いずれにせよ、ひじょうに祭祀的行為を行った結果がこのピット群に表れているものと考える。本遺跡を石鏃生産の場と位置づけたとき、石鏃生産行為に対する儀式と考えることもできよう。現在の状況では単なる想像の域を出ない。今後、このような事例を他に探すこと一つの課題としておこうと思う。

ピット出土の石鏃の特徴



第44図 本遺跡出土の石鎌

ピット出土の石鎌の特徴として、薄身であること、比較的大型で形が整っていることがある。形態的には、脚部の幅が広く基部が直線的なものと、やや抉りを入れるものとに分類することができる。調整をみると、個々の剥離痕が器体中央部にまで達しており、器体を薄くすることを主眼としていることがわかる。非常に薄く、形態が正三角形状であることから、尖鋭さに欠ける。このような石鎌は包含層出土のものにも散見されるが、非機能的であると考える。この他ピット出土の石鎌は、一連の製作過程そのものをピット内に埋納したにもかかわらず、先端部や脚部を欠損したものが多い。このことは、先のピットの性格にも関わることかも知れない。

ピット出土の石鎌と本遺跡での通常の石鎌との比較をおこなうと、第図44でみるように本遺跡出土の通常の石鎌は分厚く、剥離そのものも雑な感がある。県下の縄文晩期の石鎌はやや大型で、雑な造りのものが多いことと同じ特徴を備えており、ピット出土の石鎌の特異性が顕著であるということがいえよう。

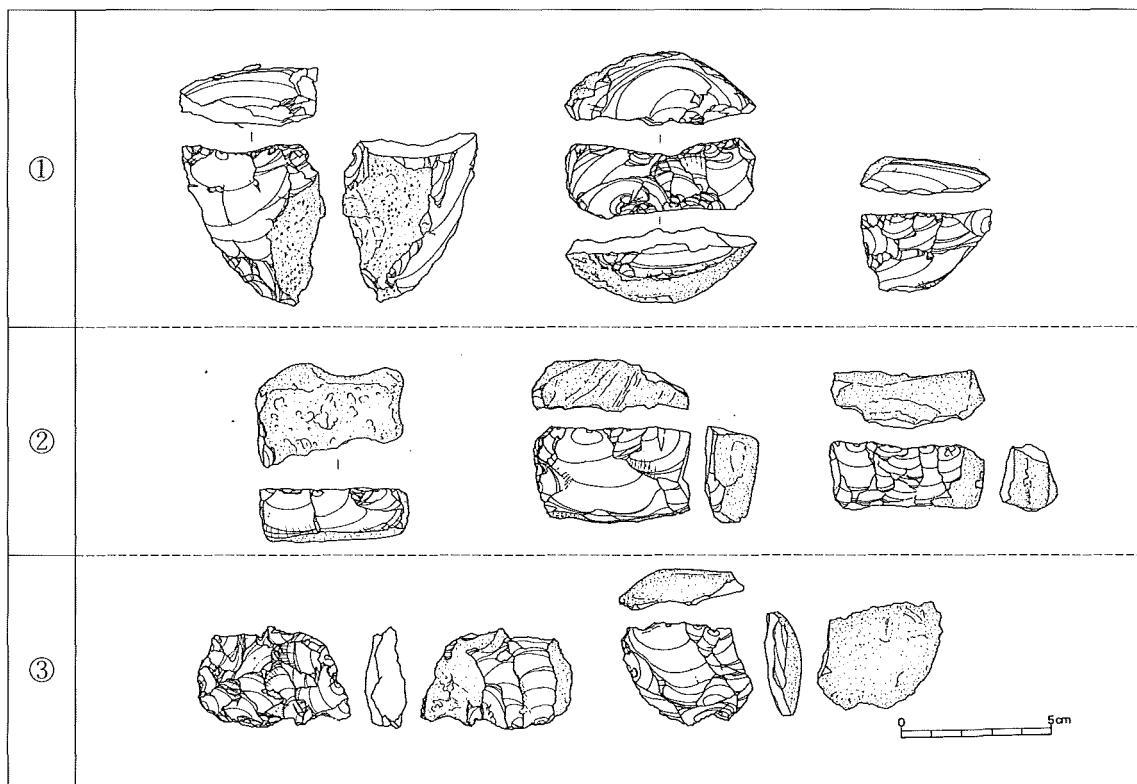
〈剥片剥離技術〉

本遺跡からは石核が多数出土しており、本遺跡の剥片剥離技術の一端を示す内容となっている。通常縄文晩期の剥片剥離技術については、橋が指摘した十郎川型剥片剥離技術が一般的である。十郎川型剥片剥離をおこなう十郎川型石核は通常、サイコロ状の多角形を呈し、剥離面も小さい。剥離面から推定すると、有効な剥片が剥離されたのか疑問を持つような石核が多い。ただし、石核のあることは間違いない、出土する石核が残核であることを考えれば目的的剥片の剥離も可能であったものと思われる。本遺跡でもこの十郎川型石核は出土しているが、本遺跡出土のものは十郎川型石核とは相違することから、剥片剥離技術について触れてみる。図-45の石核からいえることは

自然面を多く残すことがある。剥離方法には次の①～③がある。①は、板状の黒曜石を素材とし、木口幅の広い部分を作業面とするもので、素材の板状の黒曜石の厚みに剥片の長さが規定され、小型の剥片が剥離されることになる。②は板状の黒曜石を折断し、折断面を打面として剥離をおこなうものである。③は球心状に剥離するものである。いずれのものも打面は自然打面か平坦打面で、縦長剥片を剥ぐというには不適当なものである。これは先述した十郎川型石核にも共通するものであるが、縄文時代の剥片剥離技術が多様なものであったことを示唆するものであろう。この中でも②の折断面を打面として剥離をおこなって行く石核については、縄文早期の福岡県柏原遺跡で出土し（小畠1983），このタイプのものに対し、柏原型石核の名称が与えられていた。ただし、長崎県伊木力遺跡の轟bの単純層でもこの手の石核が出土し、今回縄文晩期から弥生時代の遺跡である本遺跡でも出土していることから、縄文早期に限らず縄文時代を通して普遍的に存在する剥片剥離技術である可能性が高いと思われる。西北九州の縄文時代の剥片剥離技術については、早期の柏原型石核・後期の鈴桶技法・晩期の十郎川型石核以外は然したる研究はなされておらず、それら以外の剥片剥離の研究と先の剥片剥離技術が普遍的に存在するのかどうかについても今後の課題となろう。

【参考文献】

- 橋 昌信1984「縄文晩期の石器—西北九州における縄文時代の石器研究（六）一」『考古学論叢』
 小畠弘己1983「2. 剥片剥離と石鏃の分析」『柏原遺跡群Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第90集
 松藤和人編2000『旧石器考古学辞典』旧石器文化談話会 学生社



第45図 石核形態

長崎県・平野遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 平野遺跡における放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	ピット内出土	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析(AMS)法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	測定No. Beta-
No.1	2500 ± 40	-26.8	2470 ± 40	交点: cal BC750, 700, 540 1σ : cal BC770~500, 460~430 2σ : cal BC780~410	150402

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は国際的慣例に従い5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより算出した年代(西暦)。補正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により作成された補正曲線を使用した。最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3))により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。 1σ (68%確率)・ 2σ (95%確率)は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

II. 平野遺跡における花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

試料は、Ⅲ層～V層から採取されたA～Eの5点である。

3. 方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトトリス処理を施す
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。

4. 結果と考察

分析の結果、花粉・胞子はいずれの試料からも検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、乾燥的な堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

文献

- 中村純（1973）花粉分析. 古今書院, p.82-110.
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
中村純（1980）日本産花粉の標識. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

III. 平野遺跡における植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。

2. 試料

試料は、Ⅲ層～V層から採取されたA～Eの5点である。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに直径約40 μm のガラスピーブを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーブ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーブ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10—5g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。メダケ節の換算係数は1.16、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

キビ族型、ウシクサ族A（チガヤ属など）

[イネ科—タケ亜科]

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

[イネ科ーその他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

[樹木]

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、その他

（2）植物珪酸体の検出状況

V層（試料E）からⅢ層（試料A）までの層準について分析を行った。その結果、最下位のV層下部（試料E）では、ミヤコザサ節型が比較的多く検出され、キビ族型、ウシクサ族A、クマザサ属型なども検出された。V層上部（試料D）では、ミヤコザサ節型が増加しており、樹木（その他）も検出された。Ⅳ層（試料C）からⅢ層（試料A）にかけても、おおむね同様の結果であるが、クマザサ属型は見られなくなっている。また、試料Cではクスノキ科が検出され、試料Aではメダケ節型やブナ科（シイ属）も検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。なお、すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく、落葉樹では形成されないものも多い。

5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

V層の堆積当時は、クマザサ属（おもにミヤコザサ節）などのササ類を主体として、キビ族やウシクサ族などもみられるイネ科植生であったと推定される。タケ亜科のうち、メダケ属ネザサ節は温暖、クマザサ属は寒冷の指標とされており、ネザサ率（両者の推定生産量の比率）の変遷は、地球規模の氷期一間氷期サイクルの変動と良く一致することが知られている（杉山・早田, 1996）。また、クマザサ属のうちミヤコザサ節は太平洋側の積雪の少ない比較的乾燥したところに分布している（室井, 1960）。このことから、当時は比較的寒冷で積雪の少ない乾燥した環境であったと推定される。

クマザサ属は氷点下5℃程度でも光合成活動をしており雪の中でも緑を保っていることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカなどの草食動物の重要な食物となっている（高槻, 1992）。遺跡周辺にササ類が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要である。

後期旧石器時代から縄文時代とされるⅣ層～Ⅲ層にかけては、ササ類はあまり見られなくなったと考えられ、この時期には遺跡周辺ではクスノキ科やシイ属などの照葉樹林が成立していたと推定される。花粉分析の結果によると、北部九州における照葉樹林の発達開始時期は、約8,000年前と推定されている（畠中ほか, 1998）。このことから、Ⅳ層～Ⅲ層の堆積時期は少なくとも約8,000年前より以降と考えられるが、照葉樹林起源の植物珪酸体の密度が低いことから、何らかの混入の可能性も想定される。今後、地点数や試料数を増やすなど、さらに詳しい調査が必要と考えられる。

文 献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告, 第31号, p.70-83.

杉山真二・早田勉（1996）植物珪酸体分析による宮城県高森遺跡とその周辺の古環境推定—中期更新世以降の氷期一間氷期サイクルの検討—。日本第四紀学会講演要旨集, 26, p.68-69.

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料				
		A	B	C	D	E
イネ科	Gramineae (Grasses)					
キビ族型	Paniceae type		8	22		7
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	42	8	22	21	7
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)					
メダケ節型	Pleioblastus sect. Medake		7			
クマザサ属型	Sasa (except Miyakozasa)			22	7	14
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa	35	83	51	150	50
未分類等	Others	14	15	7	7	22
その他のイネ科	Others					
表皮毛起源	Husk hair origin	14	8	7	7	7
棒状珪酸体	Rod-shaped	42	83	102	135	43
未分類等	Others	180	240	239	250	223
樹木起源	Arboreal					
ブナ科(シイ属)	Castanopsis		7			
クスノキ科	Lauraceae				7	
その他	Others					7
植物珪酸体総数	Total	340	443	479	585	375

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²·cm)

メダケ節型	Pleioblastus sect. Medake	0.08				
クマザサ属型	Sasa (except Miyakozasa)		0.16	0.05	0.11	
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa	0.10	0.25	0.15	0.45	0.15

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	Pleioblastus sect. Medake	44				
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa		52	11	42	
クマザサ属型	Sasa (except Miyakozasa)					
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa	56	100	48	89	58

表1 植物珪酸体分析結果

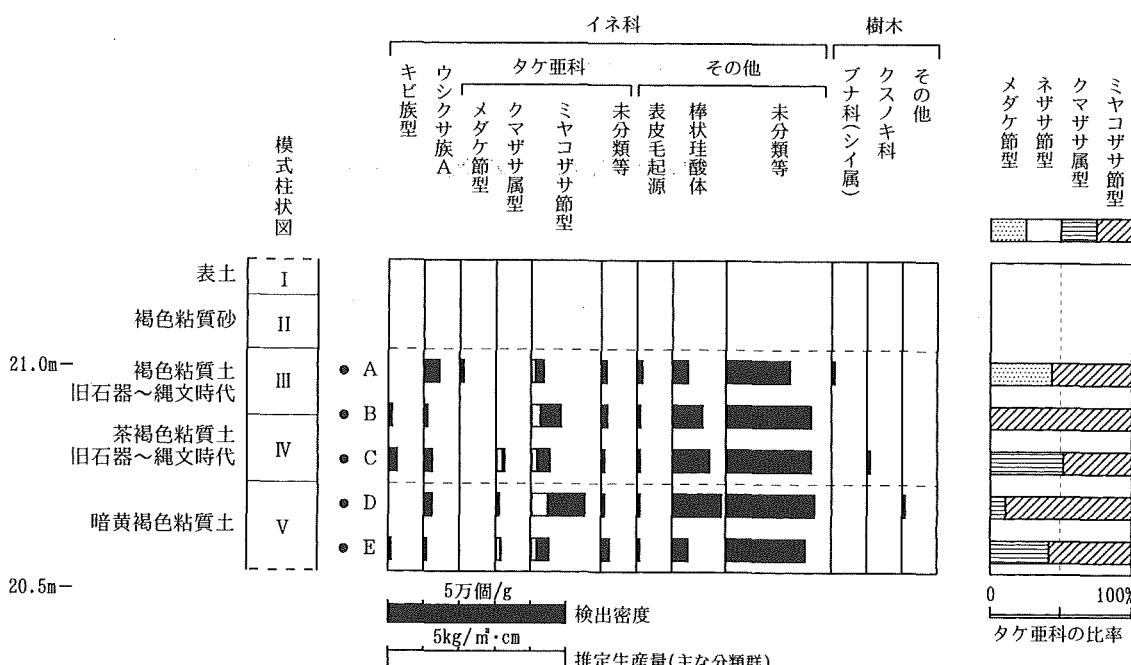
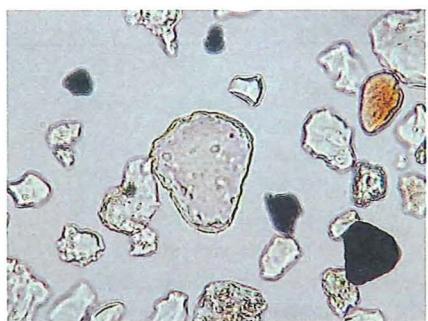


図1 基本土層における植物珪酸体分析結果



キビ族型
B



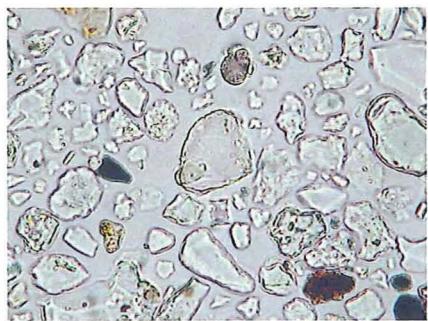
ウシクサ族A
C



ウシクサ族A
D



ミヤコザサ節型
E



ミヤコザサ節型
F



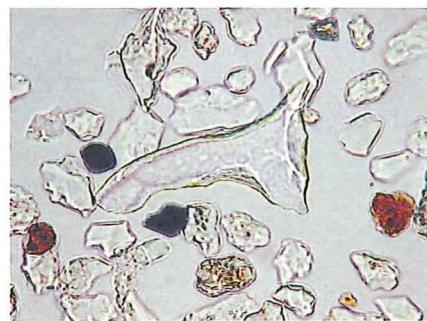
ミヤコザサ節型
G



棒状硅酸体
H



ブナ科(シイ属)
I



クスノキ科
J

植物硅酸体の顕微鏡写真 ————— 50 μm

杉山真二 (1999) 植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史. 第四紀研究. 38(2), p.109-123.

杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール). 考古学と植物学. 同成社, p.189-213.

高槻成紀 (1992) 北に生きるシカたち—シカ、ササそして雪をめぐる生態学—. どうぶつ社.

畠中健一・野井英明・岩内明子 (1998) 九州地方の植生史. 図説日本列島植生史. 朝倉書店, p.151-161

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

室井綽 (1960) 竹籠の生態を中心とした分布. 富士竹類植物園報告, 5, p.103-121.

圖 版

梶谷城跡より



遺跡遠景



A地点完掘全景
(北から)

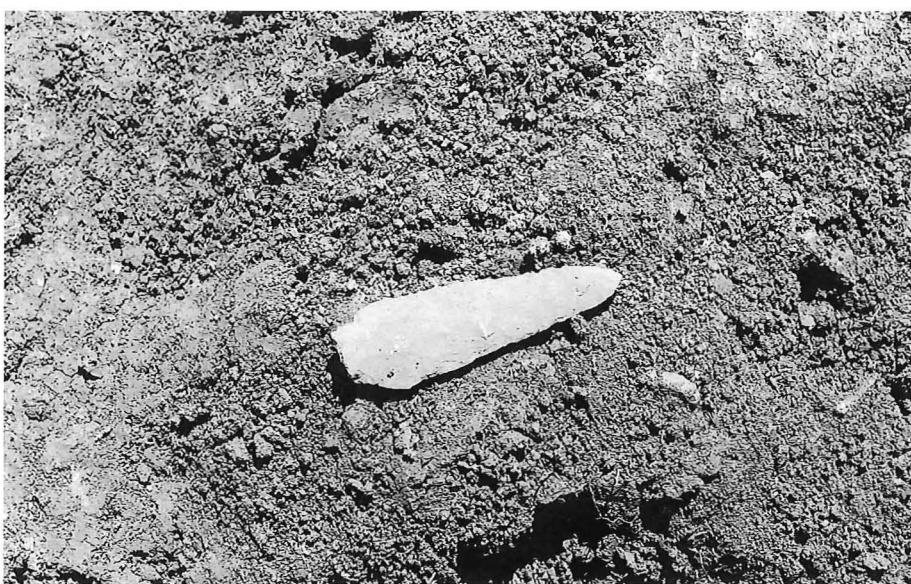




調査風景

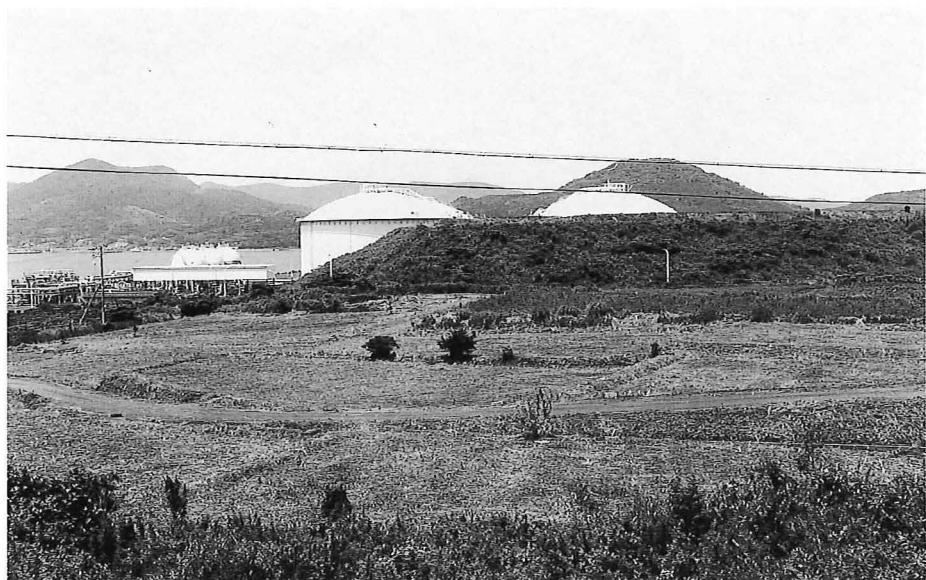


A地点c—8区 北壁



A地点石棺出土状況

B地点遠景

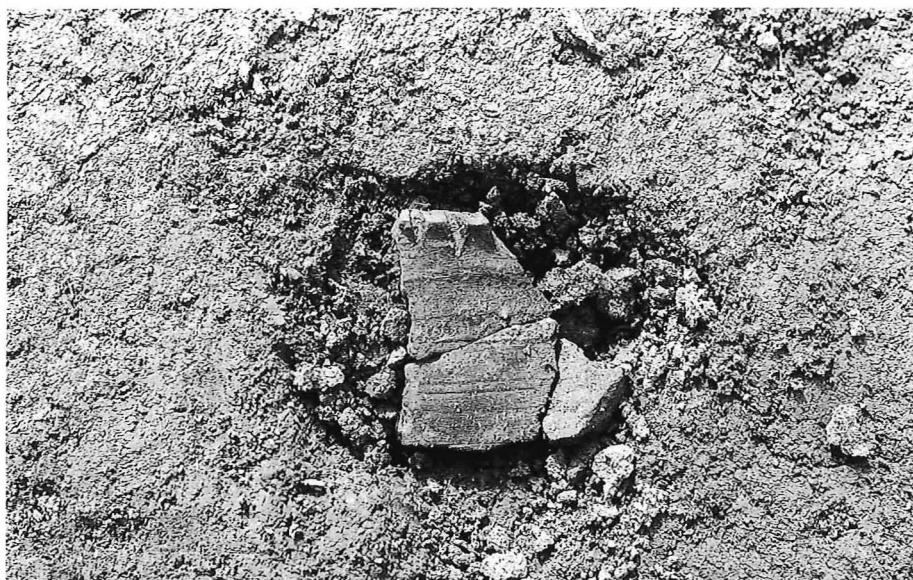


B地点h—20区 西壁



B地点 3層遺物
出土状況（北から）





B地点 刻目突帯文
土器出土状況



B地点 4層遺構検出
状況（北から）



B地点 ピット35検出
状況（土器・黒曜石
片集中）

B地点 ピット1 検出
状況（埋甕・石鏃）



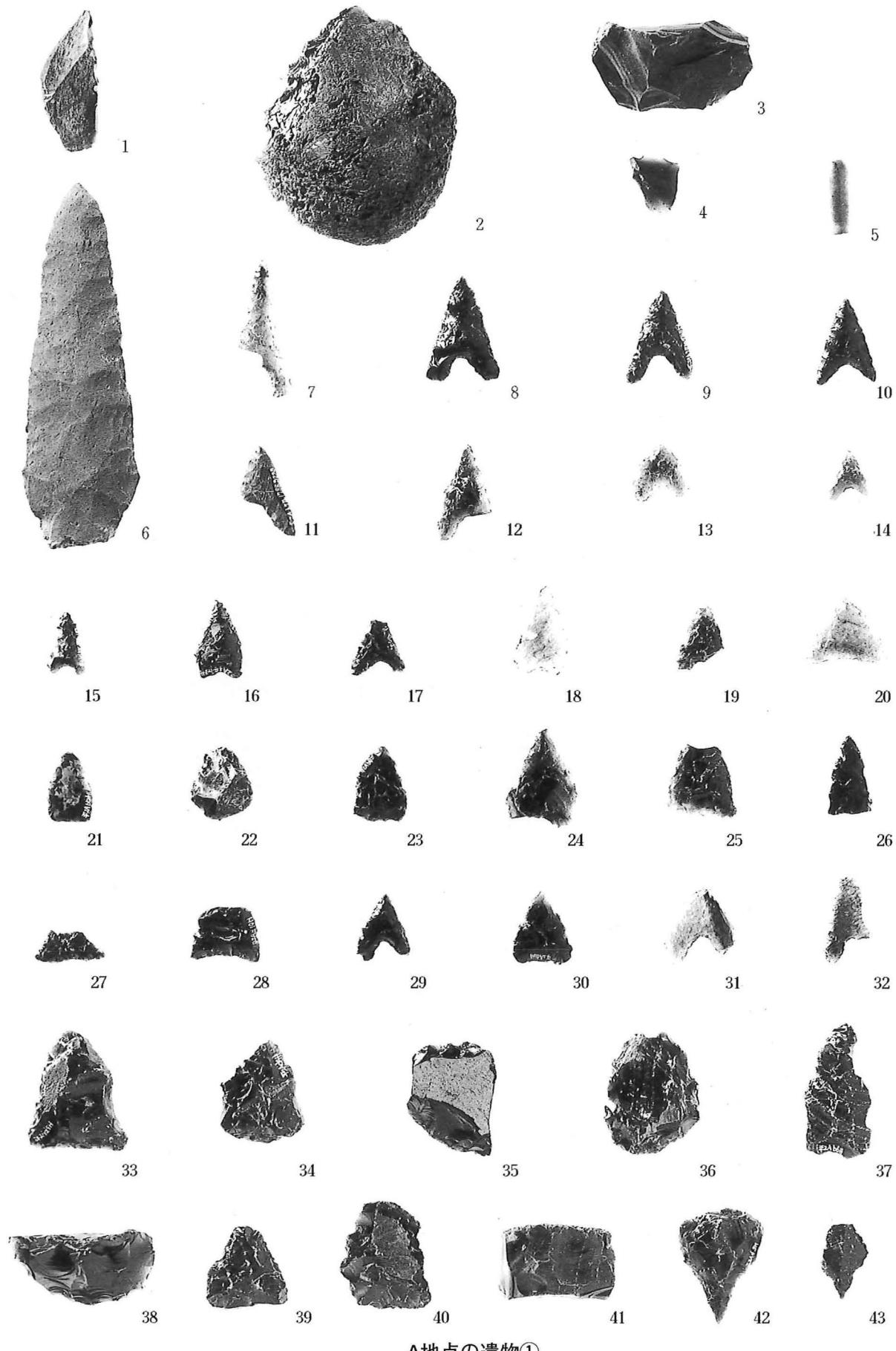
B地点 ピット1 検出
状況（接写）



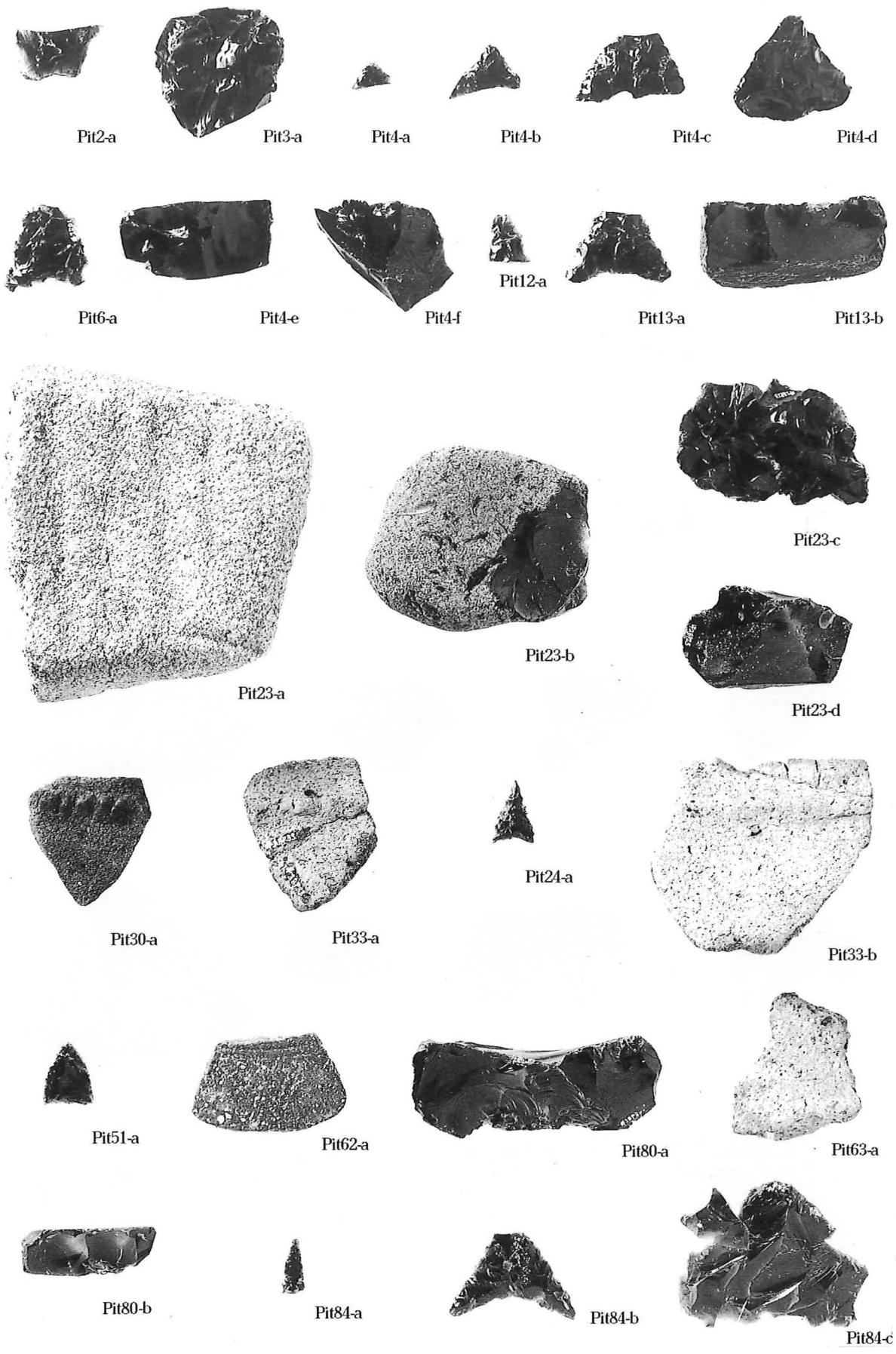
B地点 ピット82内
出土遺物



図版6

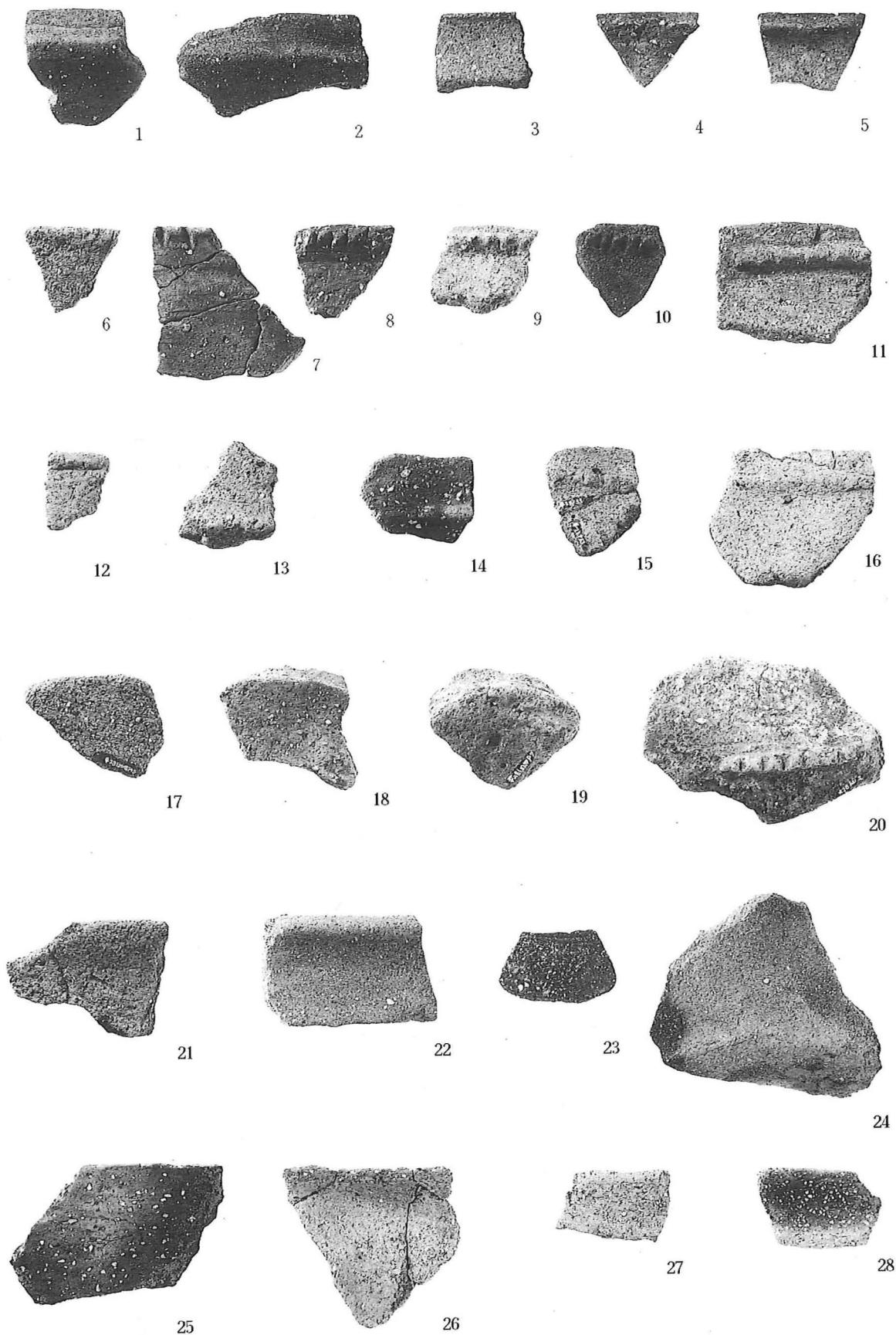


A地点の遺物①

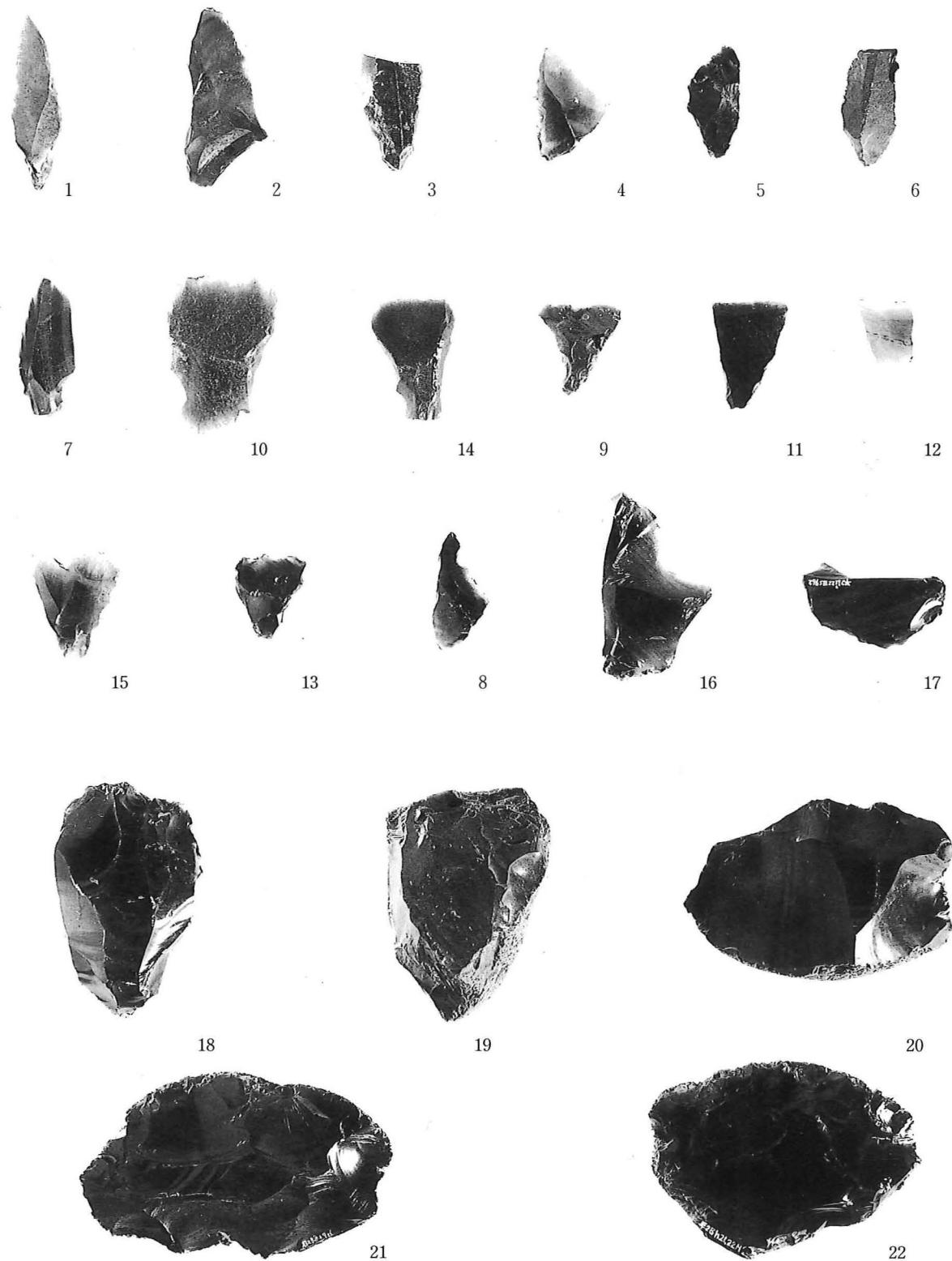


遺構内出土遺物

図版8

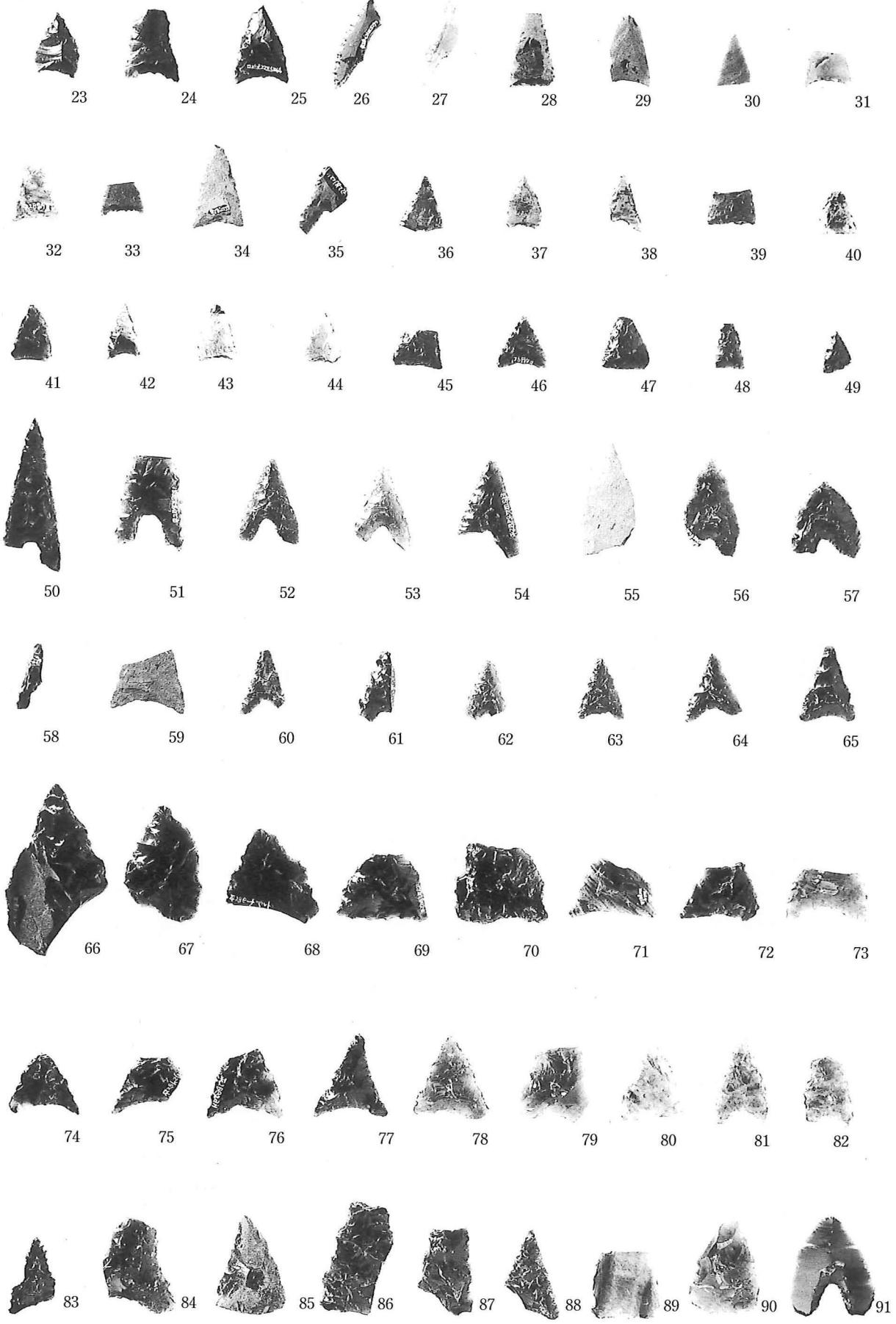


B地点の遺物①

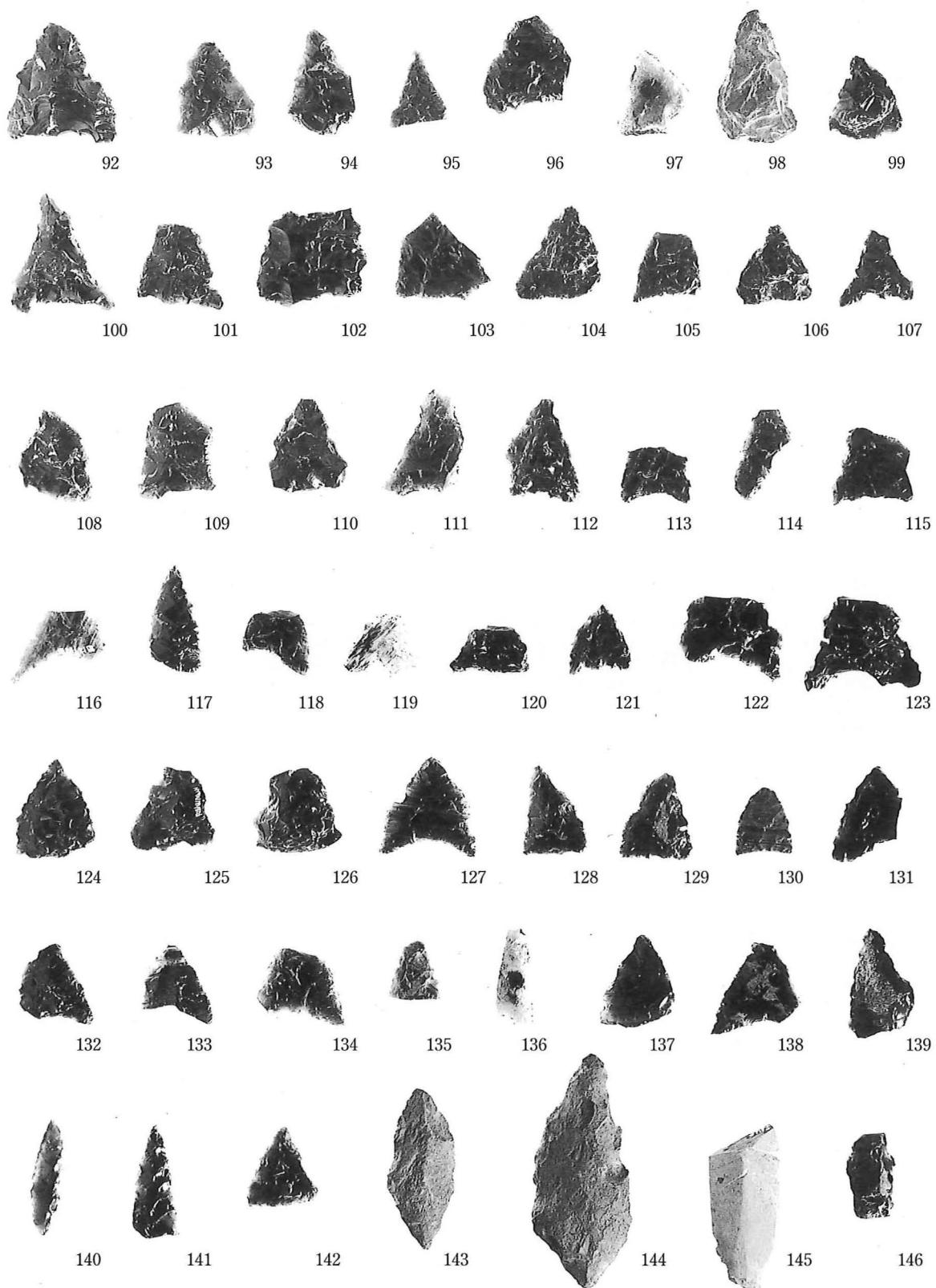


B地点の遺物②

図版10



B地点の遺物③



B地点の遺物④

図版12



147



148



149



150



151



152



154



155



156



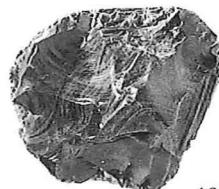
157



158



159



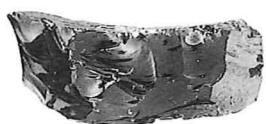
160



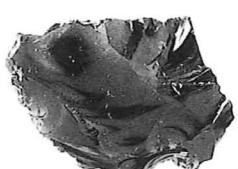
161



162



163

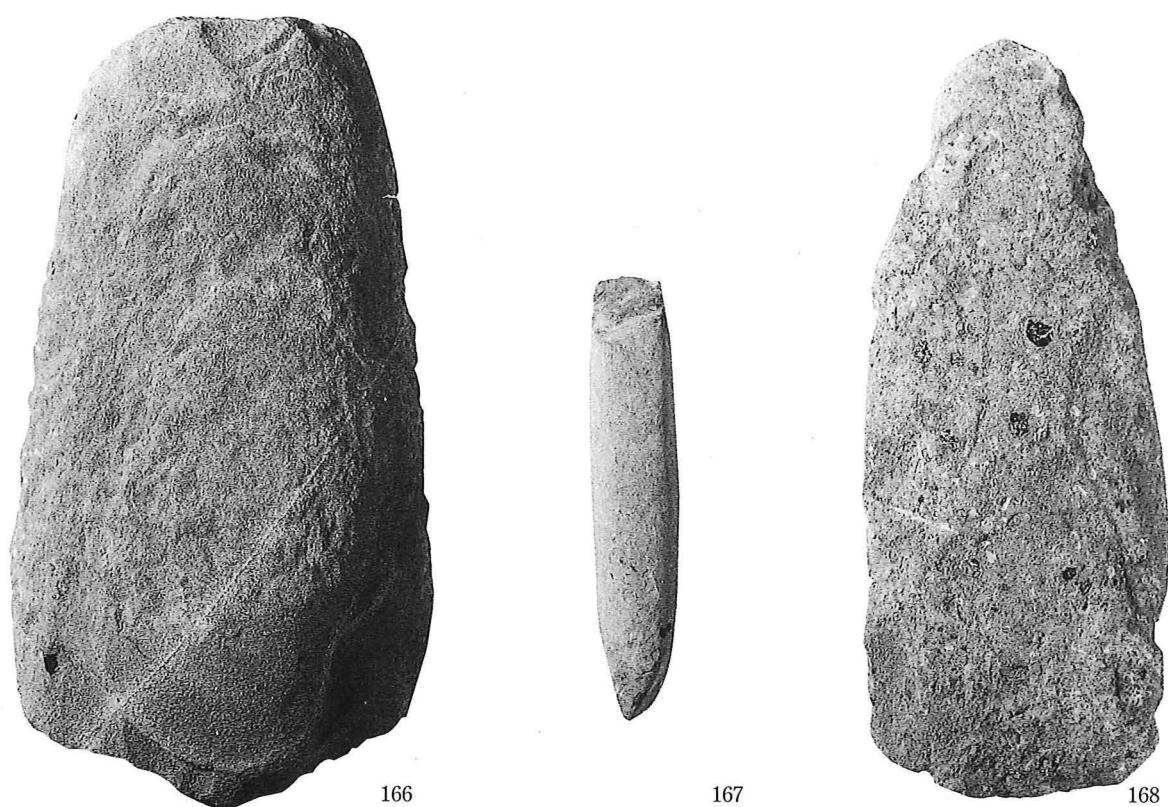


164



165

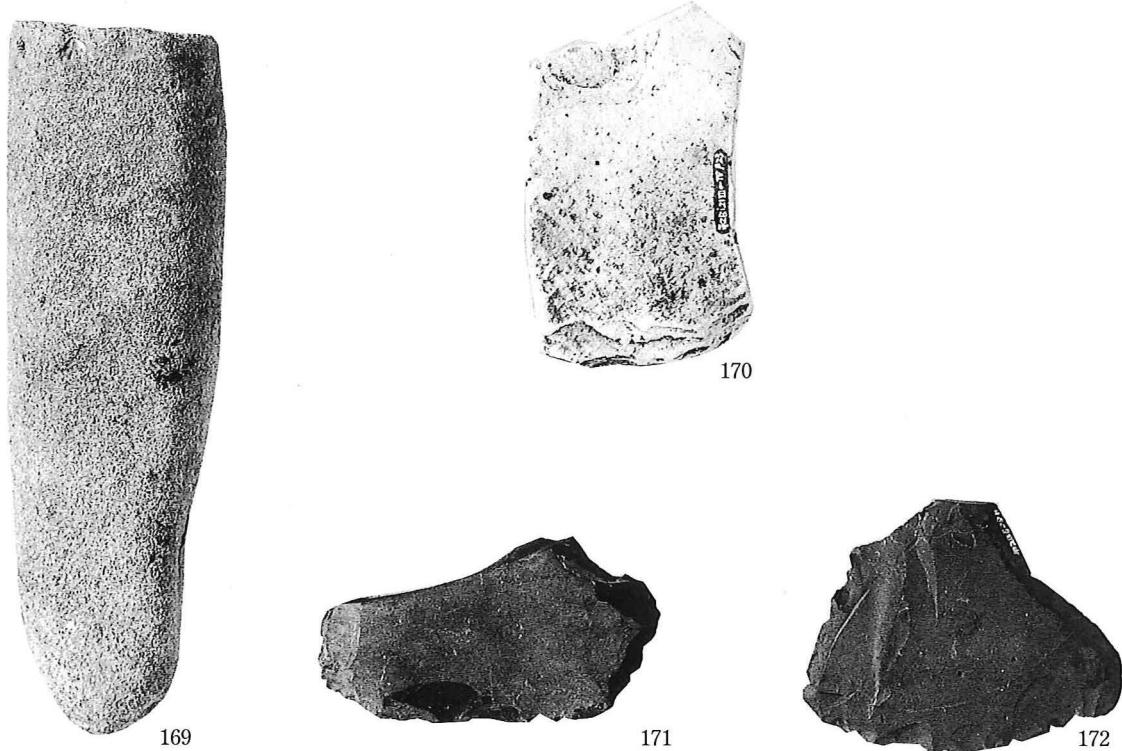
B地点の遺物⑤



166

167

168



169

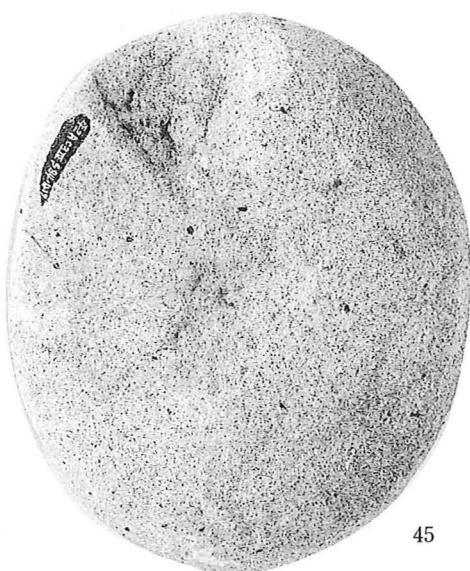
171

172

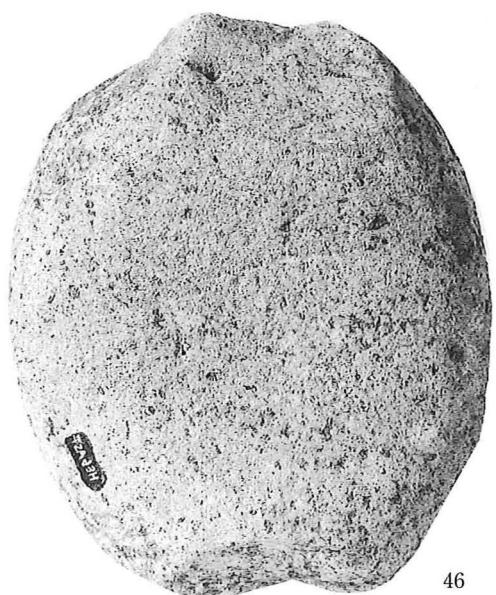
B地点の遺物⑥



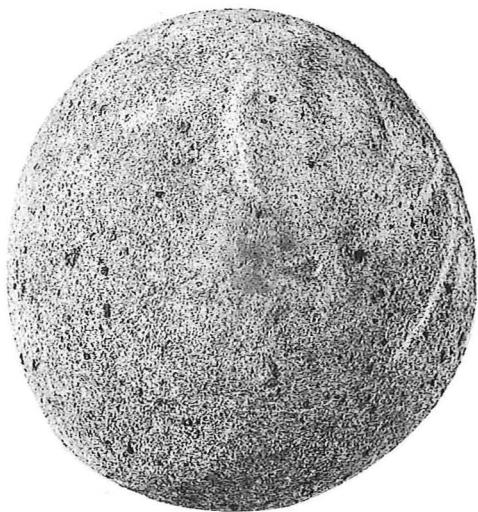
173



45



46



A地点の遺物②とB地点の遺物⑦

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ひらのいせき							
書名	平野遺跡							
副書名	液化石油ガス国家備蓄福島基地建設事業に伴う緊急発掘調査							
卷次								
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第160集							
編著者名	福田一志・高原愛							
編集機関	長崎県教育委員会							
所在地	〒850-0007 長崎市江戸町2-13 TEL (095) 824-1111 (代表)							
発行年月日	西暦2001年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ 一 ド 市町村	北 緯 。〃〃	東 緯 。〃〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
ひらのいせき 平野遺跡	ながさきけん 長崎県 きたまつうらぐん 北松浦郡 ふくしまちょう 福島町	42386	25	33° 20' 59"	129° 48' 49"	19990412 ～ 19991227	4,700m ²	工場建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
平野遺跡	旧石器 縄文 弥生	縄文	縄文時代晩期 の土壙	石鏃 石核 縄文晩期土器			土壙内から晩期 の土器片とともに 黒曜石製剥片 や石鏃が集中して出土	

長崎県文化財調査報告書 第160集

平野遺跡

2001. 3. 30

発行 長崎県教育委員会

長崎市江戸町2番13号

印刷 有限会社 つじ印刷